立ヶ花遺跡

新立ヶ花橋取付道路用地内
発掘調査報告書

1991−3

中野市教育委員会

立ヶ花遺跡

新立ヶ花橋取付道路用地内
発 掘 調 査 報 告 書

1991−3

中野市教育委員会

序

当市は、関越自動車上越線、オリンピック関連道路等の高速交通事業が具体化し、いよいよ着工目前の時を迎えております。

市の主要道路である県道中野豊野線も拡幅改良が計画されるなかで、現立ヶ花橋（鉄橋）の老朽化に伴い、現橋の下流50ｍの位置に時代の要請に添った新たな橋の建設が計画されました。

この橋からの取付道路となるところに立ヶ花遺跡が所在し、関係者による協議の結果、緊急発掘調査を実施して記録保存をはかることになりました。

調査にあたっては、工事主体者である中野建設事務所長と中野市長との間で委託契約を締結し、中野市教育委員会が発掘調査を担当し、平成元年度、2年度の2ヶ年にわたって実施したものです。

立ヶ花遺跡は、千曲川沿いの自然堤防上にあり、調査の結果、縄文時代前期の資料を中心に、古墳時代にわたる多くの貴重な遺構・遺物を検出するなど、大きな成果を上げることができました。

今回の二度にわたる調査にあたり、年末の寒さと凍結の悪条件の中、ご苦労いただきました調査団ならびに、ご指導をいただきました県教育委員会、またご協力をいただきました工事主体者の中野建設事務所をはじめ、関係各位に感謝と御礼を申しあげます。

平成３年３月

中野市教育委員会

教育長　嶋　田　春　三

例　　言

1　本報告書は、新立ヶ花橋建設に伴う取付道路用地内で平成元年度及び2年度に行った中野市立ヶ花西原に所在する縄文前期後葉を中心とした立ヶ花遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は国庫補助事業で行われた。

3　発掘調査は第1次を平成元年11月22日から平成2年1月24日まで行い、続いて整理作業を行い、第2次を平成2年11月1日から12月15日まで行い、平成2年12月16日～平成3年3月末日まで整理作業を行って報告書を作成した。

4　本書の遺構図のＰは柱穴、ＳＫは土壙（坑）ＳＢは住居址を示す。

5　遺物実測図、拓影図は年次別に掲載した。

6　調査団の組織は、別項に記してある。

7　遺物洗浄、土器復原作業は参加者全員で行った。

8　本報告書の写真撮影、遺物実測図、原稿執筆、編集は、檀原長則、徳竹雅之が行った。

9　本報告書作成のための製図やトレース作業は、池田実男、湯本栄一、檀原みち江、池田正子、山崎のり子その他が行った。

10　出土遺物・実測図等は中野市歴史民俗資料館に保管している。

目　　次

序
例　　言

第Ⅰ章　発掘調査の経過　3
　第1節　発掘調査に至る経過　3
　第2節　調査日誌　4
　第3節　調査団の編成　10
第Ⅱ章　調査地周辺の環境　11
　第1節　遺跡の立地と歴史的環境　11
　第2節　層序　13
　第3節　研究史概説　13
　第4節　周辺の諸磯式併行期の遺跡　15
第Ⅲ章　調査の経過　19
　第1節　遺構・遺物の分布状態
　　<1号住居址>　19
　　<2号住居址>　20
　第2節　第2次(1990)調査の概要　20
　第3節　縄文時代の遺構について　32
第Ⅳ章　立ヶ花遺跡の土器概説　40
　第1節　土器編年試案　40
　第2節　第1群諸磯a式(新)段階の土器　40
　第3節　関西系土器(北白川Ⅲ式土器)　40
　第4節　諸磯b式(古)段階の土器　42
　第5節　〃　(中)　〃　43
　第6節　〃　(新)　〃　43
　第7節　諸磯c式(古)　〃　43
　第8節　〃　(新)　〃　44
　第9節　弥生時代後期・箱清水式土器　44
　第10節　古墳時代Ⅱ期古段階(五領式(新))併行土器　44
　第11節　古墳時代Ⅳ期中段階(鬼高式)併行土器　44
第Ⅴ章　立ヶ花遺跡の石製品について　74
第Ⅵ章　まとめ　90

挿図目次

第1図　立ヶ花遺跡位置図　1
第2図　立ヶ花遺跡周辺図　2
第3図　中野・飯山地方の諸磯式併行期の主な遺跡　17
第4図　立ヶ花遺跡調査全体図　18
第5図　1号住遺物検出図　21
第6図　〃　遺構図　22
第7図　〃　土坑(壙)実測図　23
第8図　〃　柱穴実測図　24
第9図　2号住遺物検出図　25
第10図　〃　遺構全体図　26
第11図　〃　柱穴実測図(1)　27
第12図　〃　〃　(2)　28
第13図　〃　土坑(壙)実測図(1)　29
第14図　〃　〃　(2)　30
第15図　〃　柱穴・火床・土坑(壙)実測図　31
第16図　〃　柱穴実測図(3)　33
第17図　第2次調査遺物検出図(C地点東の南)　34
第18図　〃　(C地点の東)　34
第19図　〃　(C地点の西)　35
第20図　〃　遺構全体図(C地点の東)　36
第21図　〃　柱穴実測図(C地点の東)　37
第22図　〃　遺構実測図(C地点の西)　38
第23図　〃　柱穴実測図(C地点の東)　41
第24図　土器実測図(第1次)　46
第25図　〃　(〃)　47
第26図　土器拓影図(〃)　48
第27図　〃　(〃)　49
第28図　〃　(〃)　50
第29図　〃　(〃)　51
第30図　〃　(〃)　52
第31図　〃　(〃)　53
第32図　〃　(〃)　54
第33図　〃　(〃)　55
第34図　〃　(〃)　56
第35図　〃　(〃)　57
第36図　実測拓影図(第1次)　58
第37図　土器実測図(第2次)　59
第38図　土器拓影図(〃)　60
第39図　土器実測図(〃)　61
第40図　土器拓影図(〃)　62
第41図　〃　(〃)　63
第42図　〃　(〃)　64
第43図　〃　(〃)　65
第44図　〃　(〃)　66
第45図　〃　(〃)　67
第46図　〃　(〃)　68
第47図　〃　(〃)　69
第48図　〃　(〃)　70
第49図　土器実測・拓影図(第2次)　71
第50図　石器実測図(第1次)　79

第51図	〃	（〃）	80
第52図	〃	（〃）	81
第53図	〃	（〃）	82
第54図	〃	（〃）	83
第55図	〃	（第２次）	84
第56図	〃	（第２次）	85
第57図	〃	（〃）	86
第58図	〃	（〃）	87
第59図	〃	（〃）	88
第60図	〃	（〃）	89

表　目　次

第１表	柱穴・土壙(坑)計測表	39
第２表	編年表	45
第３表	土器検出表	72
第４表	石器観察表	74

写真図版目次

図版１	調査風景	7
図版２	豊野町から見た遺跡遠景	12
図版３	遺跡南側地層の断面	12
図版４	西方から見た遺跡全景	91
図版５	南から見た1号住居址	91
図版６	緒磯ｂ式土器と在地系土器	91
図版７	1号住居址の北壁	91
図版８	1号住居址の西北部	92
図版９	1号住居址東部上層の古墳時代の土器	92
図版10	1号住居址北側の石皿と石錘	92
図版11	東南から見た1号住居址	92
図版12	1号住居址の土壙(坑)(1)	93
図版13	土壙(坑)(1)のチップ	93
図版14	土壙(坑)(1)の周辺	93
図版15	南から見た1号住居址	93
図版16	南から見た2号住居址	94
図版17	漁撈形ポイントの出土	94
図版18	土壙(坑)(4)(5)	94
図版19	〃	94
図版20	2号住居址の土壙(坑)(1)	95
図版21	〃	95
図版22	2号住居址の土壙(坑)(2)	95
図版23	南から見た2号住居址	96
図版24	北から見た2号住居址	96
図版25	東方から見た平成2年度の調査地点	96
図版26	平成2年度調査のＣ地点西側全景	97
図版27	Ｄ地点の調査	97
図版28	Ｃ地点西の土器出土状況	97
図版29	Ｃ地点西の土器・石錘などの出土状況	98
図版30	〃　西のけつ状耳飾破片の出土	98
図版31	〃 土器の出土状況	98
図版32	Ｃ地点西の火床のあと	98
図版33	〃　東南の土器出土状況	99
図版34	〃　左部分	99
図版35	〃　右部分	99
図版36	Ｃ地点東の土器出土状況	100
図版37	〃	100
図版38	〃　土壙状の土器出土状況	100
図版39	〃　石匙の出土状況	101
図版40	〃　古墳時代の土器出土状況	101
図版41	〃　北から見た土器集中上層部分	101
図版42	西から見た調査地全景	102
図版43	東から見たＣ地点西の土壙(坑)柱穴など	102
図版44	東から見た平成元・２年度調査地全景	102
図版45	1号住居址出土深鉢	103
図版46	Ｆ20出土の土器	103
図版47	Ｈ20　〃	103
図版48	Ｈ20　〃	103
図版49	Ｇ3	103
図版50	Ｈ21	103
図版51	Ｈ20	103
図版52	2号住居址出土土器	104
図版53	Ｆ20出土の土器	104
図版54	2号住居址　ＳＫ3東出土土器	104
図版55	Ｇ18出土の土器	104
図版56	〃	104
図版57	1号住居址ＳＫ1出土土器	104
図版58	〃　上層出土土器	104
図版59	第Ⅳ群土器	104
図版60	第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器	105
図版61	第Ⅲ群土器	105
図版62	第Ⅲ・Ⅳ群土器	105
図版63	Ｅ38出土の土器	105
図版64	第Ⅴ・Ⅵ群土器	105
図版65	第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群の土器	106
図版66	2号住居址ＳＫ3出土土器	106
図版67	第Ⅳ・Ⅴ群土器	106
図版68	第Ⅵ群土器	106
図版69	第Ⅵ・Ⅶ群土器	106
図版70	第Ⅵ群土器	106

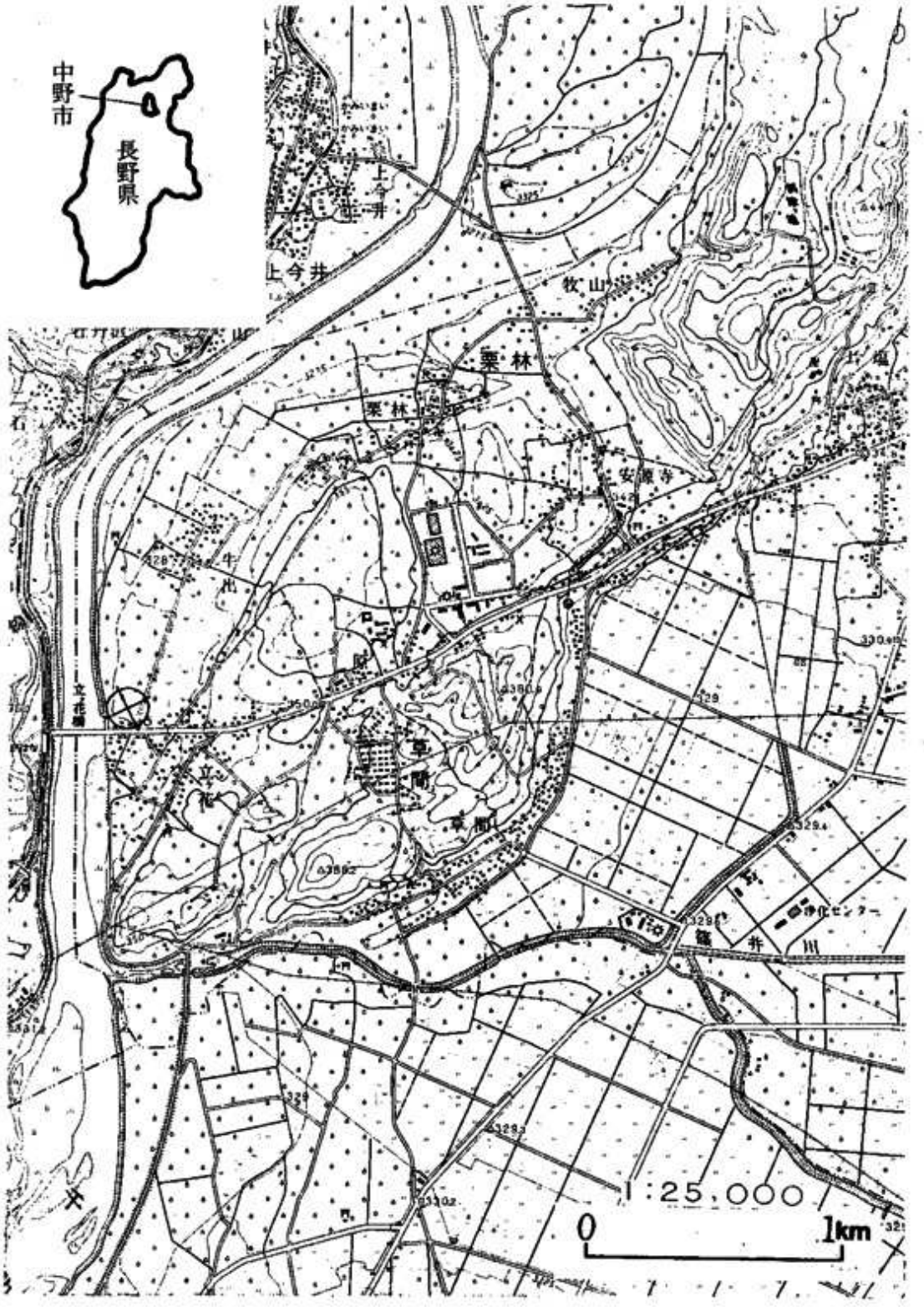


図1　立ヶ花遺跡位置図　1／25000実大

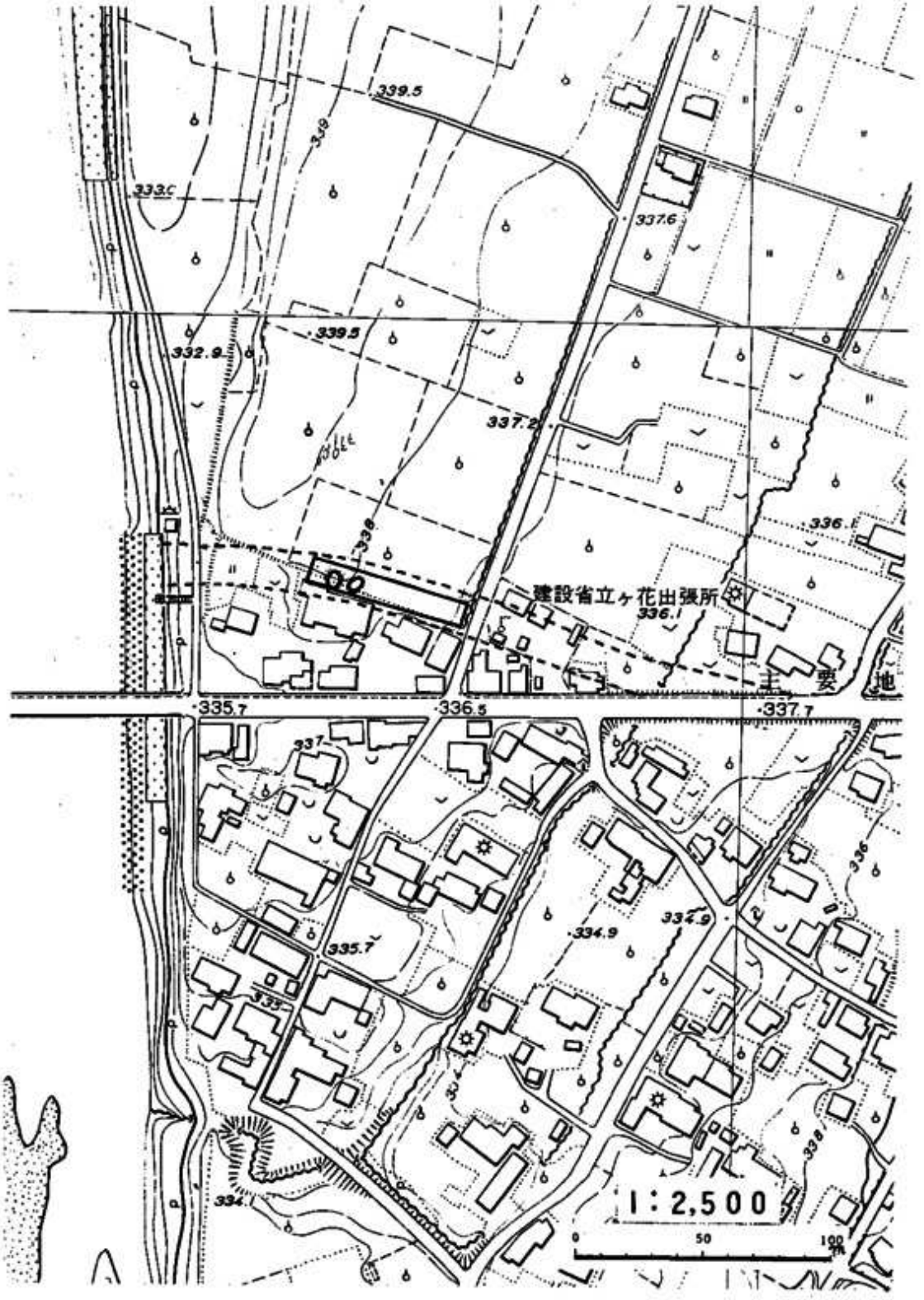


図2　立ヶ花遺跡周辺図　1／2500実大

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

近年の道路交通網整備事業は、多くの物資及び情報の交流をな行うとともに、地域発展の重要施策と考えられ、全国的に推進されている。

現在長野県内においても、高速自動車道並びに新幹線の整備が急ピッチで進められている。当市でも高速道路の建設計画が樹立され、いよいよ施工段階となり、この高速道路建設に伴う既存道路等の整備事業が進められている。

なかでもインターチェンジ等の建設が予定されている高丘地区は、今後数年間にわたり、大規模な工事の実施されるものと予想される。

今回の調査は、中野建設事務所が施工する県道中野豊野線立ヶ花橋梁整備事業に係る取り付け道路建設工事に伴うもので、工事予定地域が立ヶ花遺跡の範囲内にあるため実施されることとなった。

昭和63年10月26日に長野県教育委員会指導主事、事業主体の中野建設事務所、地元学職者、市担当課職員が出席し、現地において協議を実施し工事施工に先立ち発掘調査を行ない記録保存をはかることと決定した。

後日、長野県教育委員会教育長から事業主体及び市教育委員会あて協議結果について文書で回答を受けた。さらに平成元年10月各担当者が出席のうえ細部の協議を実施するとともに、2年度以後の工事予定地域の保護協議を行った。

発掘調査は、中野市教育委員会が事業主体者から委託を受けて実施することとなった。平成元年8月23日委託契約を締結し、調査団の編成を行なうとともに、必要な手続きを完了し、関係地主及び地元区長ほか関係者に発掘作業への協力を要請した。

第２節　調査日誌

1989年

11月22日　調査区の設定及び清掃。

23日　同　上

24日　発掘資材の搬入及びテント設置。

26日　発掘地点内に東西方向のトレンチ3本堀り下げ。

27日　同　上

28日　同　上

29日　同　上

12月 4日　大型バックホーで調査地点西側から表土排除。

5日　同　上

6日　№31グリット地点から精査開始。
溝状の遺構、住居址・土坑の一部を検出、土器片（縄文前期、弥生後期、土師器）石器（石斧・石匙・石鏃）を検出。

8日　№25～26グリットを精査、2番目の住居址の落ち込みを検出。

9日　№24・25グリットを精査。
併行して前日確認の住居址プランを追う。

10日　同　上

11日　調査区中央のトレンチを拡張。
〈 一時、風巻、桜沢遺跡調査のため中止 〉

18日　中央トレンチ堀り下げ、№14グリット地点で南北トレンチ掘り下げ、遺構なしと判断する。

19日　№22・23グリットを精査、同グリット北壁に落ち込みらしきプランを確認する。午後降雨のため作業中止。

20日　住居址プランを清掃、写真撮影、柱穴の掘り下げを開始。

22日　2軒の住居址面を確認、1号住居址から古墳時代土器、縄文前期土器及び深さ10cm以下の差で存在する羽状縄文の深鉢片を多数検出、地形測量を続行。

23日　縮尺1／100の全体測量を開始。
1号住居址の掘り下げ開始。

25日　1号住居址の掘り下げ継続、同所を平板による平面測量開始。(縮尺1／20)
№27～31グリット南壁セクション取り開始。

26日　1号住居址の写真撮影及び遺物取り上げ。
№27～31グリット北壁並びに№32グリット西壁のセクション取り。

27日　1号住居址から波状口縁、キャリパー形、浮線文の深鉢土器を中央部から検出諸磯b式で搬入品と思われる逸品である。浅鉢の赤彩土器片・有孔鍔付土器・石錐・石鏃・磨石・凹石などを検出、写真撮影、測量用方眼系張り。

28日　1号住居址の方眼測量開始。

2号住居址掘り下げ、(1号住居址とほぼ同時期と推定)柱穴、土坑(壙)を多数検出、土坑から管玉状の垂玉を検出、羽状縄文土器が優勢と印象づけられる。

〈 29日から年末年始の休み 〉

1990年

1月 5日　調査再開、1号住居址方眼測量を午前中で終了、午後土器取り上げ、横形の石匙、黒曜石製の小形石鏃などを検出、柱穴、炉跡など探索。

6日　1号住居址の床面清掃、北側から火床2ヵ所検出、床面から小形凹石、滑石製の玦状耳飾の破片を検出、南側に径1m深さ1mの貯蔵穴（土坑）が展開している。中から大形深鉢土器を検出。柱穴・土坑断面測図。土器収納箱を整理場所へ移送する。

7日　雪花が舞い寒さが厳しい。

柱穴は床面から深さが10cmほど砂などを充填した中心部を除いて異常に硬く柱穴位置をほぼ判明する。石匙、ミニチュア土器を検出、SK2に剥片集中個所あり。

8日　1号住居址の柱穴、土拡掘り下げ、清掃後写真撮影。南側拡張するが、潅がい用パイプの施設あり。

2号住居址を掘り下げ、SK1の上層から漁撈形のポイントを検出。下層から土器片多数検出。

9日　1号住居址平板測量、断面図作成、北側の断面測図、土器取り上げ、清掃後写真撮影、2号住居址掘り下げ、SK1の底辺から深鉢形土器片を検出。

10日　午前中小雨のため土器洗い。

午後1号住居址SK3を掘り下げ、写真撮影。2号住居址掘り下げ。

11日　2号住居址の壁深い所で9cmあり、床面上の土器清掃、写真撮影、測量用方眼糸張り。北側トレンチ断面測図。

1号住居址平板測量、断面測図。

12日　1／100地形図作成。

1号住居址1／10方眼測量4組、炉のそばから羽状縄文土器、退化した木の葉文の鉢形土器片検出、北辺土師器壺、床面から10cm浮いた状態にあり。

北グリット壁面の土器、1号住居址の北で5cm、2号住居址の東北で15cm、そ

の東方で20cmと地山上から平らに浮いた状態にあり、いずれも地下30cmの深さである。

1月13日　1号住居址は短径6.3m直径5.7m＋α(1.5m)で6.2m位、2号住居址は短径4.9m直径5.7mの楕円形と判明、床面土器は諸磯b式後半と判定された・2号住居址も火床2ヵ所、他に住居址東側にわずか焼けた箇所あり。石錐、石皿、凹石、石鏃、赤彩土器片などを検出。

14日　1号住居址床面遺構確認、写真撮影、柱穴、土壙多数を検出、掘り下げ、東側の火床は径55cm西側径30cmと判明。

16日　雪降りで1日土器洗い。

17日　2号住居址の柱穴、土壙掘り。ここも柱穴は硬く土砂が詰まり、土壙は軟らかな土で土器などと埋まっていた。SK3には土師器破片と焼土が埋まっていた。

18日　2号住居址の柱穴を約63基検出、1／10方眼測量、柱穴掘り下げ。

19日　2号住居址の柱穴掘り下げ。硬く閉口する。

20日　2号住居址柱穴掘り、1／10平面測図。東側も拡張して掘り下げ、柱穴、焼土あり。

21日　2号住居址の水系断面測図、平板測図。
東南部は後の遺構と重複する。南側拡張して掘る。貯蔵穴（土坑）5基検出。

22日　2号住居址柱穴断面測図、平板測図、1・2号住居址全体写真撮影、1号住居の大きい方の火床径70cm中央上幅15cm深さ25cmで両端に杭の跡あり。

23日　2号住居址南側拡張し掘り下げ。1／10水系測図、平板測図終了。遺構をシートで覆う。

24日　地形測量し、テントなど移動し本年度の現地調査終了する。

25日　市民プール事務室で、土器洗い、マーキング、図面整理など報告書作成作業を実施する。

3月20日

調 査 日 誌　（第2次）

1990年

11月 1日(木)晴　被覆シート除去、草刈り。
2日(金)〃　草刈り。
5日(月)〃　〃
6日(火)〃　〃
7日(水)〃　清掃、昨年度調査地点の点検。
8日(木)〃　〃

9日(金)曇　　表土剥ぎ。

10日(土)晴　　〃

12日(月)〃　　〃　　精査。

13日(火)〃　　〃　　〃

14日(水)〃　　調査地区内の断面部の地層の確認。

15日(木)　　清掃、除土作業、グリット設定、南側断面つくり、落ち込み検出。A地点土器展開す。

16日(金)　　A地点排土平面作業、ピットあり、黒曜石剥片集中点あり、口縁部文様帯斜格子文交点に点があり、胴部は縄文施文となる土器片あり、B区排土作業、遺構は発見できず、遺物は、ローリングされた小破片のみ。

17日(土)晴　　A地点清掃写真、断面つくり、C地点表土剥ぎ、土器集中点あり、石鏃、石きり出土・B地点清掃、北側部分で土師器片少量あったのみ、現代の配管工事のあとが横断していた。

19日(月)　　歴史民俗資料館よりプールに整理作業用具引越し、午後土器洗い。

20日(火)曇　　C地点拡張、B地点表土剥ぎ、A地点東側断面写真1／20・1／10実測図作製。

21日(水)時雨　　B地点最終写真、C地点掘り下げ、土師器の小形甕など僅かの上層にあり、石鏃に精細なもの（狩猟用）粗大なもの（漁撈用）がある。石匙、磨石斧片、石錐、石鏃、凹石、敲打石、A地点、1／20平板

1　調査風景

測量、1／10水糸方眼測図。

22日(木)晴　A地点測図続行、南側断面図、東側、石屑片、黒曜石その他集中箇所あり、B地点グリット杭布設、西側は住居址部分か。石匙完型品2個並ぶ、黒土層に土器片集積の感じあり。

24日(土)晴　C地点北側、清掃写真、南側方眼測量、A地点西側土器とり上げ下層より玦状耳飾（半欠）、石匙、打石斧出土、この下より竹管文土器片出土。

26日(月)　C地点測図、A地点掘り下げ。ピットなど確認、畦をとる。10時頃より降雨、土器洗い、接合、注記。

27日(火)晴　A地点掘り下げ、C地点測図。

28日(水)雨　雨天のため現場にて図面の整備、土器洗い、接合。

29日(木)曇　C地点掘り下げ南側に土器集中2ヶ所あり。A地点の土拡、土器片あり

12月 1日(土)晴　精査。

3日(月)晴　C地点南、西南2回目土器取り上げ、無文多孔浅鉢、細条線文土器、羽状縄文土器、同一レベルにあり。南側中央北に石匙1、浮線文の深鉢底部あり。写真撮影。A地点、東、ピット、土壙掘り、石匙1、打石斧1あり。

4日(火)　A地点、ピット、土坑(壙)掘り、一部写真、C地点南部分、拡張掘りこれより南側は住宅新築のため撹乱されていた。北側、土器片、記録して取り上げ。地山まで10cmの黒土の間層あり。千曲川工事事務所の東側の道路敷分の試掘をバックホーにて行う。試掘坑2本入れたが、遺構・遺物なし。下層より水が湧出する所があった。

5日(水)晴　C地点、畦をとり除く、写真。北側掘り下げ。黒土層中に土壙状に土器集積個所あり。A地点、ピット、土坑、精査堀、1／20測図。

6日(木)晴　C地点、南東壁、地上より10cm下（耕作土層下）に土師器、甕、正位にあり。器台脚部もあった。畦を除く。土坑状土器集中地点、2ヶ所となり、写真、測図、凹石などあり。南側の土器集中地点には、台石状の偏平石あり。

7日(金)晴　C地点、A地点、清掃、写真撮影、A地点ピット、土坑掘、測図、C地点北壁残り分掘り下げ、遠景写真。

8日(土)晴　A地点、測図、調査ほぼ終了。C地点北壁測図。南側、土器集中個所方眼測図、北側は昨年の続き、柱穴あり。高丘小学校生徒見学。

10日(月)晴　C地点、北土壙（SK1）諸磯b式後半土器、各種羽状縄文、縄文多数、斜格子目文も1点あり。南土坑（SK2）竹管文、条線文、縄文、

	無文浅鉢破片など、尖頭器状石器、凹石など、両者とも復原できる土器なし。南側を測図、南東部分の土坑（SK3）は径1.5mの円形、土器は細片、諸磯b式あり。 西側部分に地山上に少量の土器集中あり。赤彩浅鉢片、羽状縄文、深鉢片など。高丘小学校生徒見学。
12月11日(火)晴	C地点SK3、木の葉文の浅鉢片、羽状縄文、浮線文の浅鉢（搬入品）、深鉢片あり。地山上まで掘り下げ、A地点、土坑7ヶ所、柱穴15ヶ所、住居址の1部、1ヶ所、火床径30cm、2ヶ所あり。C地点、柱穴11ヶ所、土坑3ヶ所。
12日(水)曇	C地点、測図、清掃、柱穴の水をくみ出す。
13日(木)晴	昨年度分も含めて清掃。
14日(金)晴	全景写真、B地点の実測。
15日(土)晴	B地点の実測、土器、発掘機材の搬出。現場作業終了。
16日(日)晴	整理準備。
17日(月)晴	本格的に市民プールにおいて整理作業を開始する。
3月23日	整理終了。資材、機材の搬出。

第３節　調査団の編成

調査責任者	嶋田　春三	中野市教育委員会教育長
調査団長	金井　汲次	日本考古学協会会員・中野市文化財保護審議会長
調査主任	檀原　長則	日本考古学協会会員
調査員	田川　幸生	〃
〃	池田　実男	長野県考古学会会員
〃	藤沢　高広	〃
事務局	小野沢　捷	中野市教育委員会社会教育課長
〃	小林　紀夫	〃　歴史民俗資料館管理係長
〃	徳竹　雅之	〃　学芸員
協力団体	立ヶ花区	
参加者	古田　茂、樋口政勝、樋口義政、湯本栄一、内藤年男、常田　誠、秋山恒巳 栗原よしみ、山崎のり子、鈴木ひで、阿藤仁子、木下七奈、斎藤淑子、池田 寿子、池田きよ子、高相恵美、三浦四郎、小林資成、檀原みち江、関　増行 神田政博、佐藤芳太郎、金井英男、藤沢高広、荒井芳光、池田正子、近藤章 弘（順不同）	

本調査にあたっては、関係地主、中野建設事務所、北陸地方建設局千曲川工事事務所立ヶ花出張所の各位には格別の御配慮をいただき、また調査参加者には鋭意協力を賜わり、大きな成果をもって調査を終了できましたことを記して感謝申し上げる次第である。

第II章　調査地周辺の環境

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

善光寺平南部の長野市で千曲川と犀川が合流し、県境まで千曲川と称している。この千曲川は善光寺平の中央を北流し河幅を拡げているが、立ヶ花地籍に至って第3紀洪積層からなる渓谷に入り河幅が狭まられている。このため大洪水の時は、延徳低湿地に滞流し一大湖沼化を繰り返してきた。

この千曲川の水流がぶつかる丘陵の先端に、中世の立ヶ花城跡があり、地名の由来「立ヶ花」（館ヶ鼻）になったとも考えられる。この立ヶ花村の享保19年（1734）の「村明細帳」をみると①村高311石余②永166文川運上千曲川鯉鮒運上③渡し船2艘④家数44軒（33軒本百姓）舟人3人⑤人数210人などとなっていた。このように渡舟場が設けられていたが、明治15年（1882）に舟橋が設置された。明治21年（1882）5月信越線豊野駅が開業しこの立ヶ花地籍は、中野・山ノ内地方への西の玄関口として交通が頻繁となり、永久橋の設置を郡町村会で請願を続け、大正14年（1925）に舟橋の下流330ｍの所に鉄橋が架設された。

この高丘丘陵の高所に位置する立ヶ花表山へ昭和35年（1960）にし尿処理場を建設の際、ナイフ形石器を主体とする石器類が検出され、37年に神田五六氏、金井汲次らによって発掘調査が行われた。

また立ヶ花城跡の送電線鉄塔再建に伴う現状変更申請による第1回緊急発掘調査（団長金井汲次）が55年8月から9月にかけて行われた。

その結果中世の遺物のほか5世紀初頭と推定される祭祀遺構と遺物を検出し、U字状の溝址と弥生中期、栗林式の竪穴住居址を検出した。

第2回の調査は同工事の東方からの搬入路設置に伴うもので、箱清水期の遺構・遺物が検出された。

高丘丘陵は良質な粘土を産出することで有名だが、昭和44年3月立ヶ花表山736－1での採土工事に先立ちに伴い須恵器焼成窯址2基が調査された。

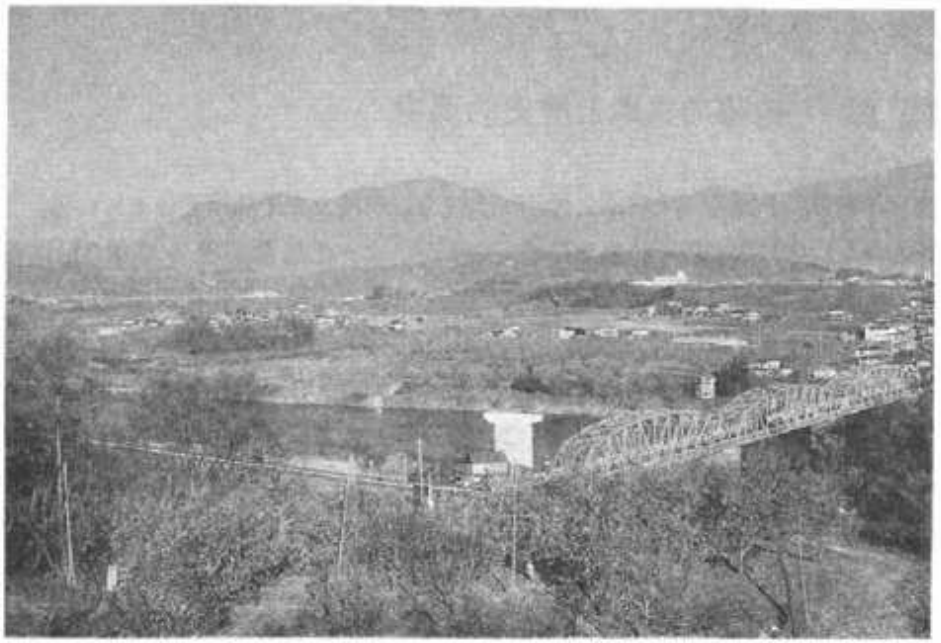
また平成元年10月から11月に同所の東方上段で県営畑地総合整備土地改良事業による農道整備に先立ち2基の須恵器窯址と採土場、排水溝（上器捨て場）の調査が行われた。

このように高丘丘陵には7～9世紀代にかけての須恵器焼成窯60数基が確認されている。

この良質の粘土を原料として屋根瓦の生産が明治中期から昭和35年（1960）頃まで続いた

この立ヶ花遺跡は、集落の北の千曲川の自然堤防上にあり、最高所で標高339.5ｍで千曲川水面までの高低差は約14ｍである。

調査地は千曲川右岸の水辺から東へ70ｍの地点から市道牛出線までの長さ60ｍ幅10ｍであ



2　豊野町からみた遺跡遠景

3　遺跡南側の地層の断面

り、これに沿う5m幅は採土済、その他の理由で調査不能であった。

検出した住居址は、自然堤防の頂点から東方で、約1mの落差の位置にあり、南東面が開け、西に千曲川を挟んで低い山なみ、北東に中野平を隔てて高社山（1,351.5m）から上信越国立公園の山々が見渡せる。

第2節　層　序

中野市の西を限る長丘丘陵は、下層から大川層、屋敷層、豊野層、平出層の順に堆積し、その上の原面に段丘堆積物を置き立ヶ花遺跡の台地を作っている。千曲川は地質時代に旧長野盆地を蛇行していたが、その後侵食を復活させる地盤の隆起があって旧盆地面は長丘面として残り千曲川は昔の流路を保って草間面、原面、栗林面を残しながら現在にいたったと考えられている。（中野市誌・地質編）

自然堤防状の台地は千曲川側は急崖をなし東方は緩やかな傾斜をなして果樹が植えられている。当然上層の腐植を含む黒色土層が頂点で薄く約30cmあり以下黒黄色土層の漸移層、黄色土の粘土層となり、上層の黒色土には多量の砂が含まれており、水によって運ばれたものと考えられる。

2号住居址北辺のB－34の断面の観察によれば表層の腐植を含む黒色の耕作土は約30cmで無遺物層であった。その下約15cmは縄文土器片・石器などの包含層でほぼ平らに堆移している。

これから下約10cmが遺物の少ない黒色土層でその下5cm厚が漸移層で以下黄色土層に変化している。この漸移層は東下がりに傾斜し、この黒色土層は東方に行くに従って遺物の検出が希薄となり市道牛出線近くでは約80cmの厚さに達したが遺物は発見されていない。

第3節　研究史概説

縄文時代は7千～8千年も続いたとされている。ここでは立ヶ花遺跡の編年代を考慮して、縄文時代前期後半に位置する関東地方の諸磯式期に照準をあてて略述することとする。

諸磯式土器文化の標式遺跡は、神奈川県諸磯貝塚を標式とし大正10年（1921）榊原正職氏によって初めて命名され、山内清男氏によって縄文時代前期中半の編年代を与えられた。これによると「前期前半土器のごとく胎土に繊維の混入なく中期厚手式より器壁薄く器形は深いものが多いが、浅いものあるいは壺形に近いものなど生じている。縄文は羽状縄文は全く無いが、稀であって、種類の変化に乏しい。文様は、半裁した竹管を引いたもの、その先端を庄して作った孤形痕（爪形文）等通有である。」として、諸磯式土器のa・b・cの3細分を提案された。

現在は資料の増加に伴って先の業績の上にたってさらに細分案が提唱されａ式は古・新、ｂ式は古・新又は古・中・新、ｃ式は古・新の2段階に細分する案が提唱されている。

次に立ヶ花遺跡の研究史をみると、この立ヶ花字西原は以前から石鏃などが出土し拾集されていた。昭和28年（1953）の『下高井』に小野勝年氏は「金井汲次氏が発見し、土器は竹管文系のもので関東の諸磯式に該当し若干の石製品や石屑の類も採取されるが未だ顕著でない」と記されている。

『信濃考古綜覧』（昭和31年（1956）上巻の地名表には「425、立ヶ花遺跡、台地（縄）南大原式・上原式・下島式・石鏃・石匙・石槍・土師（和泉式）」と記載されている。

昭和51年4月『中野市誌』編纂事業が進行しその基礎資料を得るため縄文時代の項を担当した関孝一氏は先に前期縄文遺跡の下水内郡大倉崎遺跡を発掘した金井正三氏と須坂園芸高校社会科クラブ員の協力を得て試掘を行っている。

これによると①第1群土器諸磯ｂ式（上原式）を第6類まで分類し②第2群土器諸磯ｃ式土器（下島式）を第3類まで分類している。諸磯ｂ式併行土器の器種はキャリパー形・甕・深鉢・皿・浅鉢などがあり、文様は縄文・爪形文・磨消縄文・浮線文・平行沈線文・無文とバラエティに富むと説明されている。また諸磯ｃ式併行土器（下島式）の特徴は甕・深鉢・鉢の器種が主体となり文様は平行沈線文・結節状浮線文・ボタン状突起が多いと考察されている。これを受けて『中野市誌』昭和56年（1981）では立ヶ花遺跡を「調査した限りでは南大原式土器は出土せず上原式・下島式を主体としている。と記されている。

昭和60年度行われた「中野市遺跡詳細分布調査」「遺跡地名表」によれば「市番号116県番号6560立ヶ花字西原遺跡、立ヶ花西原、段丘・(旧）ナイフ形石器・彫器・掻器・石刃(縄前期土器・石鏃・石槍・石匙・炉跡（古）土師器」と記載されている。

以上が今回の県道中野豊野線道路改良工事橋梁整備事業立ヶ花橋建設工事に伴う緊急発掘調査に至るまでの研究史の概略である。

第４節　周辺の諸磯式併行期の遺跡

戦後まもない昭和25年北信地方の考古学の先達、神田五六氏は下水内郡豊田村上今井南大原遺跡を調査された。この遺跡は立ヶ花遺跡から千曲川の下流3kmの旧左岸上に位置し住居址から検出された一括資料は関東の諸磯ａ式土器と併行するもので県内では「南大原式土器」として位置づけられている。この土器の組成は大小の深鉢と浅鉢形の土器組成からなり口縁が平らなものと大波状縁もの、胴部のくびれのないものがあり、器壁に全く繊維痕をもたないとされている。

文様は助骨文・単節斜縄文・異状斜縄文が多用され、住居址は長方形プラントなど関東的な要素が強いとされ、後述の立ヶ花遺跡の羽状縄文の多用と対照的な現象である。現在これらの土器は諸磯式古段階の土器として理解されている。

昭和27年（1952）9月神田五六氏は奥信濃地方の諸磯期の遺跡調査の結果をふまえて雑誌『信濃』に「縄文諸磯期における低地性遺跡と高地性遺跡」と題して発表された。この中で低地性遺跡としてあげられるのは、関東の黒浜式併行の飯山市有尾八幡神社付近遺跡と後述の飯山市大倉崎遺跡及び前述の豊田村南大原遺跡で高地性遺跡は豊田村親川遺跡・同村月夜岳遺跡・飯山市牛ヶ首遺跡と同市温井の遺跡を対比されている。

これを遺物の内容や遺跡の規模から推察すると低地性遺跡とは人々が常に住んでいた所で、高地性遺跡とは、狩猟などによって一時的に仮泊した場所としてそのセット関係も推定されている。

今回調査した立ヶ花遺跡の2住居址の編年は諸磯ｂ式併行と推定されるが、この時期の県下の遺跡で古く調査されたのは大町市上原（わっぱら）遺跡で上原Ⅲ式＝諸磯ｂ式とされている。これはキャリパー形の浮線文土器・羽状縄土器が斜条縄文土器ともに多用されるなどが特色をなしている。

昭和48年（1973）に至り立ヶ花遺跡から約20km下流左岸の台地上にある飯山市大倉崎遺跡を高橋桂氏を中心に発掘調査された。

この調査によって住居址2軒が検出され1号住居址は長径5.9m短径4.9mの楕円形のプランであった。柱穴は壁に沿って18基検出され壁は斜めに落ち込み火床も2ヶ所検出された。出土土器は第9類まで分類しているが第1類土器は横位の羽状縄文土器で第4類は平行沈線による格子目文を施した土器、第7類～ヘラ状工具で文様を施した浅鉢形土器、第8類無文の浅鉢形土器、第9類浮状文土器である。

この結果、上原式＝諸磯ｂ式後半が大倉崎遺跡出土土器に該当し従来の広範な要素をもった上原式土器からＩ型式分離が可能だと述べている。

昭和52年（1977）上水内郡牟礼村高岡地区で大規模な圃場整備事業が行われ縄文前期住居

址1軒が検出された。これは関山期のもので多数検出された土壙は諸磯ａ式期1基、ｂ式期14基、ｃ式期5基にのぼっている。このうちｂ式期の17号土壙からは諸磯ａ式の木の葉文を棒状工具で描いて胴部が2ヵ所内折するキャリパー形の浅鉢2個が出土している。

昭和57年（1982）立ヶ花遺跡から千曲川、鳥居川を挟んで1，800ｍ西方に所在する上水内郡豊野町上浅野遺跡が圃場整備事業のため調査され、調査区の北部から諸磯ｂ式期を中心とする集石群が68基検出された。これらの検出面から多量の土器・石器が検出された。これらの集石・遺物の状態は諏訪郡阿久遺跡に似た状態を示すとされている。

この集石の下から諸磯ｂ式期の浅鉢などが検出されており、集石が築かれた時期を示しているとされている。また諸磯式期に限って言えば、ａ式の新しい段階のものとｃ式期のものも多少発見されている。更に十三菩提式（鍋屋町式）から中期初頭の五領ヶ台式（九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ）や北陸の徳前ｃ式から新崎式期の土器が在地系の土器に混じって発見される状況は中野市姥ヶ沢遺跡（昭57年（1982）調査）例にもみられる現象である。

その他報告されている周辺の該期の遺跡は山ノ内町夜間瀬本郷町遺跡（諸磯ａ・ｂ・ｃ）同町横倉遺跡（同）、同町平穏桑山道十二沢遺跡（諸磯ｂ式）、中野市更科伊勢山下遺跡（同）などである。

〈 参考文献 〉

1. 神田五六　「長野県下水内郡豊井村・南大原縄文諸磯式遺跡概報」
「信濃」Ⅲ－3－8　1951
2. 神田五六　「縄文諸磯期における低地性遺跡と高地性遺跡」
「信濃」Ⅲ－4－9　1951
3. 猿田文紀ほか「上原遺跡」1957
4. 高橋　桂ほか「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告」
「信濃」Ⅲ－28－4　1976
5. 「長野県史考古資料編」「丸山遺跡」1982
6. 「長野県史考古資料編」「上浅野遺跡」
7. 中野市教育委員会「姥ヶ沢」1983

図3　中野・飯山地方の諸磯式併行期の主な遺跡

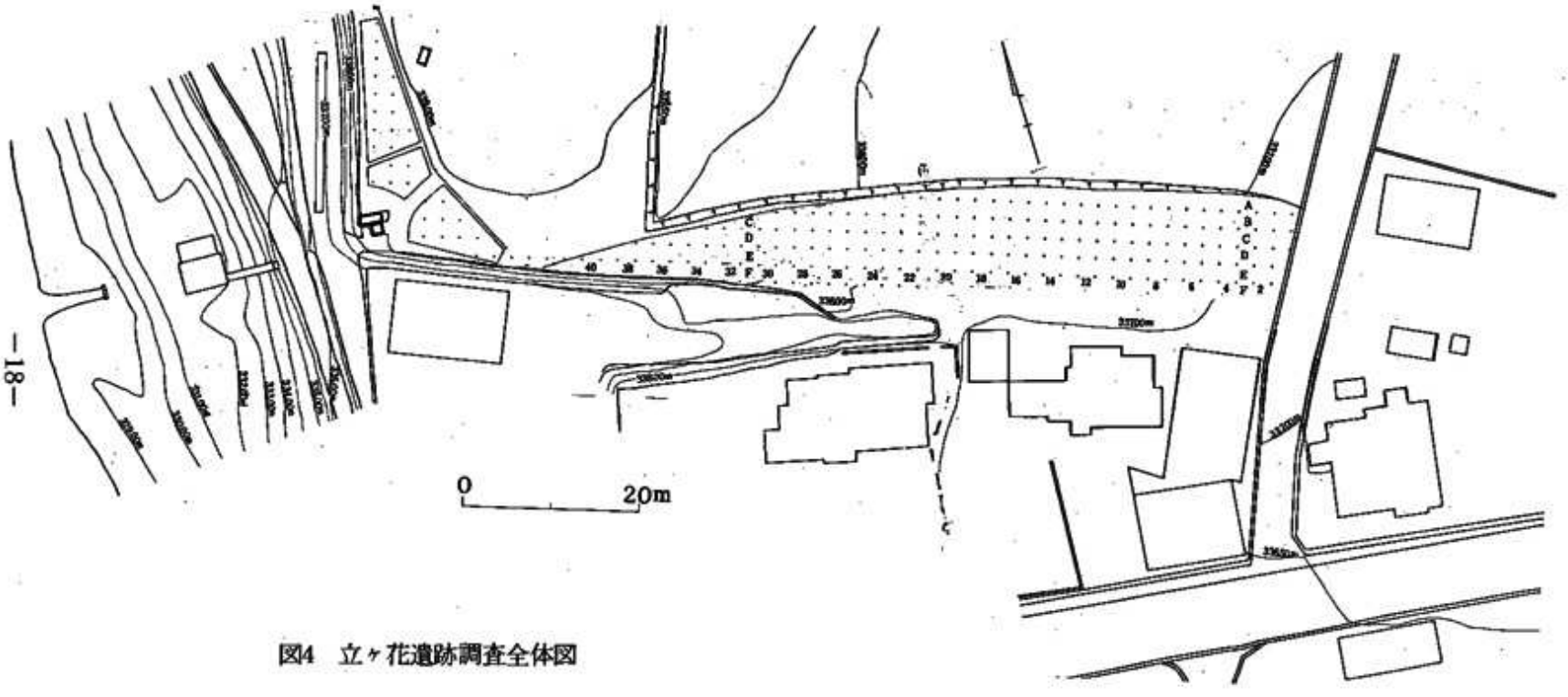


図4　立ヶ花遺跡調査全体図

第Ⅲ章　調査の経過

第1節　遺構・遺物の分布状態

本遺跡は、前述のとおり、千曲川に面した台地状の自然堤防上にあり、南方は、過去に県道の開削、屋根瓦の原料粘土の採取や宅地造成などで改変された際、遺物の出土があったと伝えられている。

このような経過をたどっているが、調査地から北方は、果樹園地帯となっていて遺跡が比較的良く保存されている。この台地は北方に緩やかに傾斜しており、調査地北側の断面の観察から推して、遺構は調査地から北方に広がって存在すると推定され、台地の頂点を広場として、住居址の配列が予想される。

〈 1号住居址 〉

今回検出された2軒の住居址は台地頂点から、標高差1ｍの東南の方向に位置し、1号住居址は、短径6.3ｍ、長径は5.7ｍで区域外の未調査分を合わせると推定では7.2ｍの比較的大型の住居址である。

東方に傾斜しているため壁面の検出は、西側部分に限られているが、垂直に落ち込まず、斜状を呈し床まで確認面から10cm前後である。この住居址の周囲からは、6基の柱穴が、検出され主柱穴は壁面をめぐるP_2, P_3, P_4, P_6, P_8, P_{14}と、位置からみて残存すると思われる柱穴1個の合計7基が主柱穴で大きさは、別表のとおりである。

柱穴は、2号住居跡も同様であるが、中心部は比較的軟かいが、周囲及び底辺は粘土質に砂が混じっていてきわめて硬く、発掘が困難であった。これは、上からの圧力と柱の周囲をつき固めた結果と観察された。

火床は、中央部北寄りに2ヶ所あり、主炉は焼土の範囲は長径95cm、短径60cmで、中心部の凹部は幅約20cm深さ10cmでこれを挟んで、両側に小柱穴が径7～8cm深さ10cmの2基存在した。

副炉は主炉の東側80cmの位置にあり長径50cm短径35cmの楕円形で、中央部が約8cm凹んでいた。

貯蔵穴と推定される土坑(壙)は、南側に所在し上面の幅は長径2ｍ短径1.3ｍ、底部長径1.15ｍ短径0.8ｍ、深さ床面から86cmの大きなものである。その東北部に長径1.3ｍ短径0.78ｍ床面から深さ34cmの柱穴を伴った貯蔵穴（土坑）に連なっており、その中間部北寄りに石屑片の集中している箇所があった。

この貯蔵穴には、黒色土が充填していて軟らかく中に縄文土器の口縁に竹管文加飾のみられる單節の羽状縄文の大形深鉢などが埋没し、底辺に無文の大形浅鉢の破片があった。

住居址の他の土器の在り方は、中心部分に諸磯式の四つの波状口縁でキャリバー形、浮線

文の深鉢があり、中央部から北西部にかけて多くの土器片が存在し北の発掘境界線の壁面近くに石皿・石垂が重なって存在した。

また北東部には無文の大形浅鉢が、倒立し床面から10cm程浮いた状態で存在した。また、他の柱穴状の凹みは、木根状を呈する浅いものが存在した。また古墳時代の関東の和泉式直前と思われる高坏・坩・甕などが、住居址の東側にあり、炉跡の部分と思われる石も検出した。これは縄文前期の土器と、10cm以内の間層をもって所在した。

〈 2号住居址 〉

2号住居址は、1号住居址の東隣に約1m離れて存在した。同時期にすれば、ほとんど接続していたとみられる。

プランは、長径5.7m短径4.7mの楕円形を呈し5基の土坑と柱穴及び周囲の柱穴状のものを含めて63基の多数を検出し、第2次調査でもその東側から15基の柱穴を検出している。柱穴はP7、P6、P3、P62、P58、P52、P44、P37、P28、P8などが候補としてあげられ他の柱穴は、後続する時期のもの、あるいは縄文前期の方形列あと即ち堀立柱建物址の可能性のほか、古墳時代の建物址の可能性もある。

貯蔵穴あるいは、土坑(壙)状のものは、図のごとく北東の住居址のかかるＳＫ1から南側に連なるＳK2からＳK6などがあり、いずれも黒土層が充填して土器が埋まっていた。(84・ＳK2)(88・ＳK2)(92・ＳK6)(100・ＳK6)(102・ＳK6)(105・ＳK6)(130・ＳK2)

土器はＳK2の土坑上面から、ＳK1の土坑上面に多数あり、ＳK2の北縁から石屑片が多量に集積して存在した。ＳK1上層からは、漁撈形ポイントが出土した。

住居址の北辺にあった古墳時代の壺は正置してあり、床面から10cm上層に存在した。

地床炉は中央北寄りに主炉があり、焼土範囲55×55cmで、そこから西86cm離れて副炉が30×30cmの範囲で存在した。

第２節　第２次（1990）調査の概要

本年度の調査は11月上旬より12月中旬まで行った。調査地点は前年1・2号住居址を検出した東側部分（A～H・16～23）と西側部分（A～H・33～42）を拡張して行い、千曲川に面した側道予定地と3地点を調査した。

東側部分は、黒土層の堆積が、漸次厚くなっており、前年の調査地に続いて、土器片が散布しており、柱穴の遺構も検出されたが、直線的な配列がみられ、古墳時代の土器も検出されたので、縄文時代の住居址と認定するに至らなかった。南側に土器片が集中する所があり、北側にも集中個所があり、その下層には、土壙状に土器片が集中する所が2ヶ所あったが、これらは、黒土層中にあり、地山には、掘りこまれていなかった。

このようにこの地点での土器の在り方は、廃棄集中か、洪水などの集積など、二次的な集

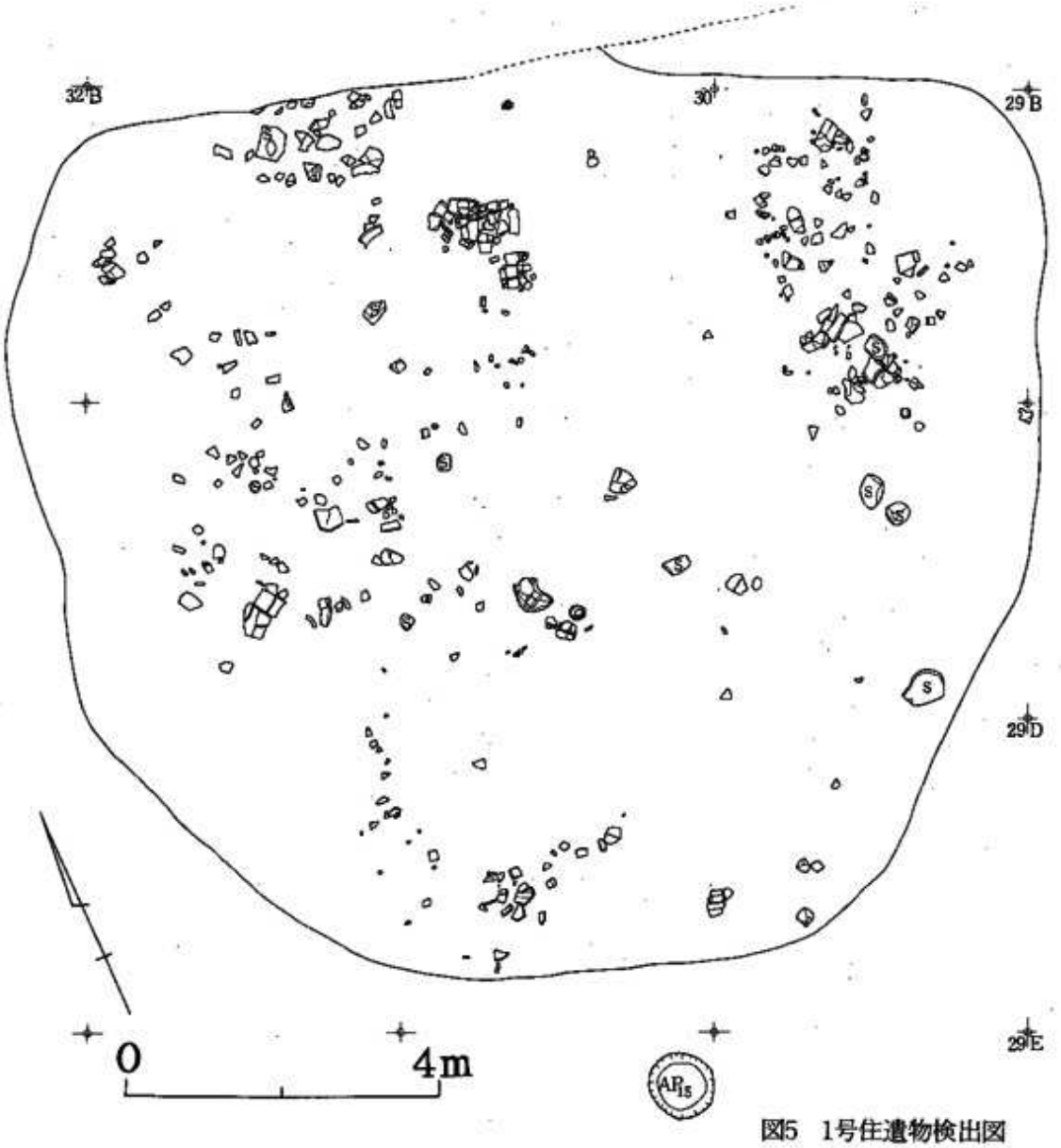


図5　1号住遺物検出図

中と判断された。

これらの東方部分は、試掘によって、土器の散布が漸次少なくなり、牛出線の近くではほとんどみられなくなる。ついでに記すると、この取付道路用地内の現建設省千曲川工事事務所東側の2本の試掘坑からは、何らの遺構・遺物が検出されなかった。

西側部分（下33〜42）は、道路用地内で採土が行われたため、調査可能地は、三角状に狭められ、充分な調査が行われなかった。

ここは、自然堤防上の高所であって、遺構が広がっていると想定される所である。

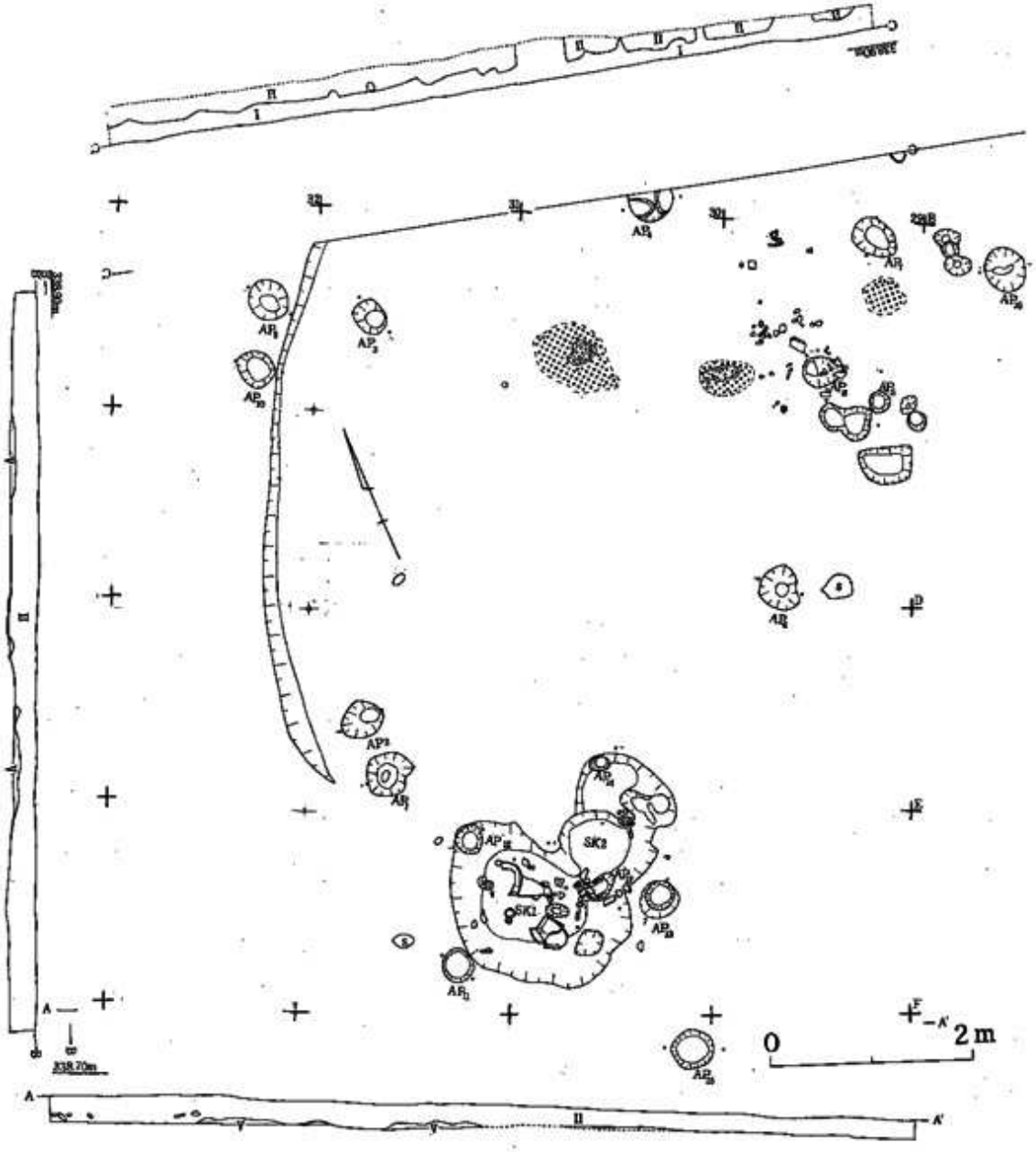


図6　1号住遺構図

この地点からは柱穴と土坑状の遺構が30基検出され、西端には、住居址の一部が存在し、東側からは住居址と確認できなかったが、2ヶ所の火床も確認された。

そして地権者によって、この地点の北側に土器片が散布していることが確認されている。

この両地点の土器の在り方をみると、時期別に識別できる状態でなく、混在しており、比較的まとまわりをみせていたのは、H21の土器集中地点の出土品であった。

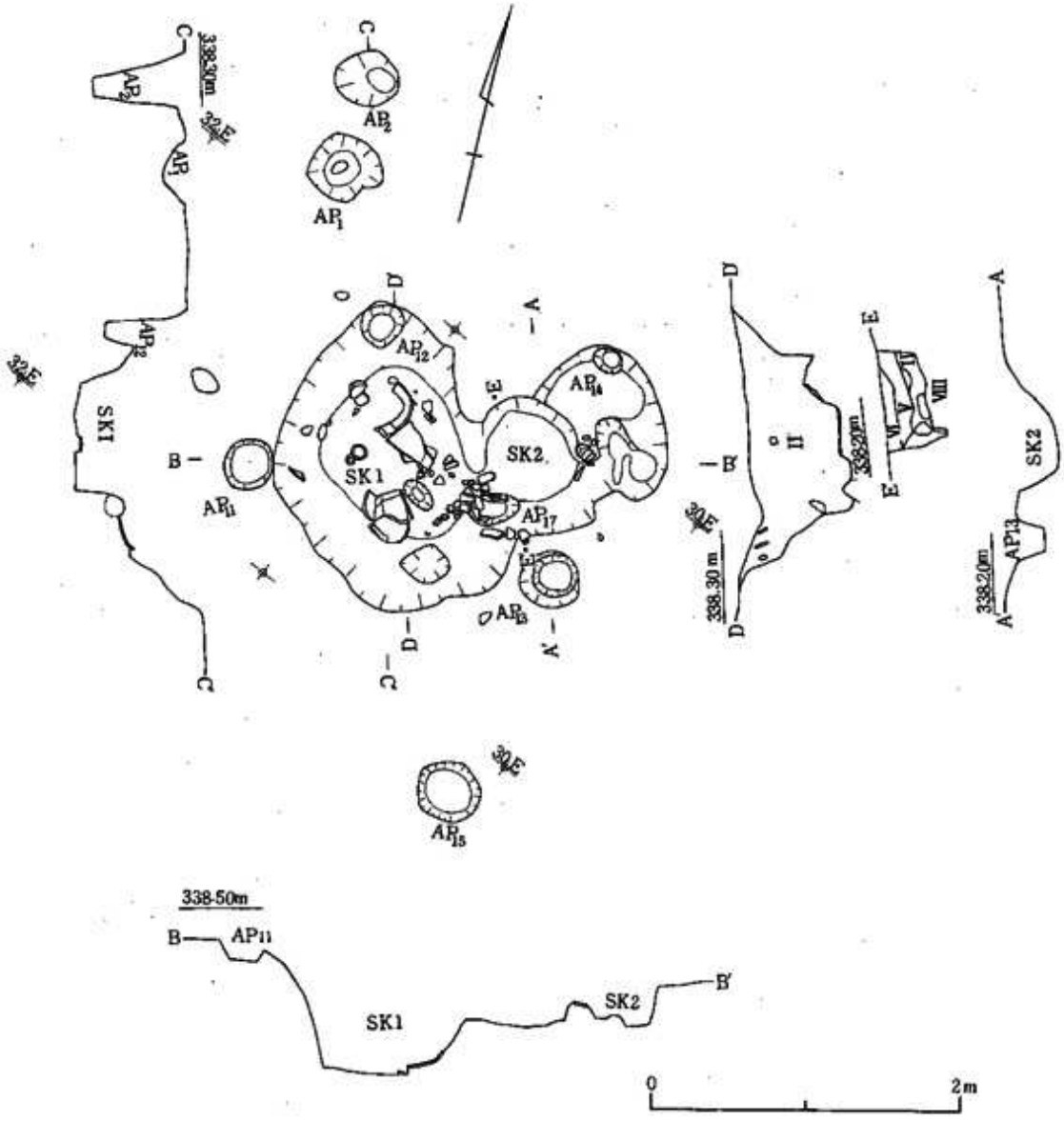


図7　1号住土壙(坑)実測図

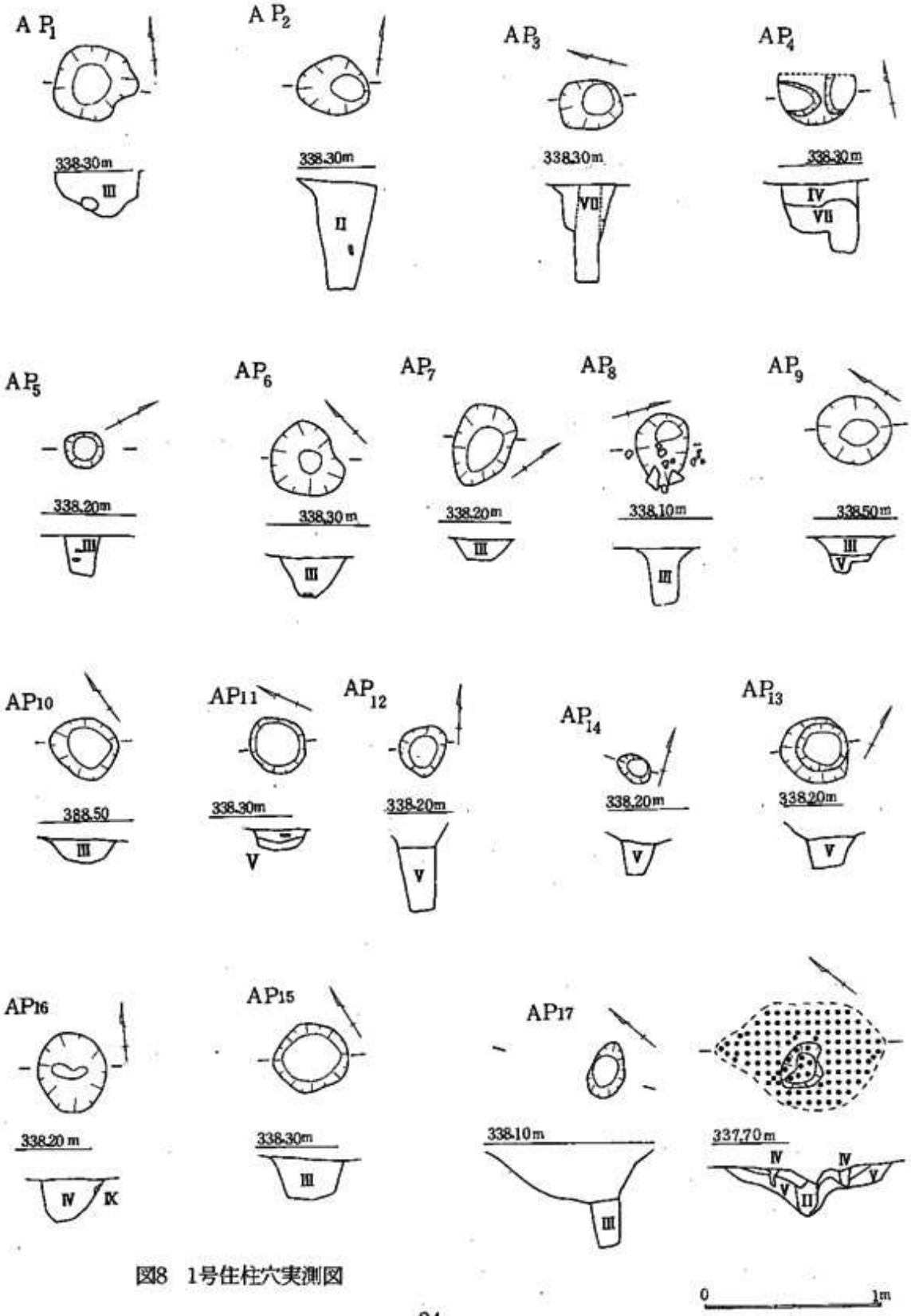

AP1
338.30m
III
AP2
338.30m
II
AP3
338.30m
VII
AP4
338.30m
IV
VII
AP5
338.20m
III
AP6
338.30m
III
AP7
338.20m
III
AP8
338.10m
III
AP9
338.50m
III
V
AP10
388.50
III
AP11
338.30m
V
AP12
338.20m
V
AP14
338.20m
V
AP13
338.20m
V
AP16
338.20 m
IV
IX
AP15
338.30m
III
AP17
338.10m
III
337.70m
IV
IV
V
V
II
0
1m

図8　1号住柱穴実測図

千曲川岸の上段の、側道部分の調査地点は、揚水の配水管が埋設された工事個所で、かく乱をうけており、ローリングした土器片が数片検出しただけで、遺構も検出されなかった。

この下段のトレンチは洪積層であって、何も検出されなかった。

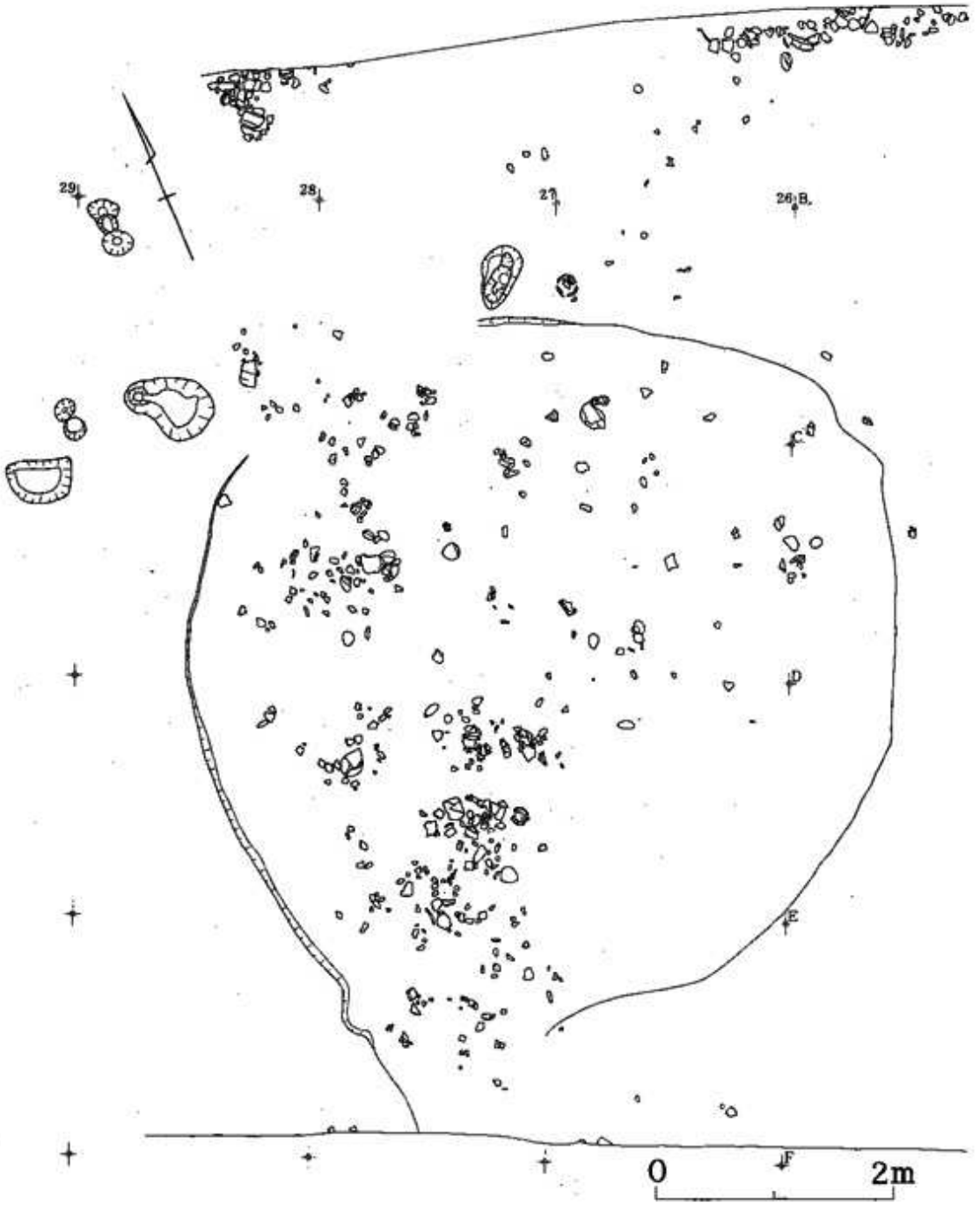


図9　2号住遺物検出図

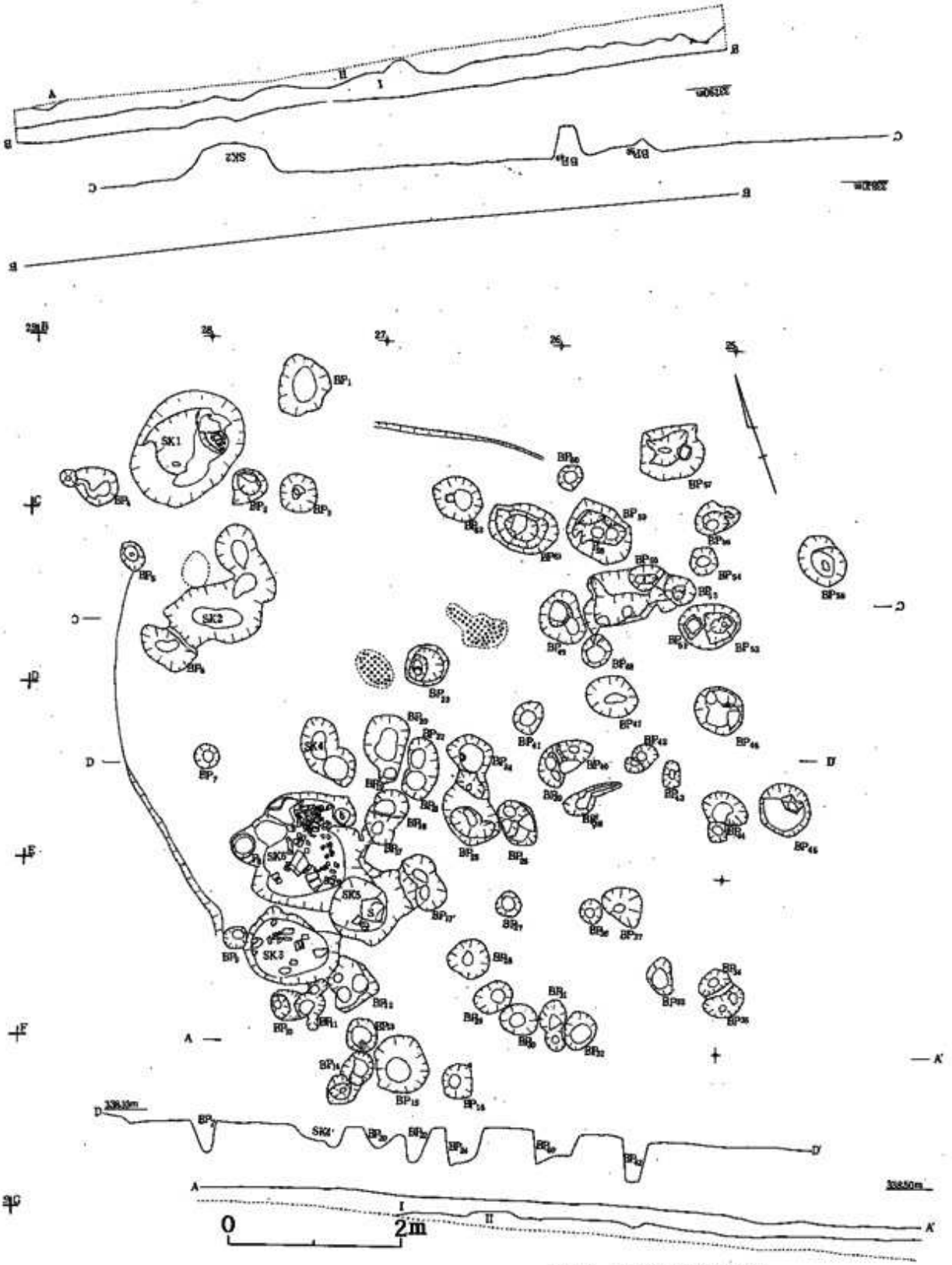


図10　2号住遺構全体図

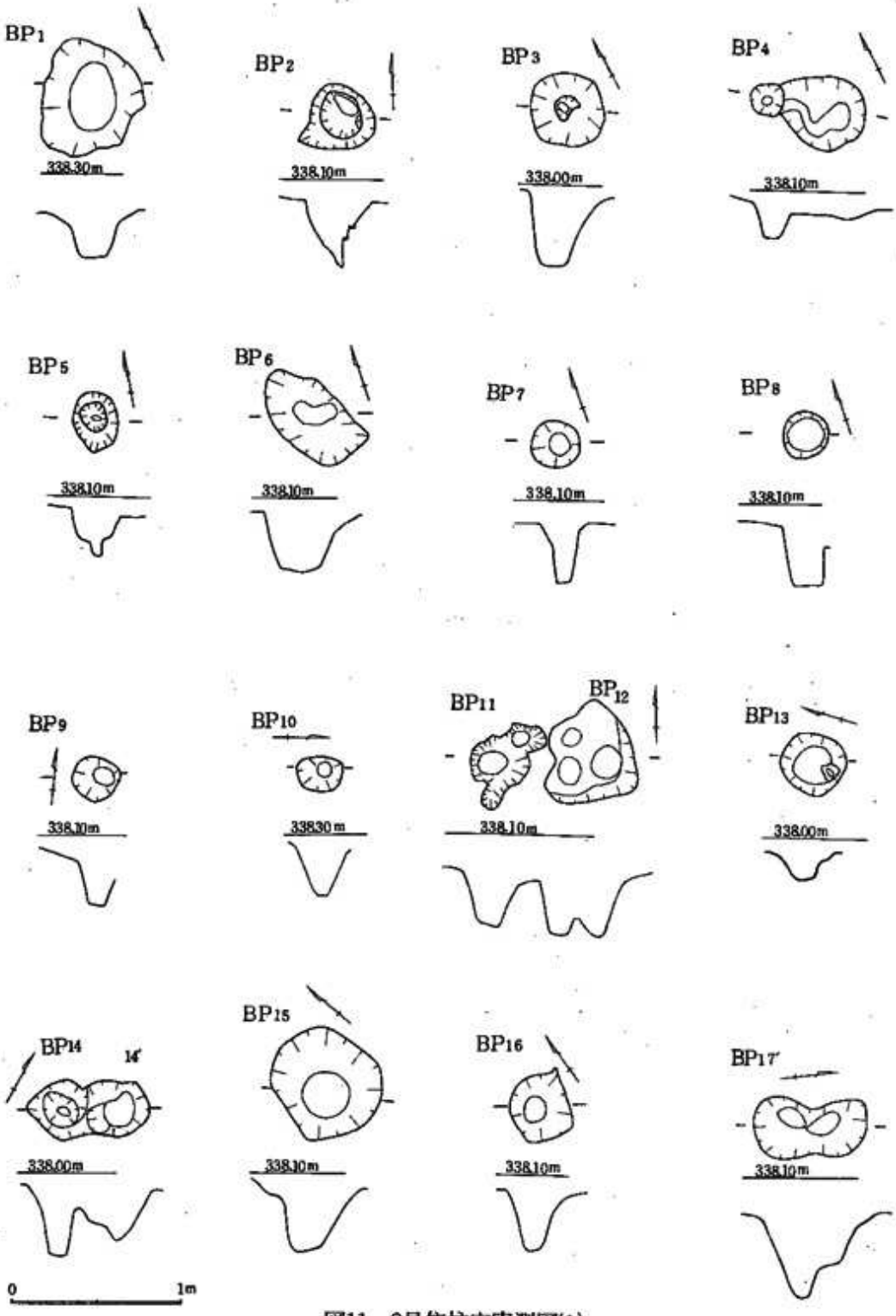


図11　2号住柱穴実測図(1)

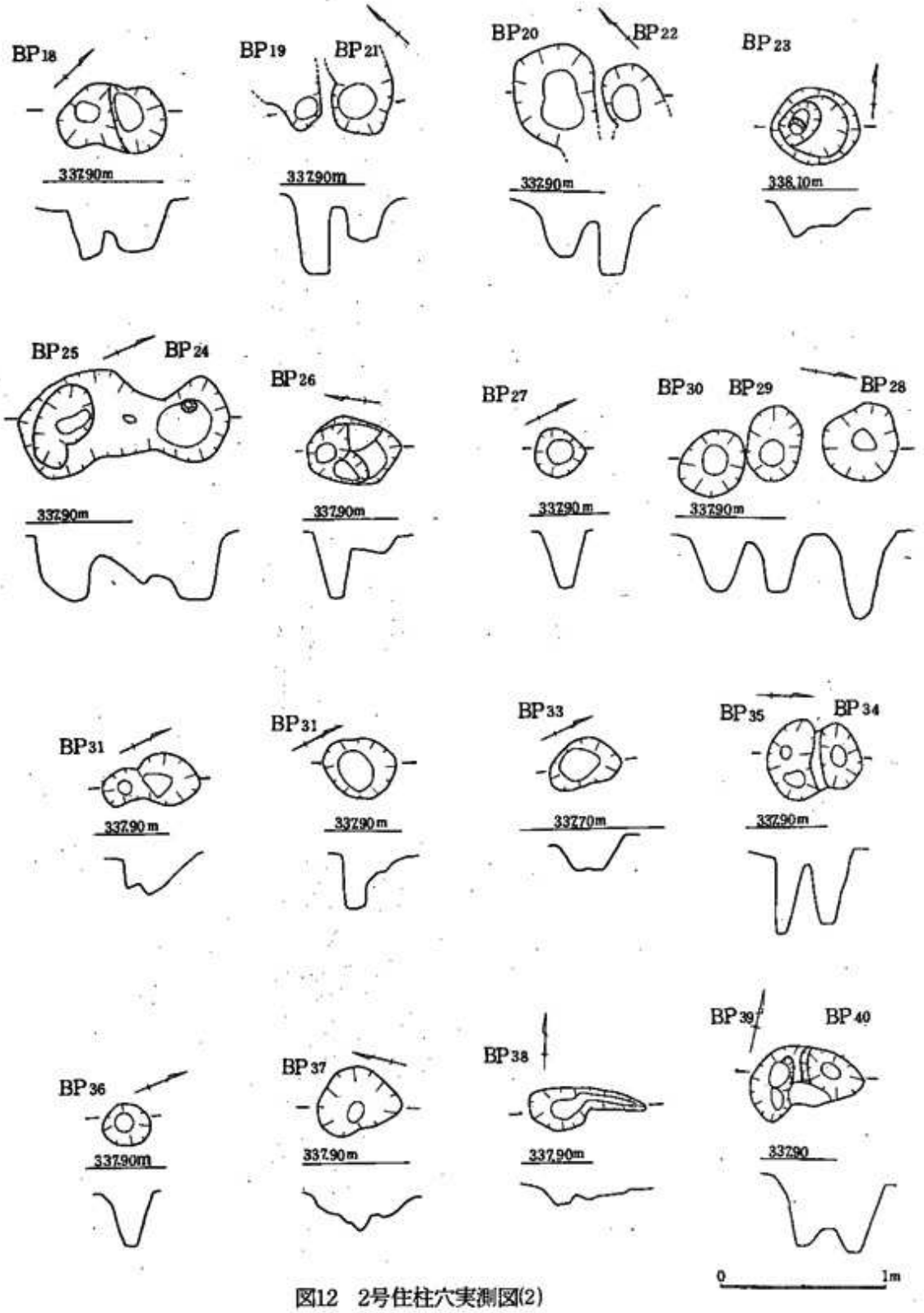


図12　2号住柱穴実測図(2)

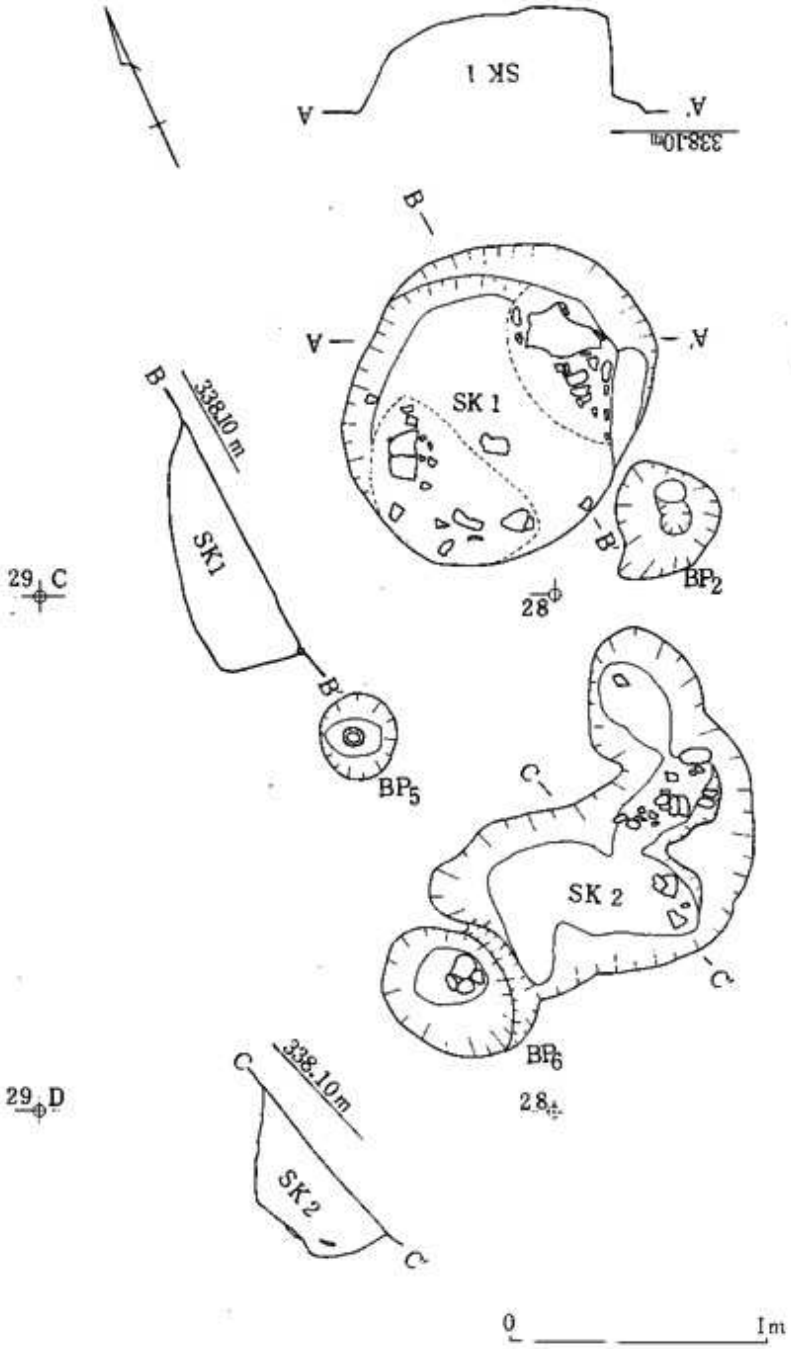


図13　2号住土壙(坑)実測図(1)

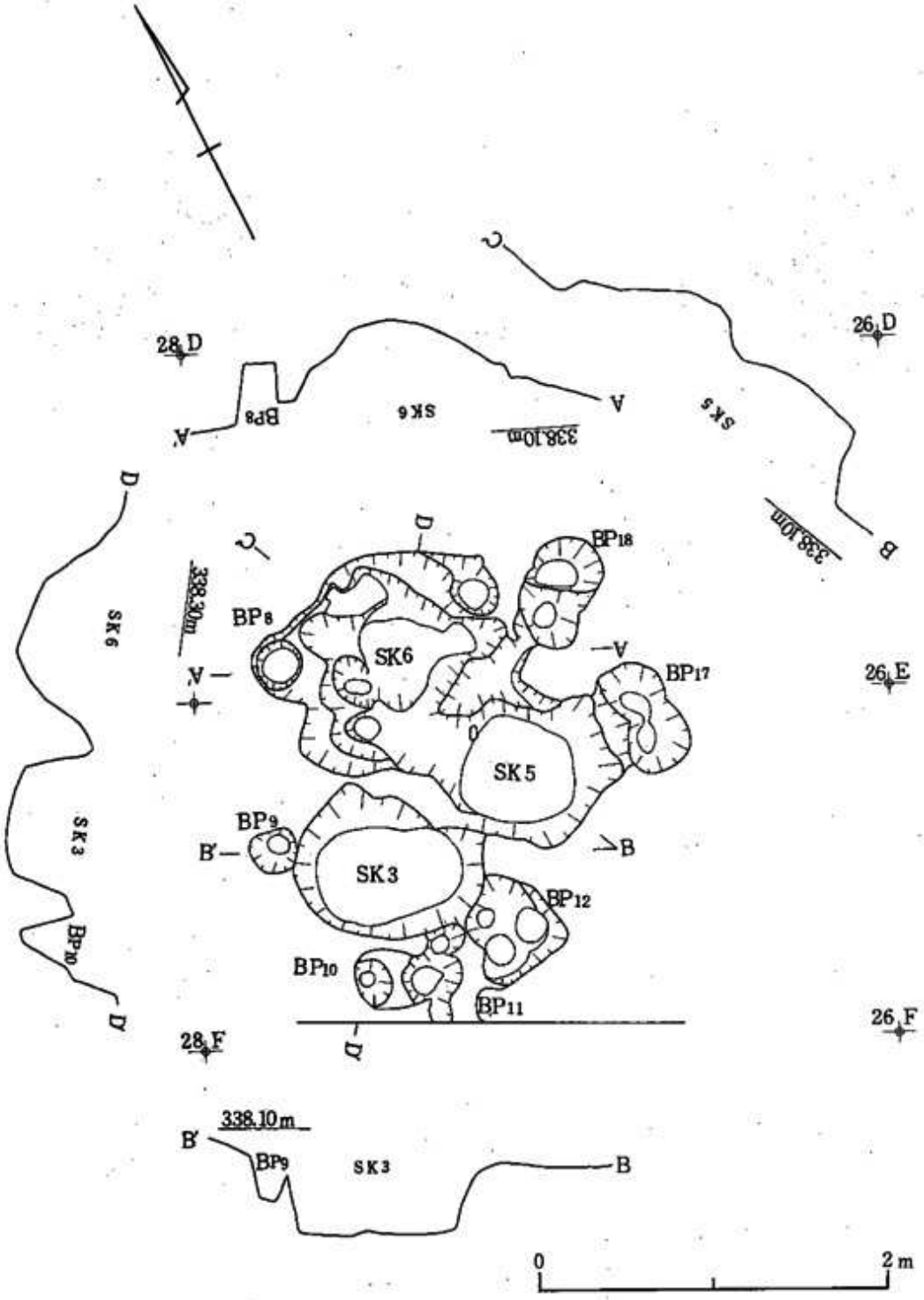


図14　2号住土壙(坑)実測図(2)

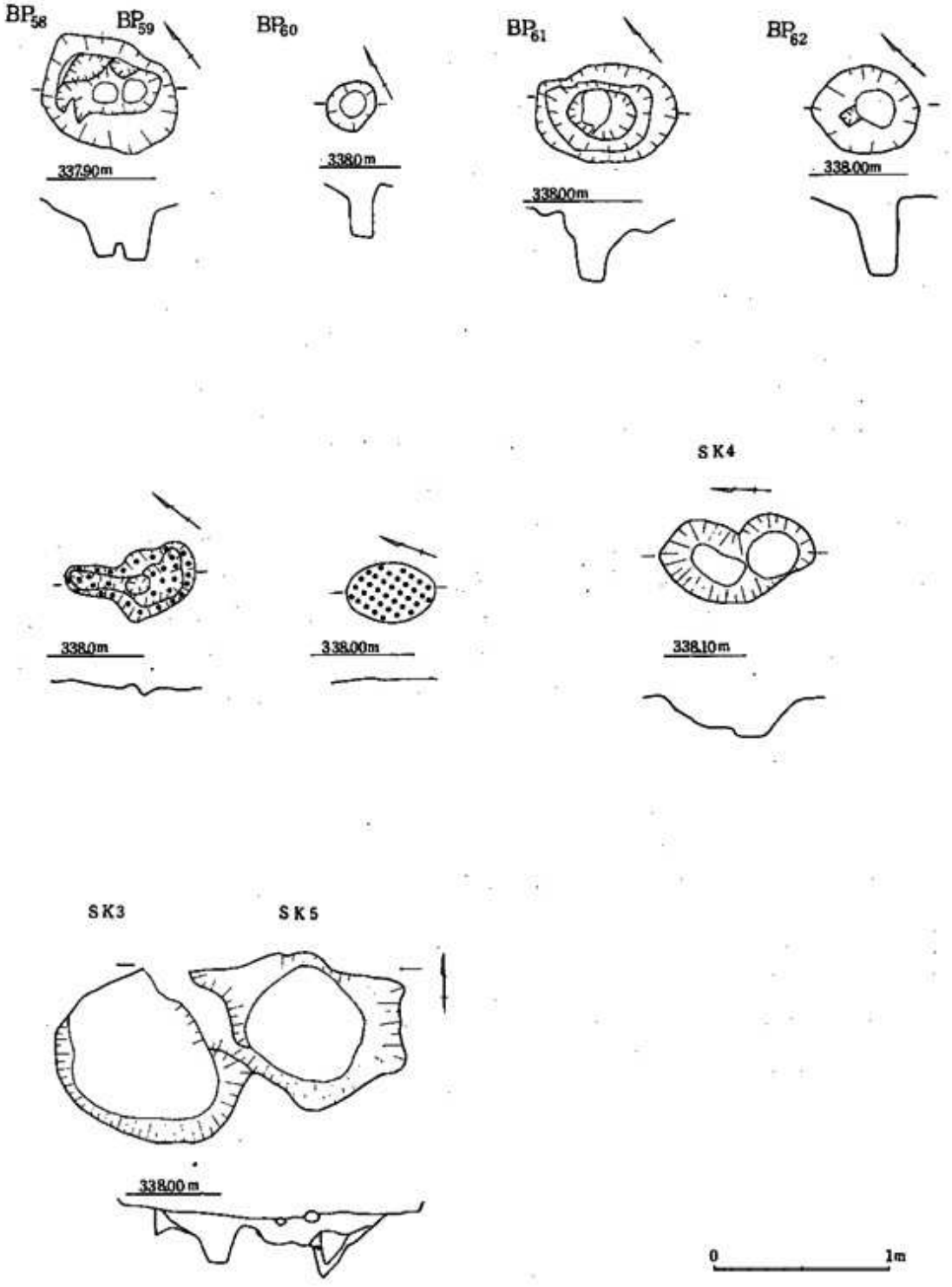


図15　2号住柱穴・火床・土壙(坑)実測図

第３節　縄文時代の遺構について

＜住居址＞

立ヶ花遺跡で発見された2棟の住居址が諸磯ｂ式期の所産とすれば、県内の該期の住居址もあまり多くは検出されていない。先にみた飯山市大倉崎遺跡では2棟の住居址が検出されている。その1号住居址は長径5.9ｍの楕円形のプランで壁面は緩やかであってそれに沿って柱穴が2基1組になって9組検出されており、南壁中央部上面1.14×0.83ｍ深さ0.4ｍの土坑（貯蔵穴）が、中央北寄りに地床炉が2基が連続して検出されている。

昭和51～53年度中央道西宮線新設のため調査された諏訪郡原村の阿久遺跡では立石・列石・土壙群・方形柱列・環状集石群とともに77棟の住居址が検出されているが、該期（阿久Ｖ期・諸磯ｂ式期）の住居址は№7と№72の2棟だけである。この№7の住居址は2回にわたる拡張があったが、最終的なプランは、隅丸方形で規模は3.8×3.6ｍ長軸方向N6°Wである。北壁はローム層に50cmを越える深さに掘り込み、南壁は黒色土中に構築されたため、かすかに確認された。主柱穴は4基と考えられ、炉は中央南寄りと北に離れて所在したが、3時期があるので北寄りのものを候補としてあげている。

この№7住居址にも、土壙が南北とも、住居縁をはさんで2個所見られ、北側のものは78×64cm（深さ38cm？）の規模を有する。（南側120×35cm深さ20cm？）このように本址は、系譜の同じくする者が2回にわたって拡張を行いながら生活したあとと推定されている。

№72住居址は「多数かつ複雑な柱穴の状況や、遺物の出土が量・質ともに豊富なことから、時期の異なる住居址など、切り合う遺構が存在する可能性が強い」とされて、ａの構築から始まってｂ，ｃ，ｄの3回にわたって拡張されたことが確認された。

ａの住居址は6.6×6.6ｍの隅丸方形プランをもつ一番小さい住居址であってｂはａを南・北・東の各方向に拡張して7.5×7.2ｍで柱穴が深くなっている。ｃは主柱穴が東側に数10cm移動させてつくられているが規模はほぼ同じでｄは北側に若干拡張させて9.03×7.8ｍと本遺跡中最大の規模をもつ住居址である。胴の張った隅丸方形である。

このような管見から、当該立ヶ花遺跡の住居址の主な点を検討してみると、まず主柱穴が大倉崎例のごとく、周囲をめぐる楕円状の主柱に副柱もみられることなどは、豪雪地帯の自然条件が影響していると思われる。大形の土坑(壙)が南側に存在するのも、該期の阿久遺跡Ｖ期の272住居址や、大倉崎にみられ貯蔵穴としての性格が強いと考えられる。

また、地床炉が2個所みられるのも、諸磯期を通じて多くみられる現象である。2号住居址の東側にみられた柱穴は、一部方形のプランをなしているが、阿久遺跡にみられた方形柱列と同じ性格との判断は、一部の柱穴から鬼高期の土器片が検出されているので、速断はさけておく。

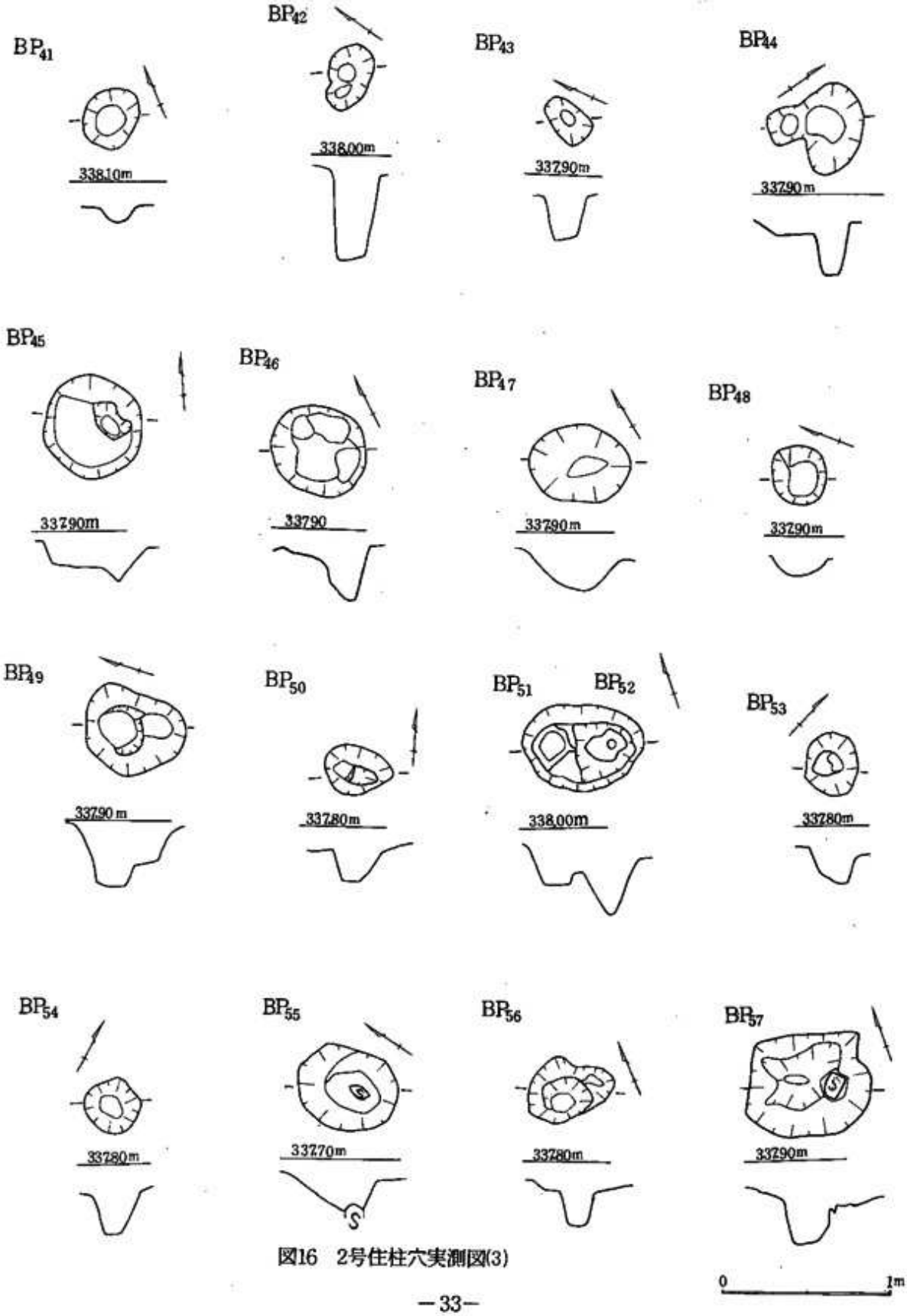


図16　2号住柱穴実測図(3)

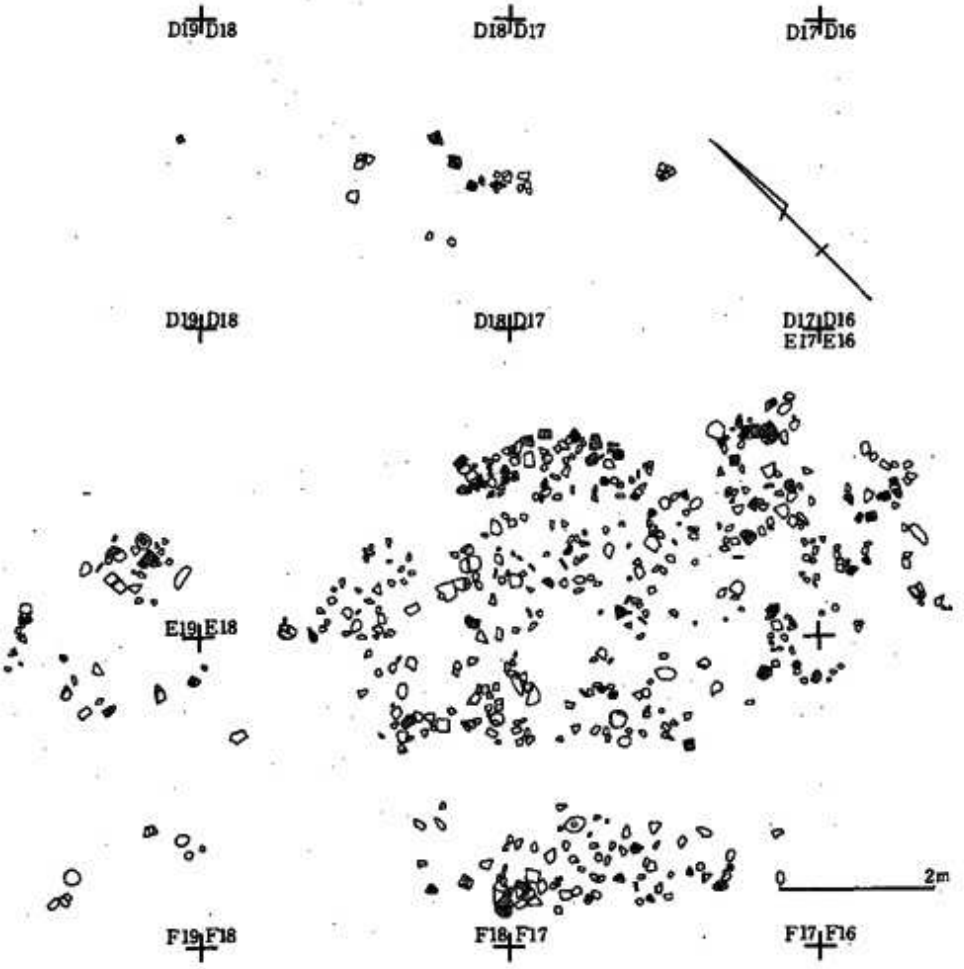


図17　第2次調査遺物検出図（C地点の東の南）

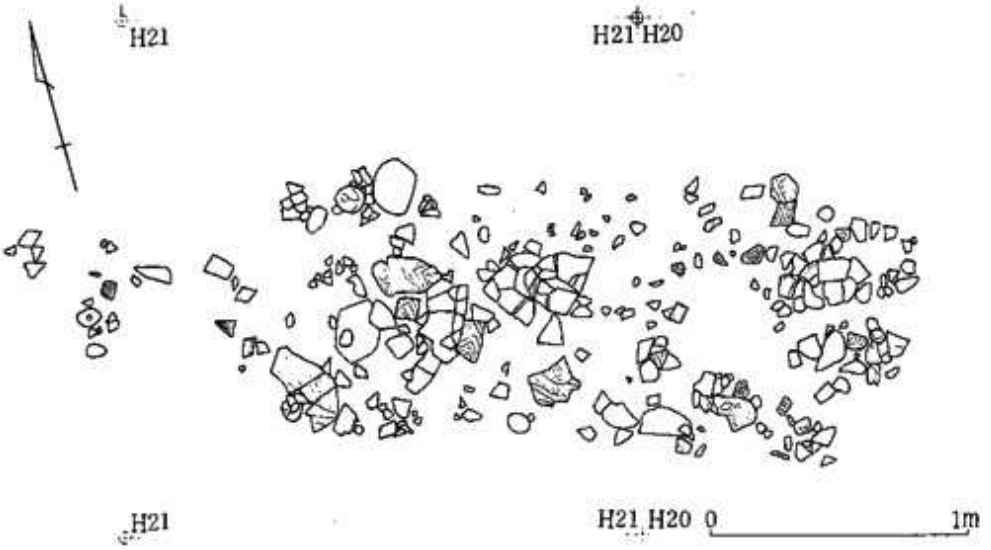


図18　第2次調査遺物検出図（C地点の東）

ここでは今回２住居址から検出された出土土器は、細片まで入れると諸磯ａ式（新）からｃ式期までにわたるが、床面などの主体をなす土器は、諸磯ｂ式後半期のもので住居址も同該期と推定される。

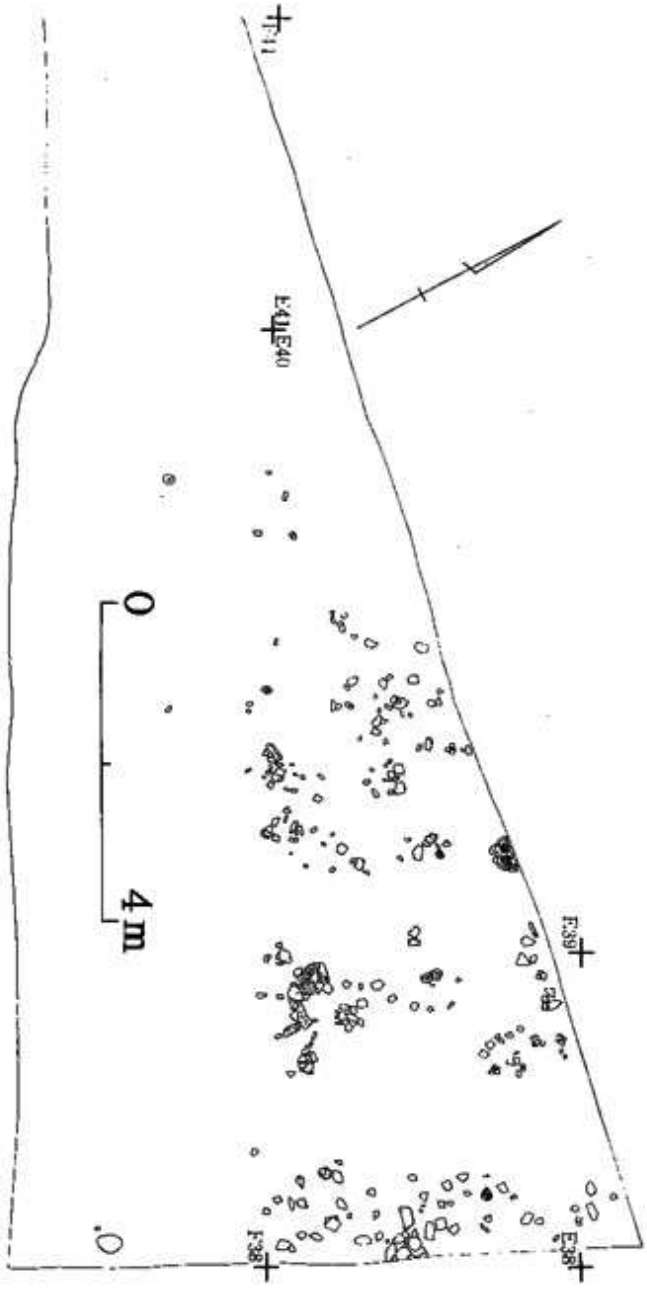


図19　第2次調査遺物検出図（Ｃ地点の西）

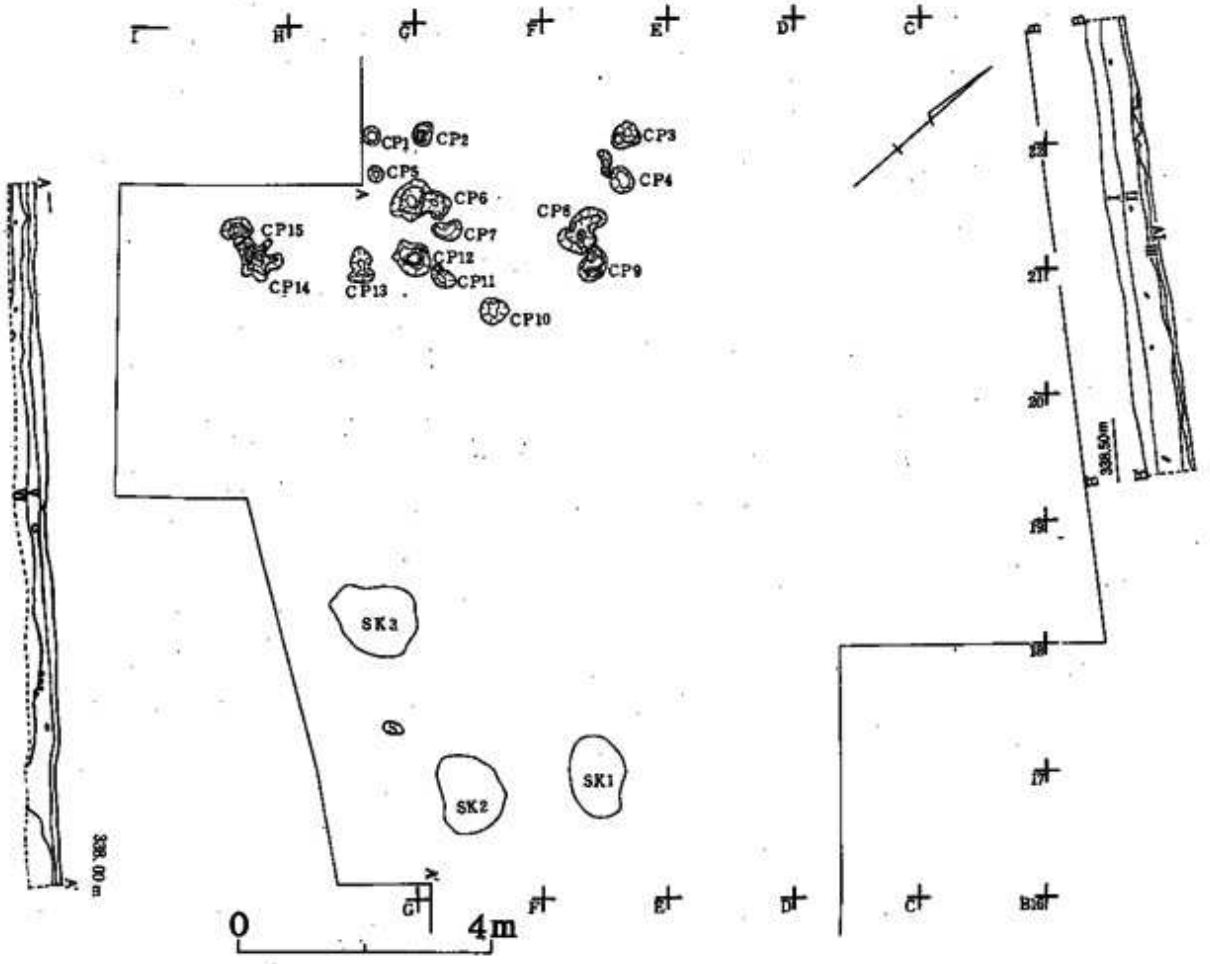


図20　第2次調査遺構全体図（C地点の東）

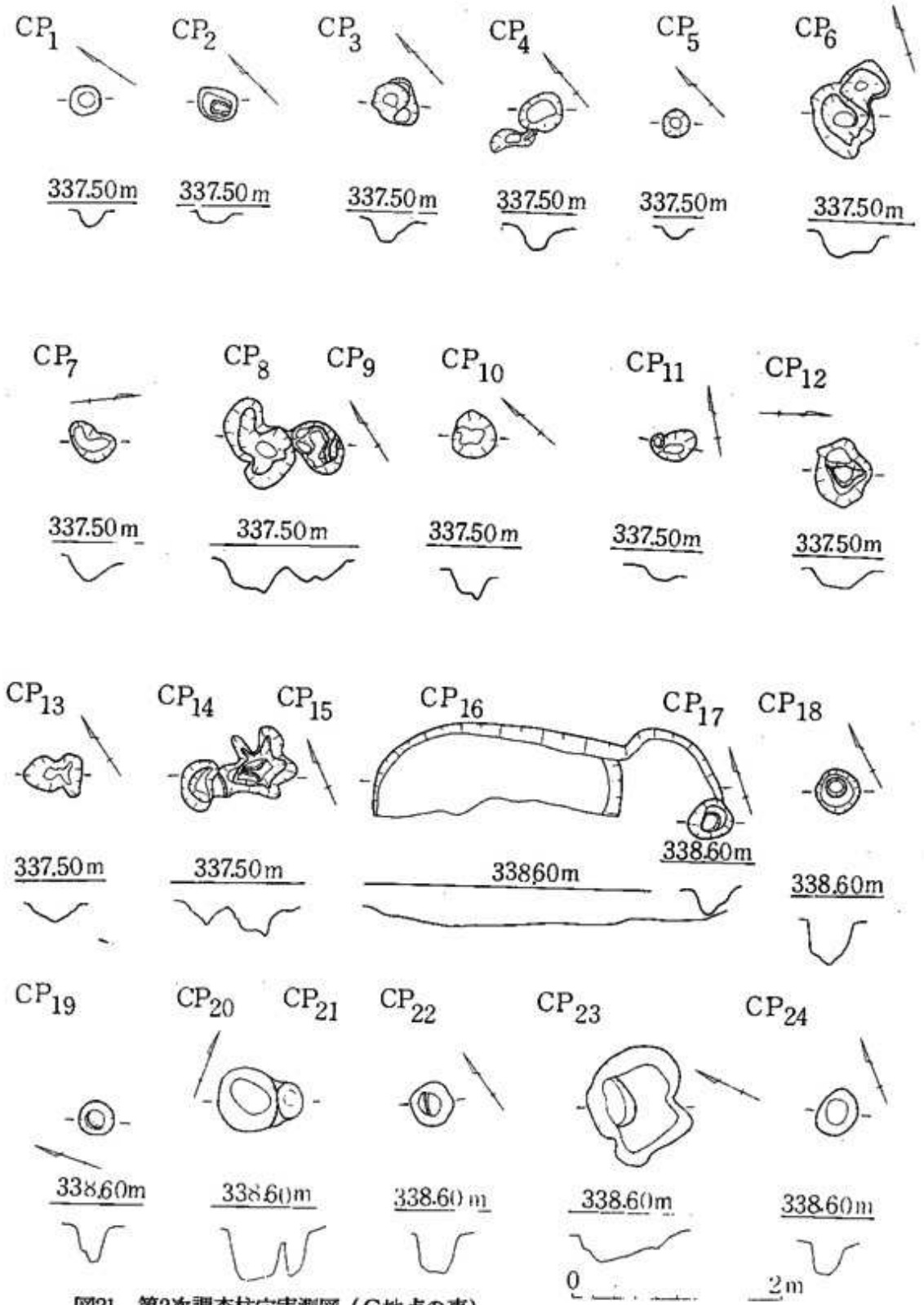


図21　第2次調査柱穴実測図（C地点の東）

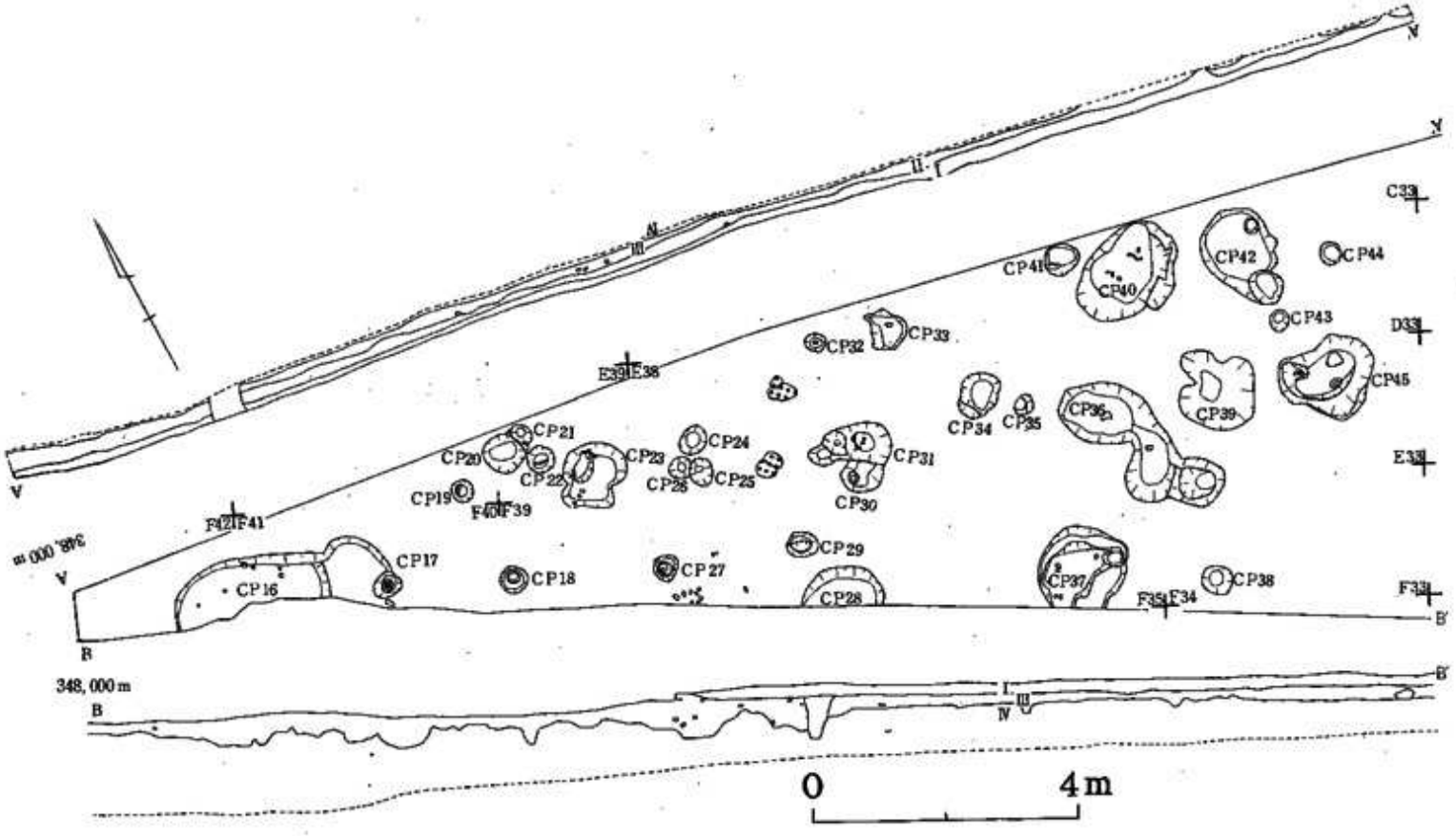


図22　第2次調査遺構実測図（C地点の西）

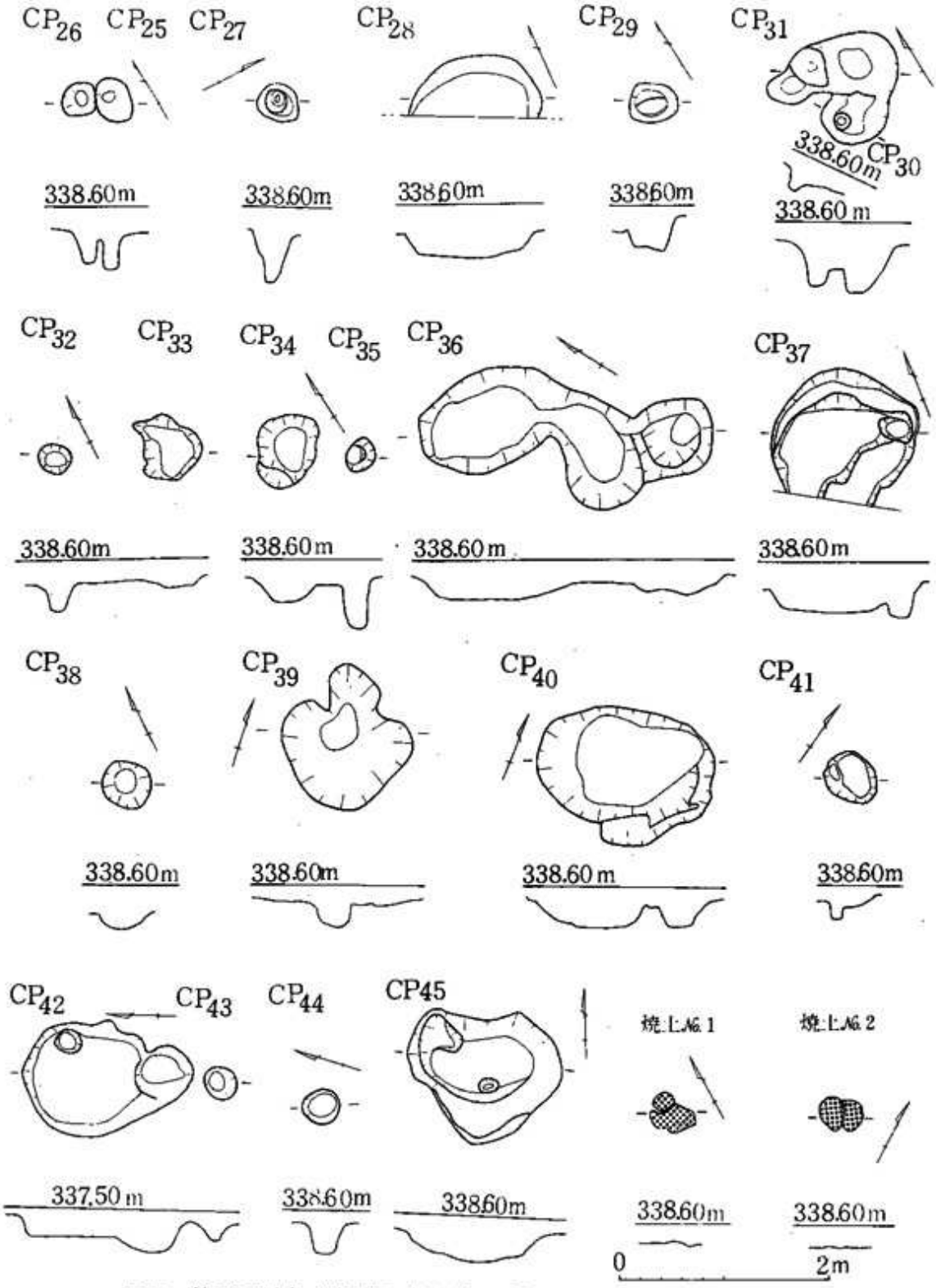


図23　第2次調査柱穴実測図（C地点の東）

1号住の柱穴・土坑計測表

第1次調査

P	縦	横	深さ（メートル）	備考
1	0.47	0.41	0.26	
2	0.41	0.35	0.60	
3	0.34	0.27	0.55	
4	0.44	0.38	0.35	北側未発掘で下部に柱穴2ケ有
5	0.22	0.21	0.12	
6	0.43	0.35	0.22	
7	0.48	0.38	0.11	
8	0.40	0.30	0.33	
9	0.42	0.38	0.21	
10	0.39	0.32	0.13	
11	0.35	0.32	0.18	
12	0.25	0.26	0.50	
13	0.26	0.21	0.16	
14	0.21	0.18	0.25	
15	0.43	0.40	0.22	
AP 16	0.45	0.40	0.23	
17	0.33	0.19	0.54	
SK1	2.00	1.73	0.85	
SK2	0.98	0.65	0.34	

2号住の柱穴・土坑計測表

第1次調査

P	縦	横	深	備考
1	0.70	0.58	0.28	
2	0.46	0.40	0.39	
3	0.45	0.45	0.42	
4	0.68	0.43	0.28	
5	0.45	0.26	0.28	
6	0.67	0.36	0.34	
7	0.28	0.27	0.35	
8	0.28	0.26	0.35	
9	0.29	0.28	0.32	
10	0.26	0.19	0.30	）接続
11	0.35	0.27	0.34	
12	0.30	0.18	0.36	
13	0.39	0.35	0.16	
14	0.38	0.27	0.41	14と接続
15	0.60	0.55	0.44	
16	0.45	0.34	0.35	
17	0.45	0.40	0.50	）接続する
18	0.45	0.40	0.29	
19	0.26	0.22	0.46	）接続する
20	0.55	0.50	0.34	
21	0.38	0.35	0.22	）接続する
22	0.38	0.34	0.44	
23	0.48	0.45	0.21	
24	0.55	0.50	0.45	
25	0.75	0.52	0.40	
26	0.58	0.40	0.41	
27	0.32	0.28	0.38	
28	0.49	0.46	0.52	
29	0.45	0.34	0.34	
30	0.44	0.35	0.35	
31	0.56	0.29	0.25	
32	0.45	0.36	0.33	
33	0.34	0.25	0.18	
34	(0.39) 0.57	0.24	0.43	）接続して下部に2ケの柱穴あり
35	(0.48)	0.26	0.49	
36	0.28	0.25	0.32	
37	0.52	0.37	0.23	
38	0.70	0.14	0.12	
39	(0.37) 0.47	0.23	0.41	）接続して下部に2ケの柱穴あり
40	(0.31)	0.22	0.42	
41	0.38	0.21	0.12	
42	0.41	0.26	0.50	
43	0.31	0.28	0.25	
44	0.57	0.55	0.32	
45	0.62	0.58	0.21	
46	0.58	0.56	0.32	
47	0.57	0.48	0.21	
48	0.37	0.32	0.10	
49	0.52	0.46	0.36	
50	0.41	0.28	0.25	
51	0.17	0.15	0.21	）接続
52	0.40	0.32	0.34	
53	0.37	0.35	0.21	
54	0.44	0.32	0.28	
55	0.52	0.48	0.21	
56	0.54	0.36	0.25	
57	0.72	0.58	0.25	
58	0.66	0.44	0.26	）接続
59	0.58	0.30	0.27	
60	0.30	0.28	0.30	
61	0.78	0.55		
62	0.60	0.58		
14	0.38	0.32		14と接続
SK1	1.42	1.08	0.40	
SK2	1.32	0.70	0.39	
SK3	2.26	2.00	0.56	
SK4	0.58	0.40	0.25	
焼土	0.48	0.34		
〃	0.74	0.42		

立ケ花遺跡1990（C地点）柱穴計測表

第2次調査

番号	縦(南北)	横(東西)	深(メートル)	備考
CP1	0.28	0.29	0.14	
2	0.88	0.33	0.10	
3	0.5	0.45	0.29	
4	0.35	0.4	0.28	
5	0.25	0.26	0.12	
6	0.74	0.8	0.24	
7	0.4	0.35	0.17	
8	0.83	0.46	0.34	
9	0.58	0.40	0.22	
10	0.43	0.43	0.27	
11	0.28	0.48	0.15	
12	0.58	0.67	0.28	
13	0.46	0.5	0.20	
14	0.65	0.63	0.30	
15	0.4	0.4	0.19	
16	0.70	3.30	0.18	
17	0.84	0.44	0.26	
18	0.4	0.45	0.31	
19	0.34	0.35	0.35	
20	0.6	0.6	0.48	
21	0.45	0.26	0.46	
22	0.4	0.41	0.34	
23	1.02	1.1	0.26	

立ケ花（C地点）柱穴計測表

第2次調査

番号	南北	東西	深(メートル)	備考
C-P24	0.4	0.41	0.29	
25	0.43	0.35	0.35	
26	0.34	0.34	0.31	
27	0.4	0.4	0.46	
28	0.65	1.25	0.23	
29	0.4	0.47	0.29	
30	0.55	0.65	0.19	
31	0.6	1.25	0.45	
32	0.3	0.35	0.25	
33	0.65	0.55	0.10	
34	0.65	0.7	0.22	
35	0.25	0.33	0.46	
36	2.0	1.07	0.21	
37	1.35	1.45	0.32	
38	0.5	0.47	0.15	
39	1.35	1.25	0.22	
40	1.3	1.7	0.24	
41	0.45	0.48	0.19	
42	1.55	1.1	0.28	
43	0.35	0.25	0.15	
44	0.35	0.34	0.30	
45	1.18	1.6	0.29	

第Ⅳ章　立ヶ花遺跡の土器概説

第１節　土器編年試案

今回の調査で出土した土器は、縄文時代前期中葉後半の諸磯式併行土器から始まって古墳時代までの各期にわたる土器が検出されている。これを表に示せば次のとおりとなる。

第Ⅰ群土器	諸磯ａ式（新）段階土器	少量
第Ⅱ群土器	関西系土器（北白川Ⅲ式系）	少量
第Ⅲ群土器	諸磯ｂ式（古）段階土器	少量
第Ⅳ群土器	諸磯ｂ式（中）段階土器	多量
第Ⅴ群土器	諸磯ｂ式（新）段階土器	多量
第Ⅵ群土器	諸磯ｃ式（古）併行土器（下島式）	やや多量
第Ⅶ群土器	諸磯ｃ式（新）併行土器（鍋屋町Ⅰ式）	少量
第Ⅷ群土器	弥生時代後期、箱清水式土器	少量
第Ⅸ群土器	古墳時代Ⅱ期古段階（五領式、新）	少量
第Ⅹ群土器	古墳時代Ⅳ期中段階（鬼高式）併行土器	少量

第２節　第１群諸磯ａ式（新）段階の土器

前に記した下水内郡豊田村上今井の南大原遺跡出土の諸磯ａ式（古）に後続する土器群で土器上半部にみられる助骨文の土器（88・146・147・292～295）斜格子文の交差点に円点を加飾されたもの（35・90～92・332～356）などがあり、胴上半部に施文される文様であり、次の段階まで用いられた文様と考えられる。爪形Ｃ字文がみられる（144・151・152・281・282～284～291）も該期のものとみられる。その他縄文地文に爪形文（87）で構成されたものや、爪形文のみの土器が該当しよう。また浅鉢形土器で木の葉文を爪形文で描いた（45・201・280）ものも同種土器としては古相を呈していると考えられる。

第３節　関西系土器（北白川Ⅲ式土器）

胎土が白褐色を呈するなど、一見在地の土器とは違う感じの搬入された土器で少破片となって存在するものが多い、木の葉文を模倣したものもあるが、爪形文を密かに施したものが多い、土器片100に対して1片程の出土量で遺跡の地理的状況を示している（177～179）。

第４節　諸磯ｂ式（古）段階の土器

県内では、上原第Ⅲ類土器（樋口1957）に代表され比較的多く遺跡が存在し豊野町上浅野遺跡からも該期の土器が検出されている。浮線文の前段階の文様をもつ土器が該当する。

ここで縄文のみられる土器を概観してみると

（Ａ）縄文施文のみの土器

右傾、単節縄文の土器が多いが左傾のものもみられる。原体には大小様々なものがみられ中には科（しな）の木の皮の繊維のごとく、粗い感じのものも存在する。当然胎土は無繊維であることは、ここの縄文土器に共通している（8・9・15・23・26・27・418）。

（Ｂ）羽状縄文土器

在地の土器の多数派を占め、ａ式からｃ式段階にわたって存在し、ｂ式段階でも多用している。（173・174）はｂ式新段階の住居址の柱穴などにみられた。同種の土器は（9・17～22・24・25〔ＳＢ1〕）であり、深鉢形の土器の主な文様である。

（Ｃ）縄文を地文とした文様の土器

1）口縁が低い波状の外反のゆるい器形の深鉢形土器で縄文地文上に竹管工具で押引した文様が上半部にみられ、口唇に刻みなどの加飾を加えた土器（5）が2号住居址SK 2から検出されている。このように口縁端部（口唇）に小突起（85・120・409・415・420・450・452～454）や刻み（縦・綾杉状・口唇状）が加飾されている（10・17・27・32・37・39・42・43 47・52・157・171・407・411・412・416・421・422）。

2）縄文地文上に諸磯ｂ式にみられる浮状文を模倣した渦巻文などを沈線をもって表現した土器で、ｂ式中段階以降に出現すると思われる（79・83・369・375）。

3）綾絡文のみられる土器

羽状縄文または、右傾単節縄文の中に横綾絡文がみられるもので、2条平行して存在するものもある。これはａ式段階からみられる文様のようである。ついでに記すと、中野市姥ヶ沢遺跡の縄文初頭土器では、全部縦位となっている（7・10・13・14・170・172・459）。

4）羽状縄文の結節のみられるもの

屈折部にループ文のみられる羽状縄文のものと（23・27・32・99・101・168）結節のみられるもの（277・464）がある。

5）撚糸文土器

本遺跡では1例のみ存在した（98）。

その他に木の葉状文を爪形Ｃ字文で表現したり、Ｓ字形その他の文様を表現した土器（51・86・123・124・186・201）文様に突刺文の伴う土器などである。

第５節　諸磯ｂ式（中）段階の土器

底部が下方にやや張り出しぎみで、胴部は二重に屈折し上半部が強く内折して口縁に円孔をめぐらす、浅鉢形土器（2）は、表面が赤彩されている。この赤彩された土器は、ａ式の段階からｂ式の段階まで顕著にみられ、特に浅鉢形土器に多く無文の同種土器にも赤彩が残っており、この種の土器の性格を物語っている。これと同種のものは、上水内郡牟礼村丸山遺跡から検出されている。また獣面把手（66）のみられる土器もこの時期の特徴で、波状口縁上に付加されている。また縄文地文上に斜状または、半円状などの平行沈線で、上半部に施文される深鉢の文様も同期のものと判断される。また、浮線文が搬入された土器のものより太く器厚も厚く、暗褐色に焼成された、波状口縁のキャリバー形の深鉢などがこの時期のものと推定される。入組状になった木の葉状文の浅鉢形土器は、この該期と次の段階に属すると思われる（60）この木の葉状文に属する文様の浅鉢形土器には、黒漆が塗布されたものがある。

第６節　諸磯ｂ式（新）段階の土器

1号住居址の中央部から関東地方などから搬入されたとみられるｂ式の指標とされる浮線文の土器が検出された(6) この土器は右傾の単節縄文を全面（下半部は欠損して不明）に施し、口縁部は隅丸方形を呈し波状口縁が2対みられ、文様区画は横位で波頂下に同心円状に細かい粘土紐を付加して、渦巻きを作っているが、必ずしも4ヵ所が同一文様ではない。また半円状に作っている所もあり、下に平行に4条浮線文が円周し、その下に窓枠状の模様が7ヵ所連結している。この模様帯の浮線には刻みが附加されず、胴下半部の平行の浮線文とともに、ほかの全部に左右対象となるように縄状の刻み目が鋭利な工具で附加されている。浮線文が乾燥の進んだ状態で附加されたため所々剥落している。器厚は0.5cm内外で薄く、焼成は堅緻であり、この地方で検出される諸磯ｂ式の優品である。

この種の搬入されたと思われる土器の破片は7個体ほどあり（203・204・206・207・268・331）この粘土の細い浮線文は中段階でも後半に属するとみられている。その他浮線文のみられる土器は（296・311・313・317～321・325・327～329）などである。

第７節　諸磯ｃ式（古）段階の土器

深鉢は、口縁の形状が平縁となり、大きく外反する器形の土器が多くなり、口縁部に円形の貼付文（131・122は前の段階）がつき、地文の縄文はわずかで条線文となり、上に浮線文やボタン状貼付がつき（131・134・477・501）口縁部には貝殻状の貼付がつき（137・140・

225）太い粘土紐上に、それより細いC字形の押捺を行っている。(133・251・252）太い粘土紐上にD字形の押捺のもの（253）もある。平行条文線文の土器（208・210・213・361～363・373・374・376など）や細い沈線で円形（143）や指紋状（142・372）の土器もこの期の土器と思われる。無文の浅鉢形土器（263）はこの段階の土器と思われ、さきにみた（264～266の土器に続くものと思われる。その他篦切文（254・255・485・500）の土器がある。該期の遺跡は、長野県などの中部山岳地帯に多いとされている。

第８節　諸磯ｃ式（新）段階の土器

C式（古）の延長線上にあるが、羽状縄文の土器が続いてみられるほか、新潟県中頸城郡柿崎町の鍋屋町式土器と共通する点が多いが、鋸歯状三角沈刻文の土器は、本遺跡から検出されていないため、おもに鍋屋町Ｉ式の段階の土器で終わっている。この鍋屋町Ｉ式土器は、結節浮線文で円形・平行・三角状（136・234・242・244・247・249）などに器面を華麗に飾っている。縄文地文に平行線のみられる（40）斜格子状（93）なども鍋屋町式土器と共通している。

第９節　弥生時代後期・箱清水式土器

遺構の検出はなかったが、覆土中から波状文の甕破片（257）赤彩された壺の口縁部破片などが検出された。

第10節　古墳時代Ⅱ期古段階（五領式（新））併行土器

1号住居址の東側に諸磯ｂ式土器と黒土層をはさんで10cm以内の上層にあった土器は小形丸底壺2個体・高坏2個体・河原石1個など集中していた。また2号住居址北側には10cmの上層から壺が1個体を検出したが、黒土層で耕作土中のため破壊されており遺跡は明確でなかった。

小形坩（258・259・261）は内部に明瞭に手づくね跡を残し（261）のごとく外面にヘラの整形痕を残しているものもある。甕（262・508・511）も該期のものと思われ、外面にハケ目痕を明瞭に残し、輪積み整形痕も明瞭である。

壺は3個体程検出され（図示は2個体・509・510）また器台も数個体検出されている。(512・513）これらはいづれも前述の出土位置から検出されている。

第11節　古墳時代Ⅳ期中段階（鬼高式）併行土器

これも覆土中から内面黒色磨研、外面も篦磨きされた鬼高式の坏が3個体ほど検出されている。これらは千曲川に沿った通行路と仮泊の人々の遺産であろうか。

〈参考文献〉

前掲文献は略

8. 小野勝年ほか　『下高井』　1953
9. 室岡　博ほか　『鍋屋町遺跡』　1960
10. 金井正三　「中野市立ヶ花遺跡出土の前期縄文土器について」「高井」41号　1977
11. 山口　明　「縄文時代前期末葉土器と鍋屋町式土器」「長野県考古学会誌」39号　1980
12. 長野県中央道遺跡調査団「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」原村その5　昭和51・52・53年度　1982　（阿久遺跡）
13. 今村啓爾　「諸磯式土器」『縄文文化の研究』Ⅲ　1982
14. 山口　明　「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」「長野県考古学会誌」48号　1984
15. 小林達雄ほか　『縄文土器大観』草創期・早期・前期、谷口康浩「諸磯式土器様式」　1989

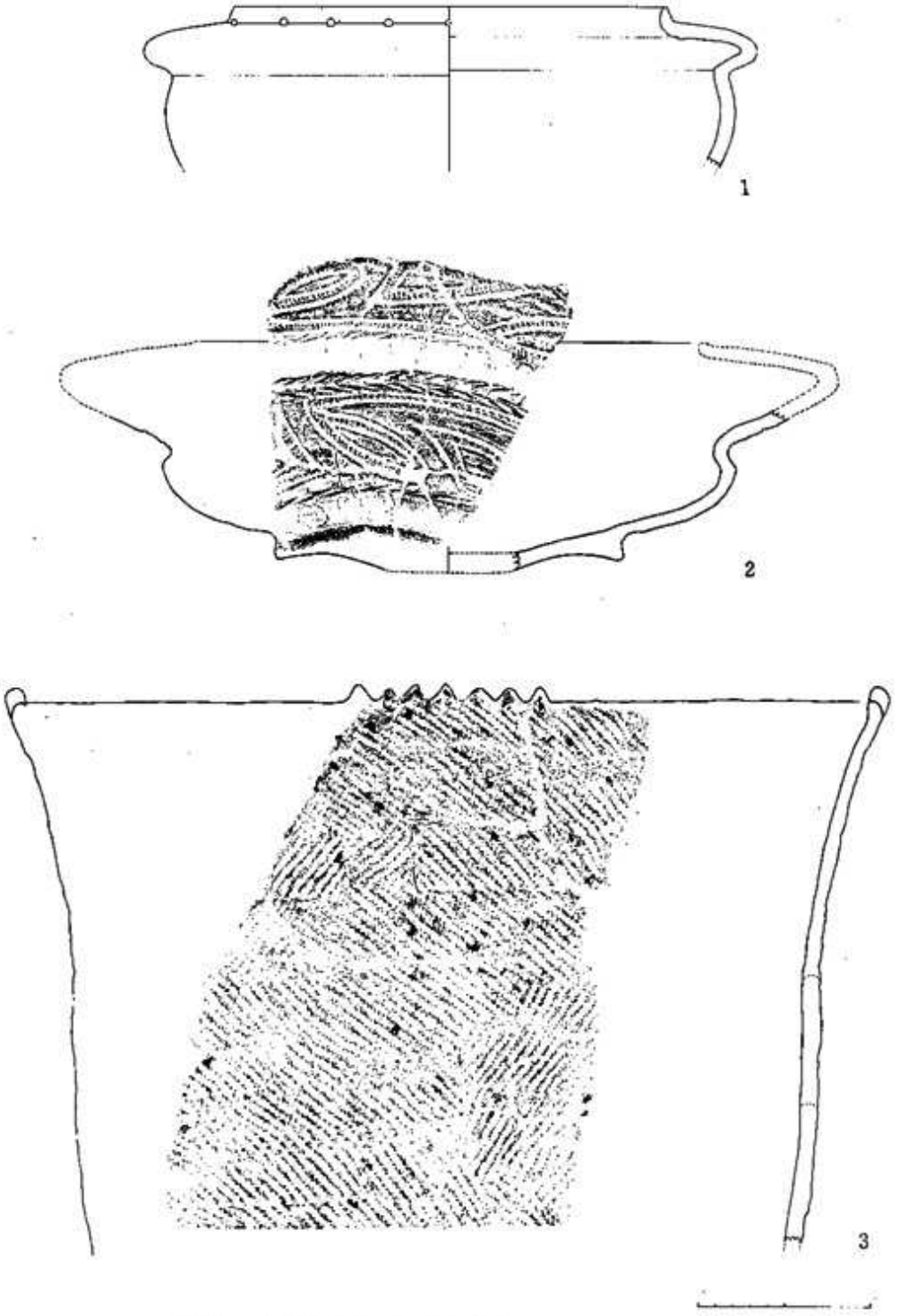


図24　土器実測図（第1次調査）

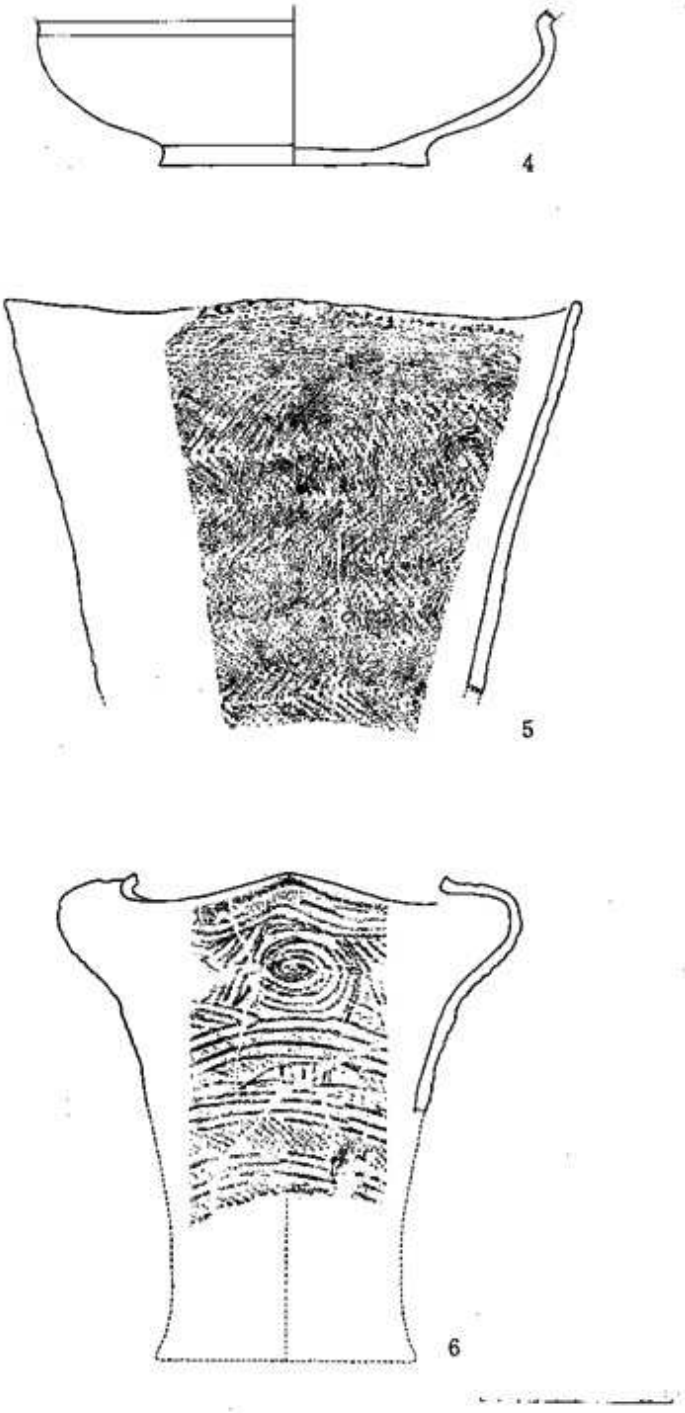


図25　土器実測図（第1次調査）

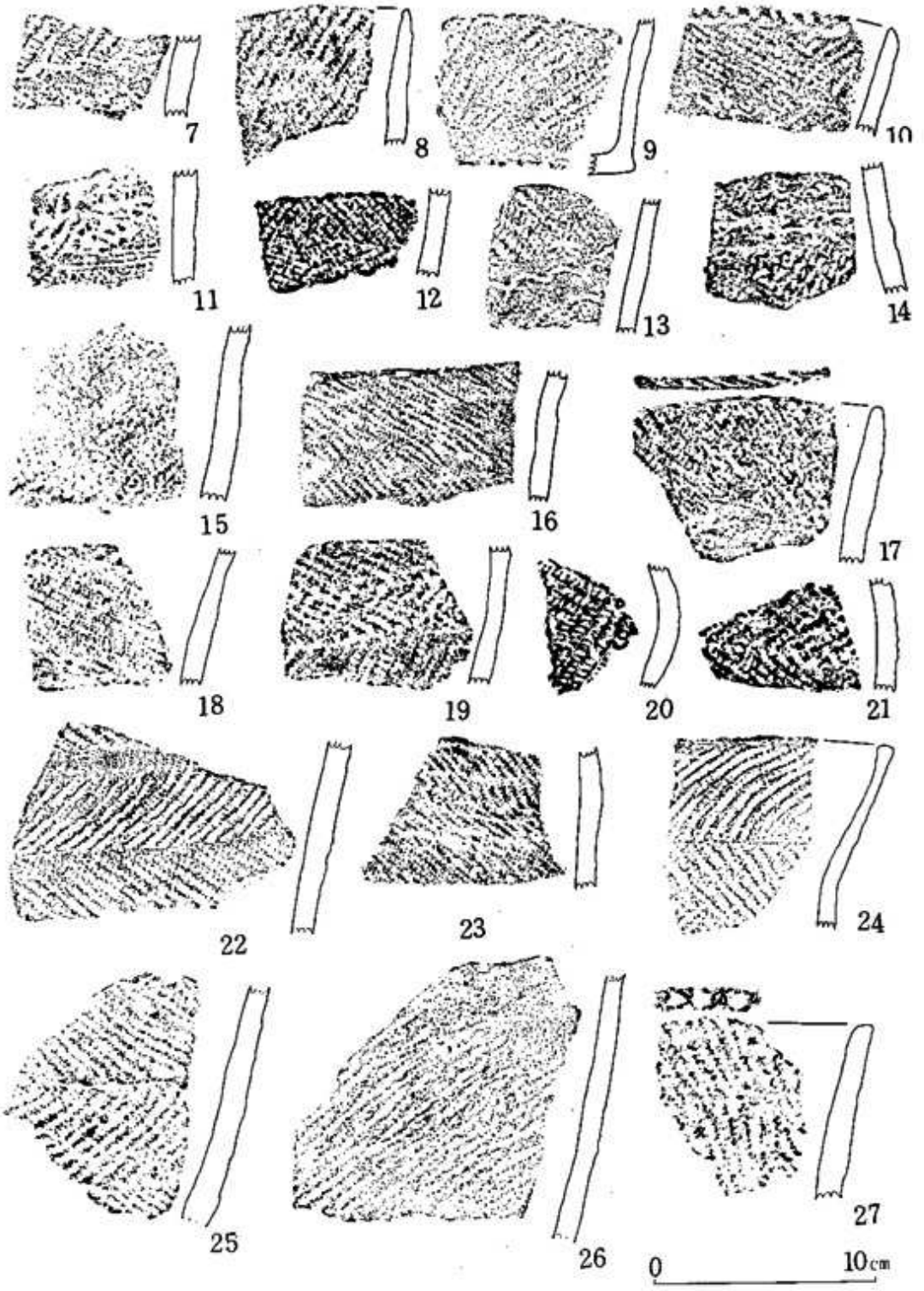


図26　土器拓影図（第1次調査）

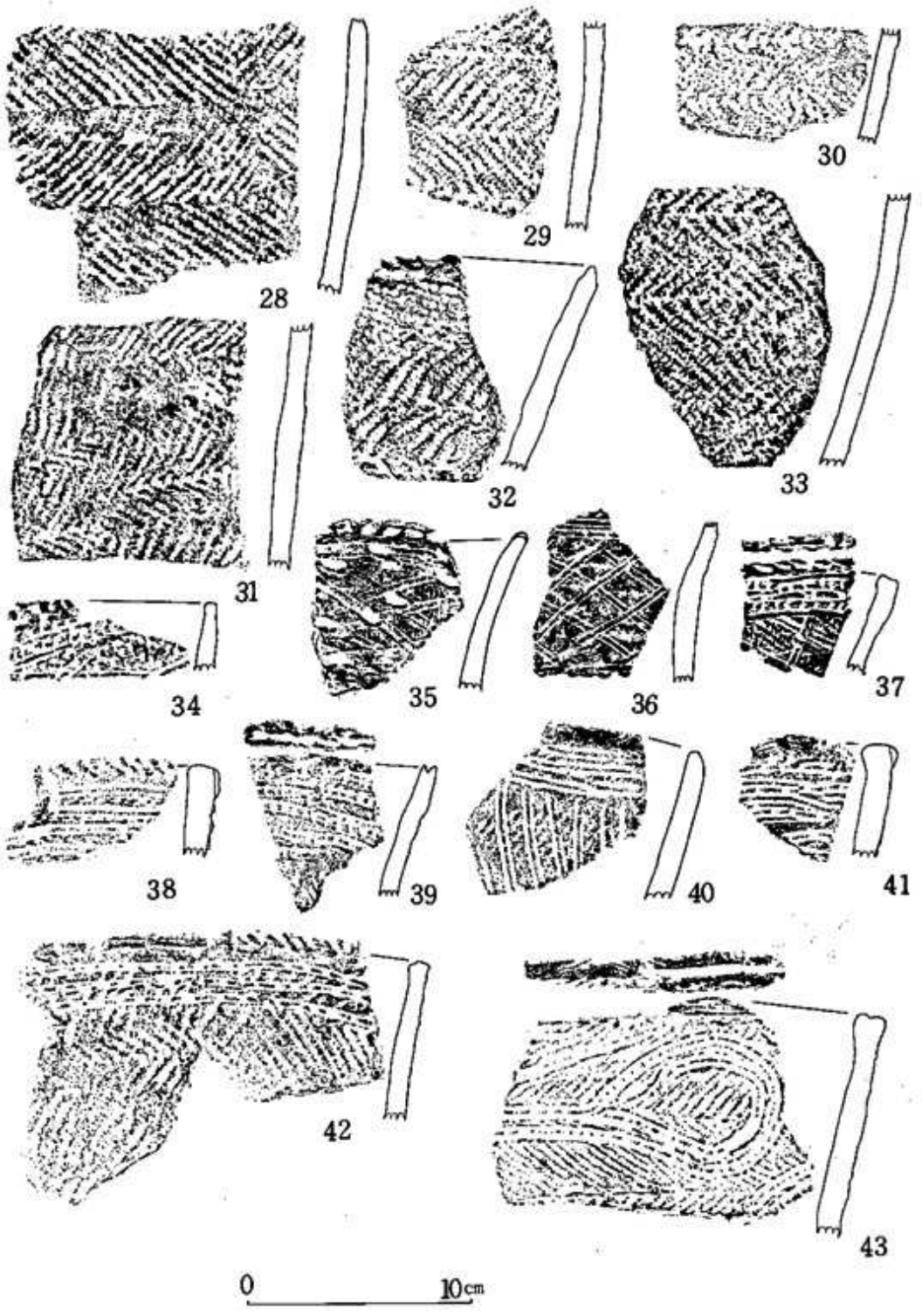


図27　土器拓影図（第1次調査）

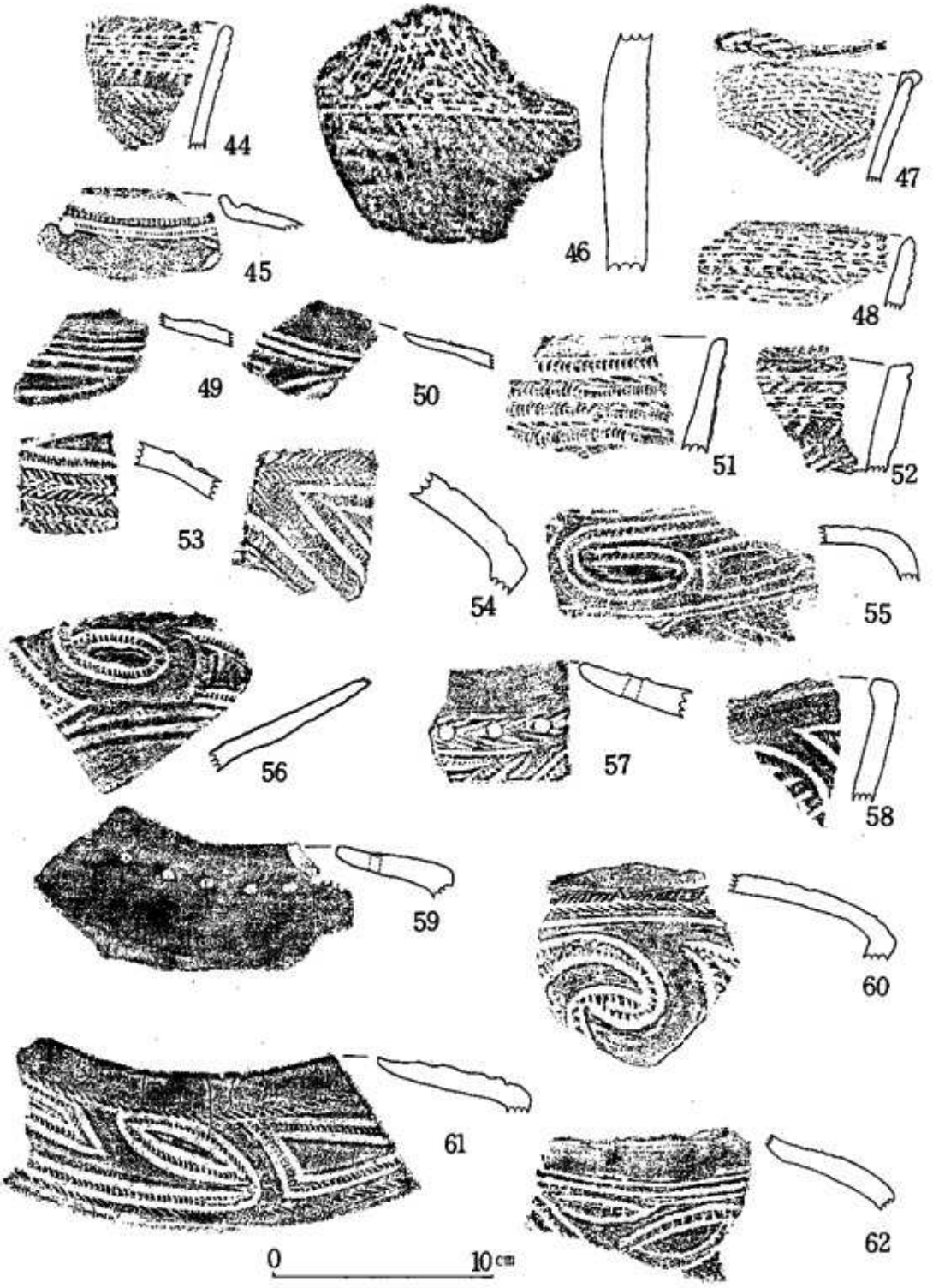


図28　土器拓影図（第1次調査）

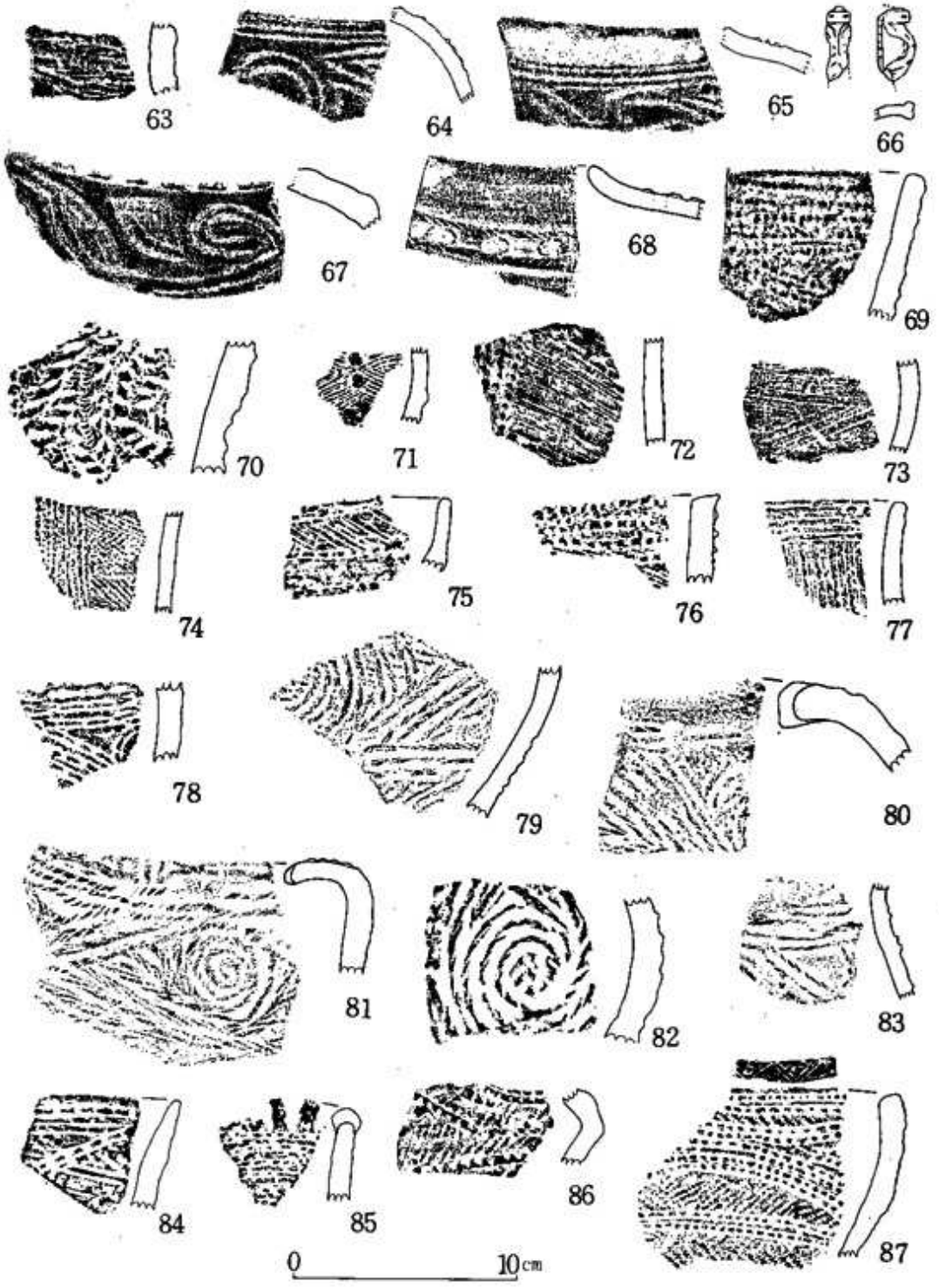


図29　土器拓影図（第1次調査）

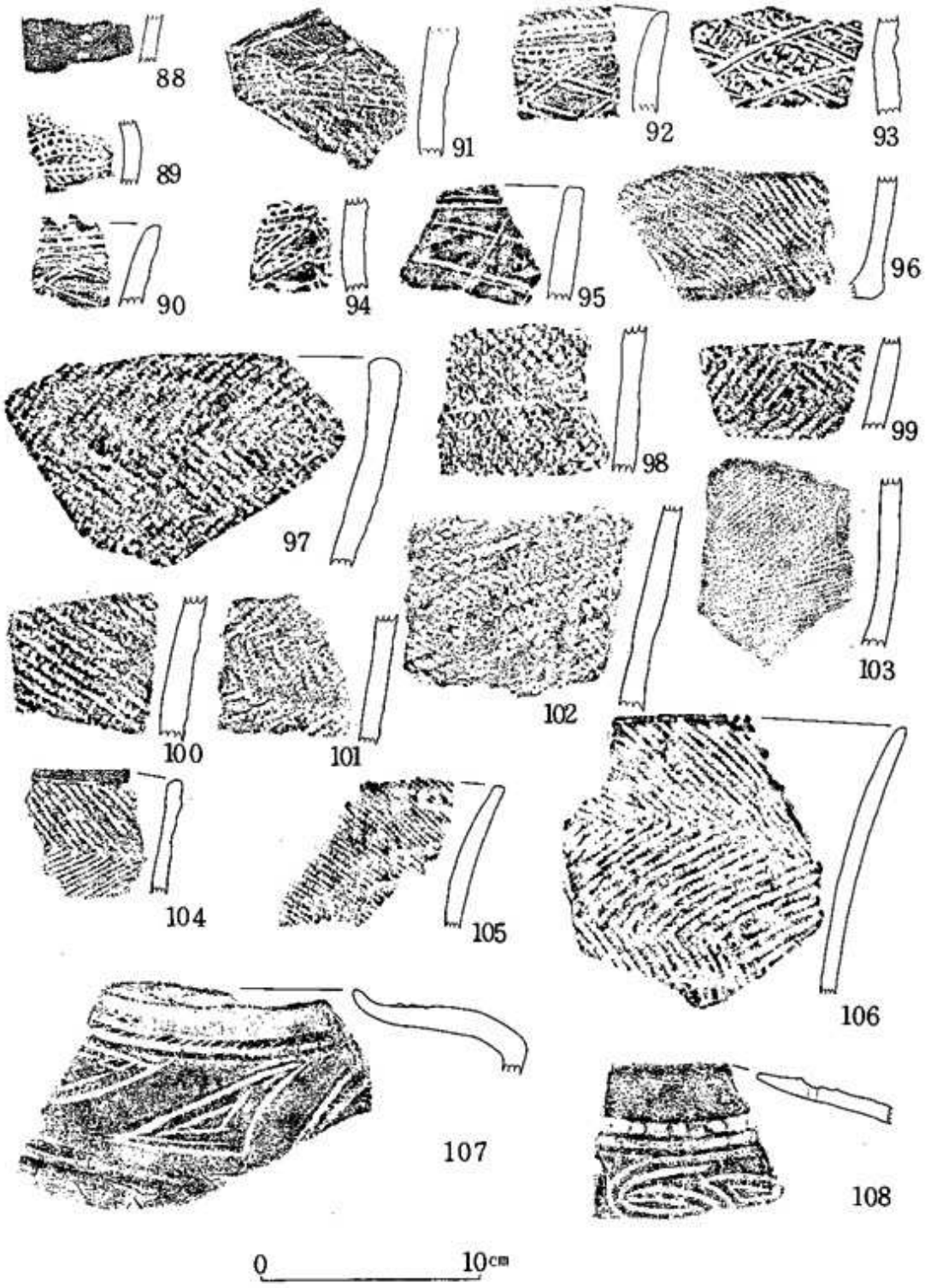


図30　土器拓影図（第1次調査）

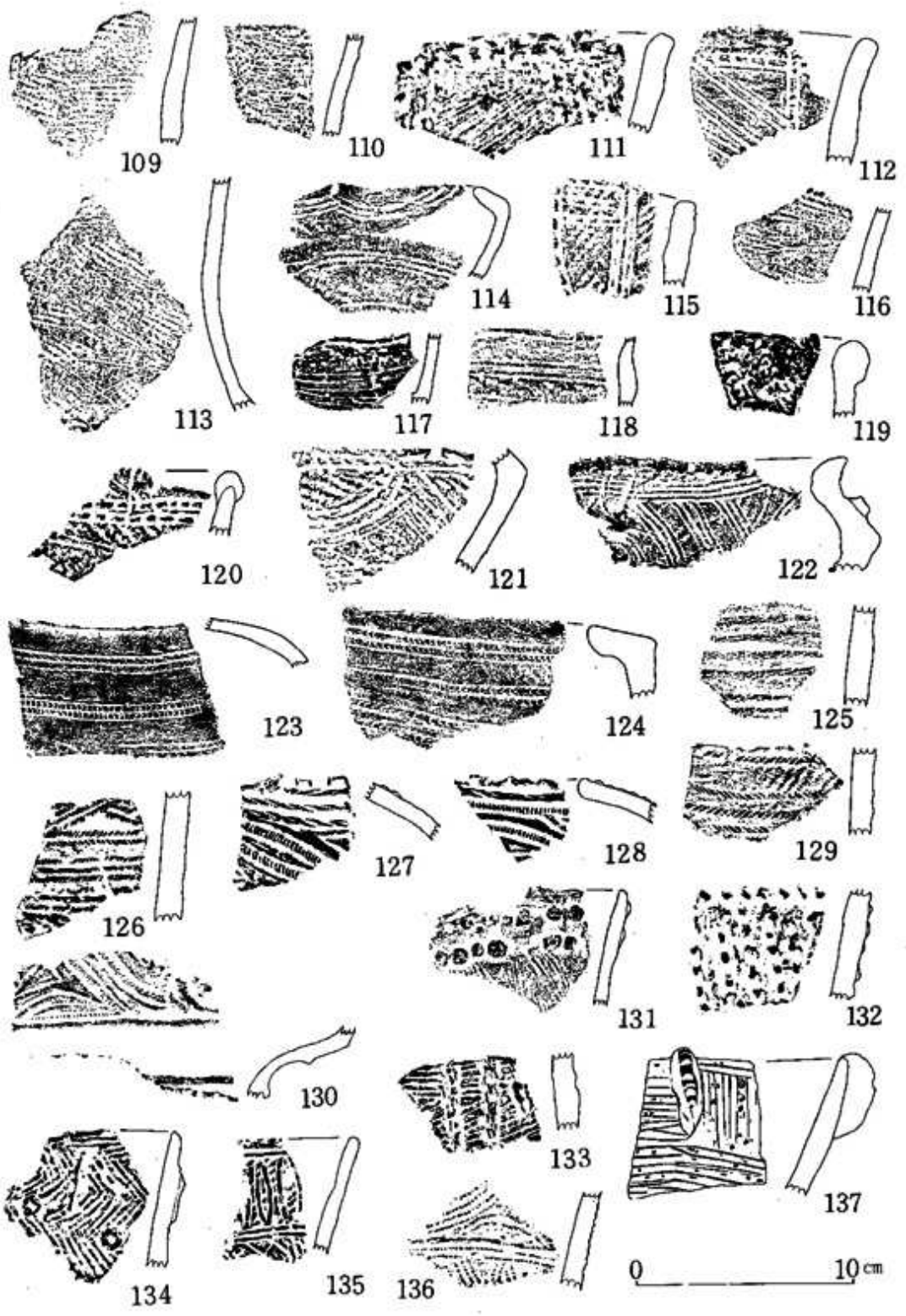


図31　土器拓影図（第1次調査）

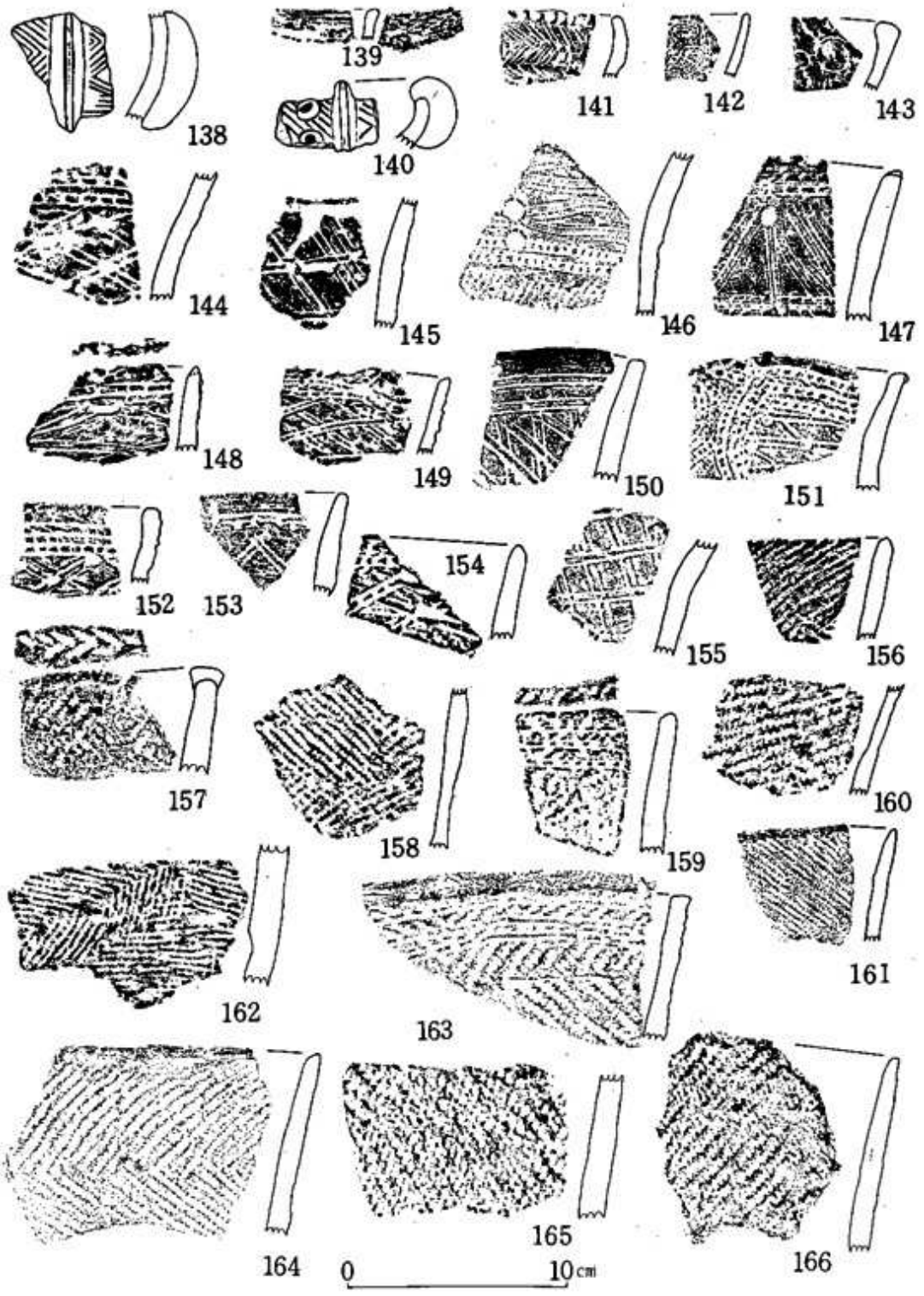


図32　土器拓影図（第1次調査）

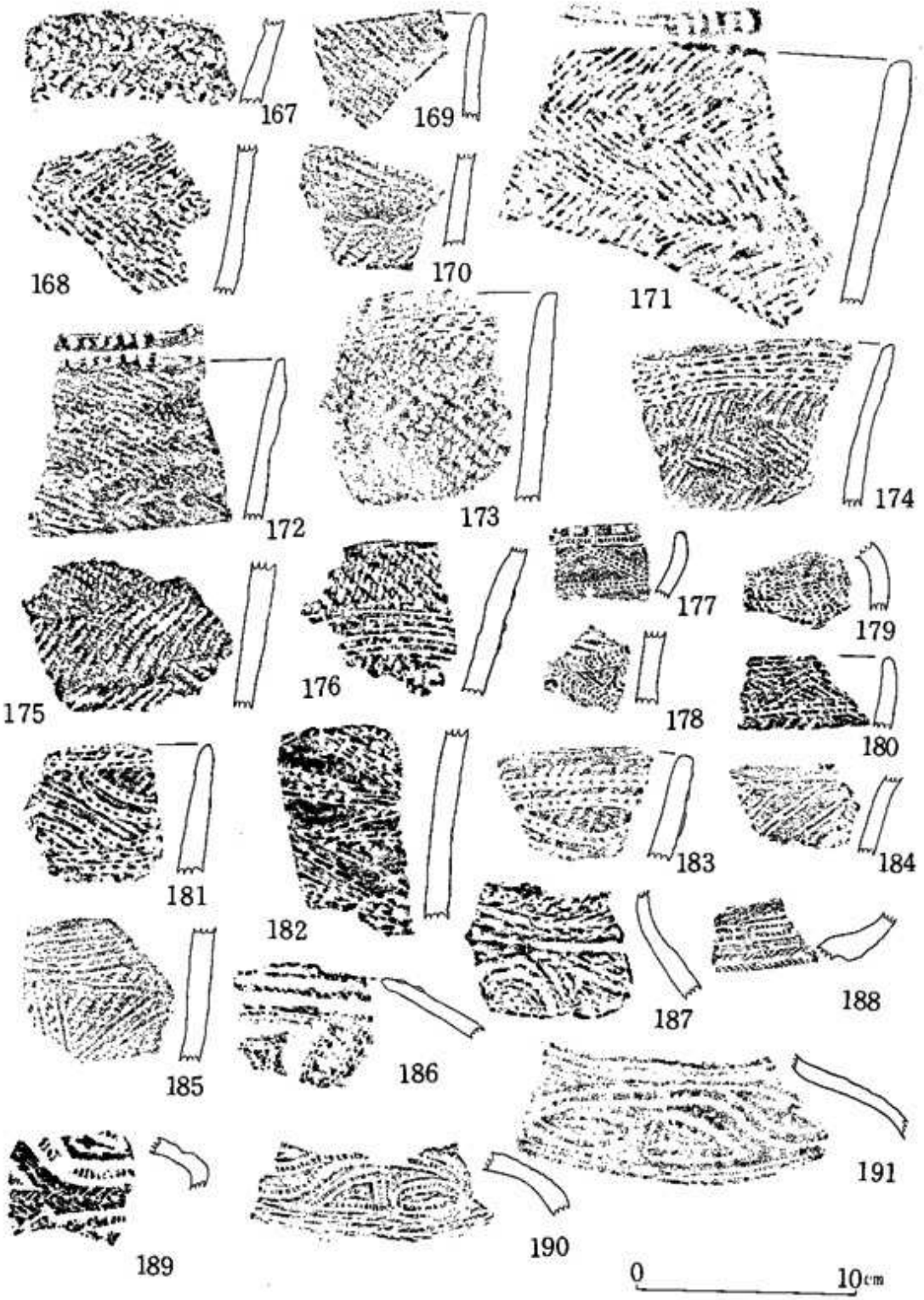


図33　土器拓影図（第1次調査）

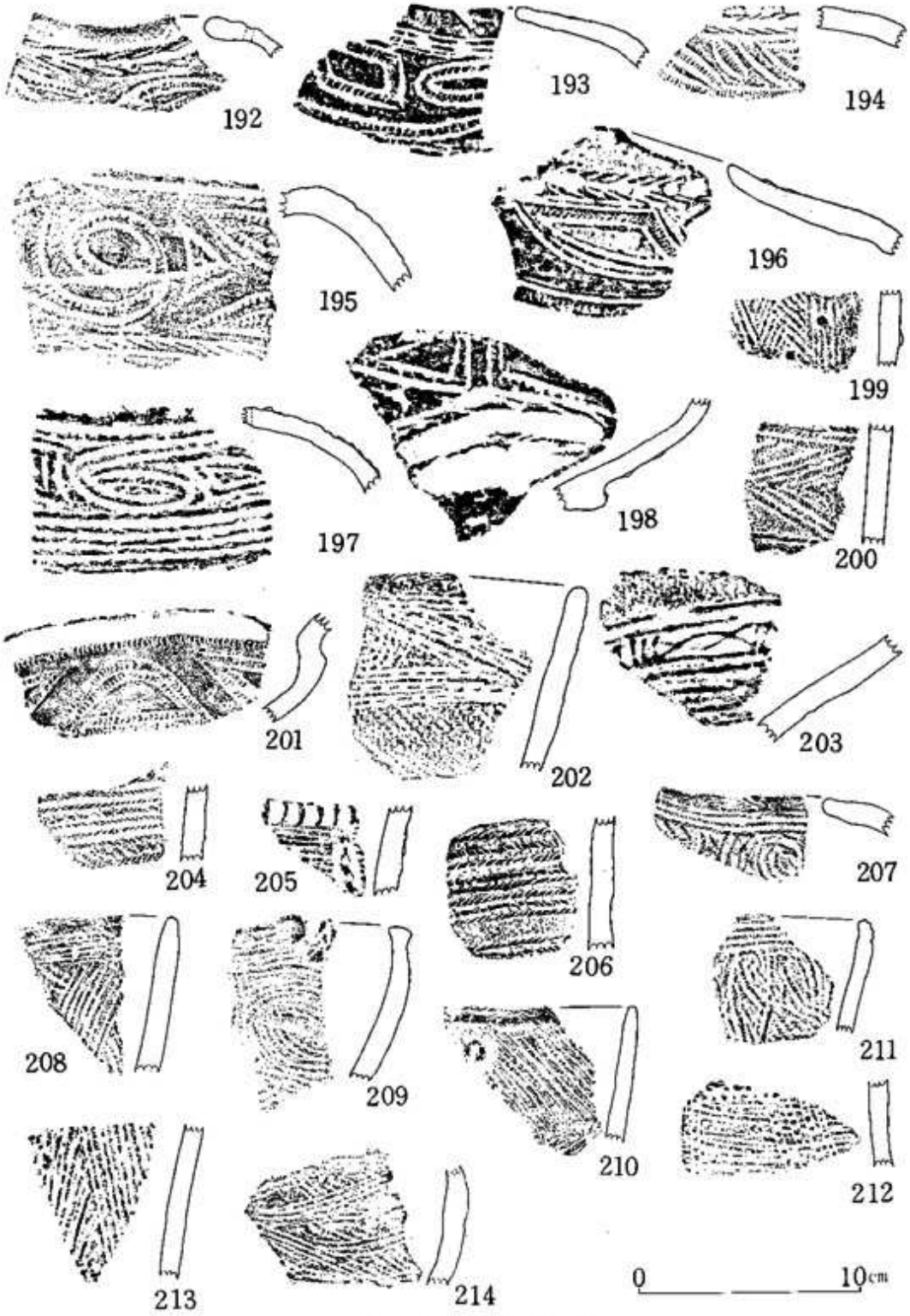


図34　土器拓影図（第1次調査）

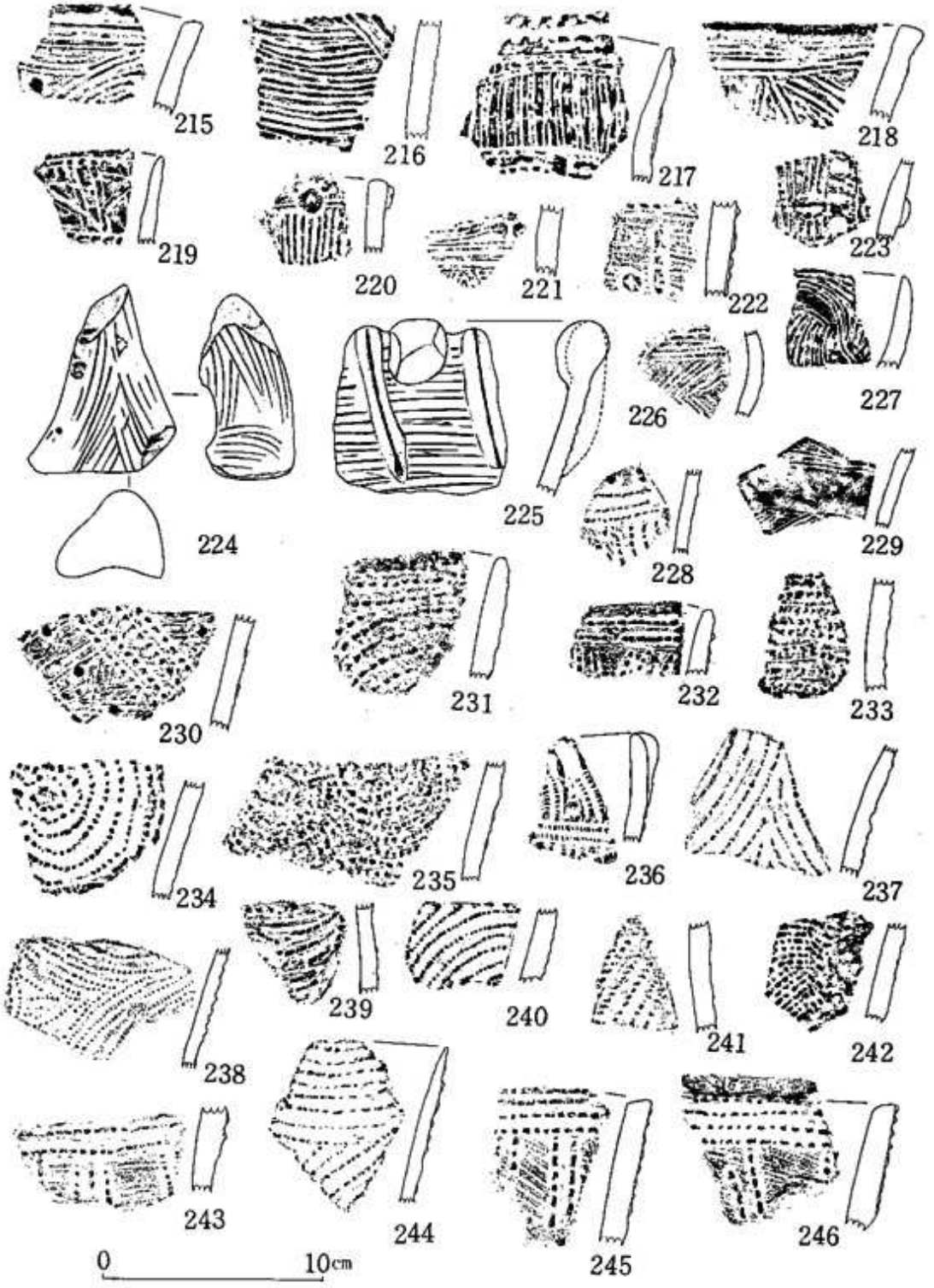


図35　土器拓影図（第1次調査）

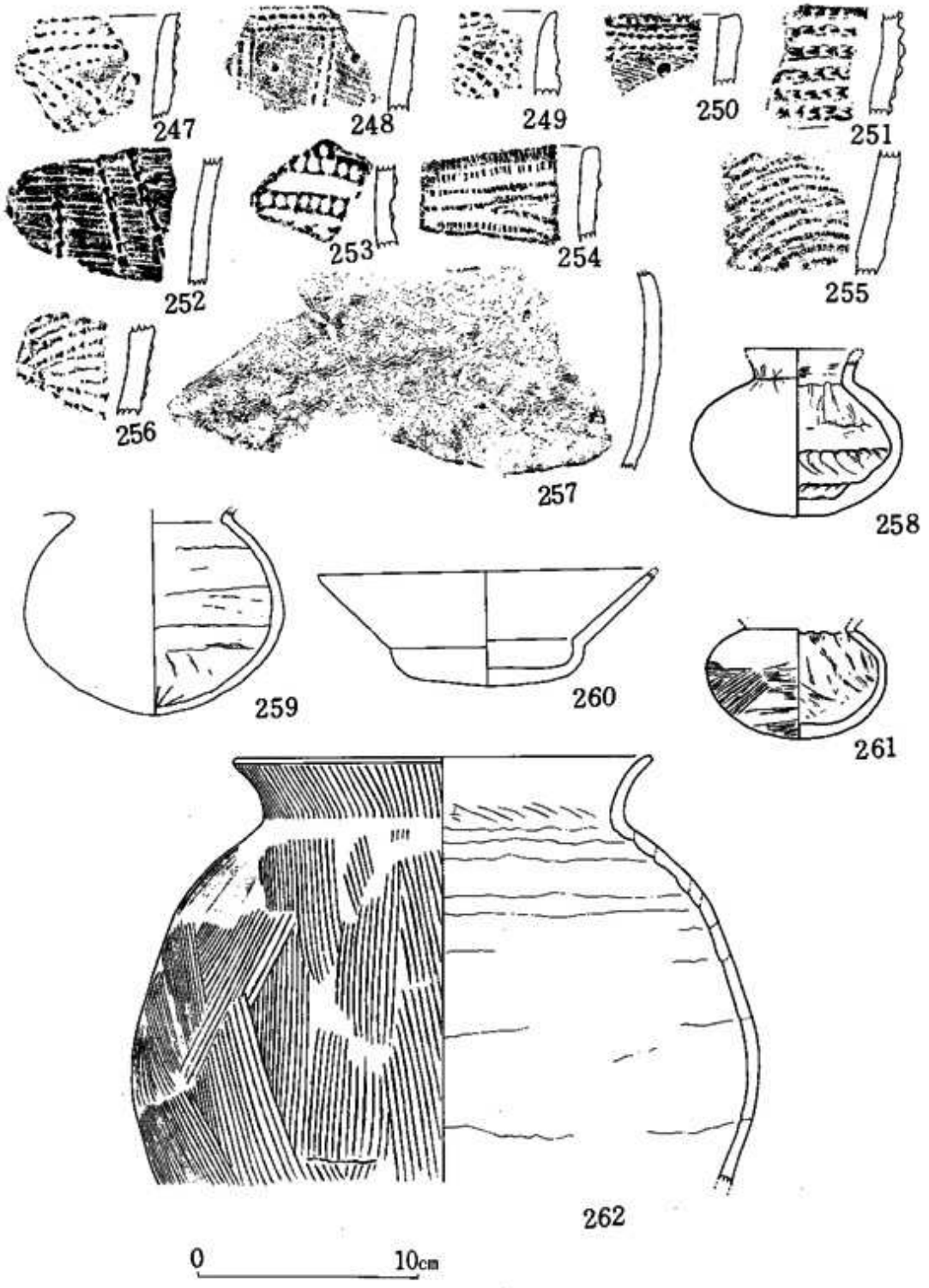


図36　土器実測・拓影図（第1次調査）

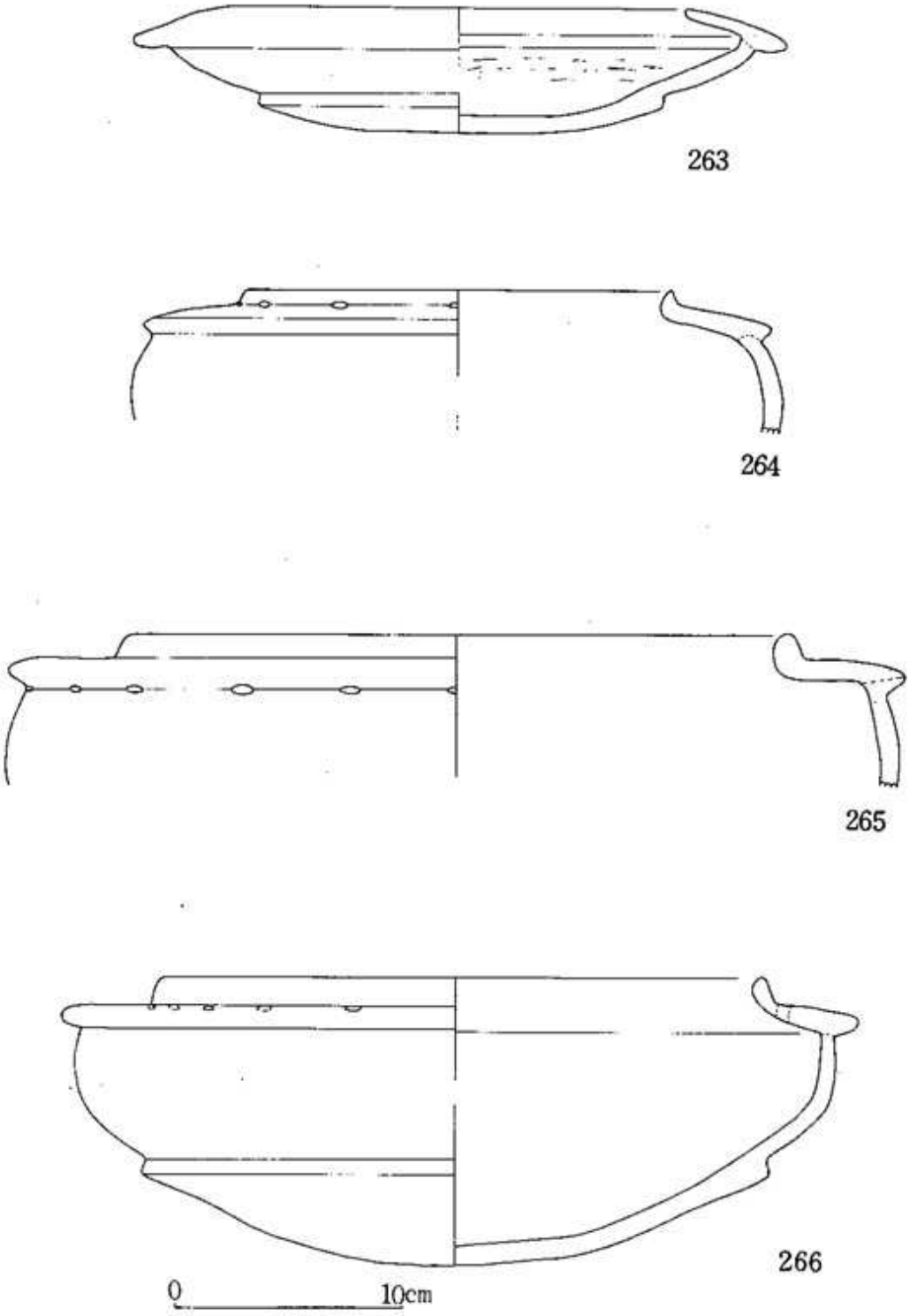


図37　土器実測図（第2次調査）

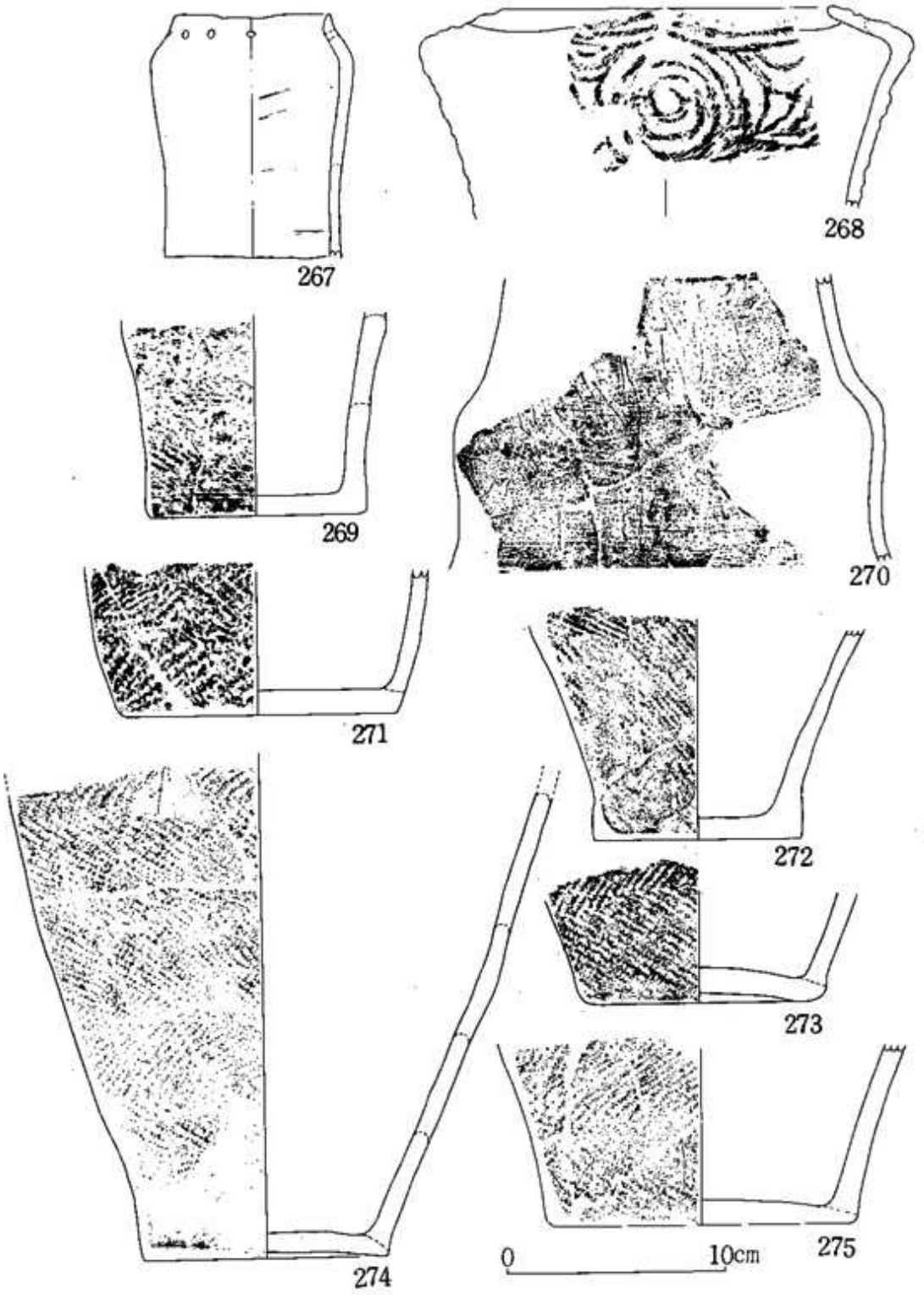


図38　土器拓影図（第2次調査）

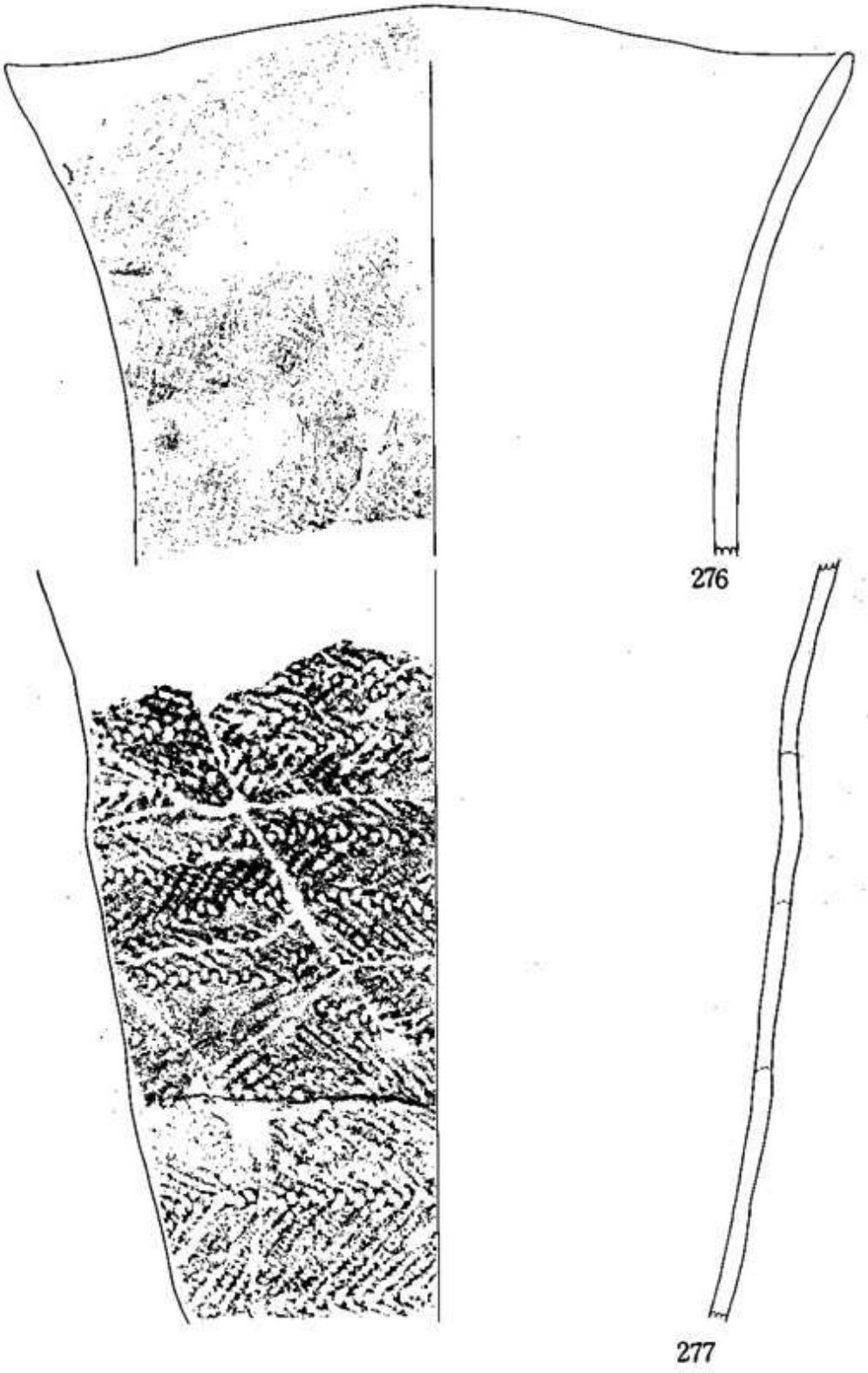


図39　土器実測図（第2次調査）

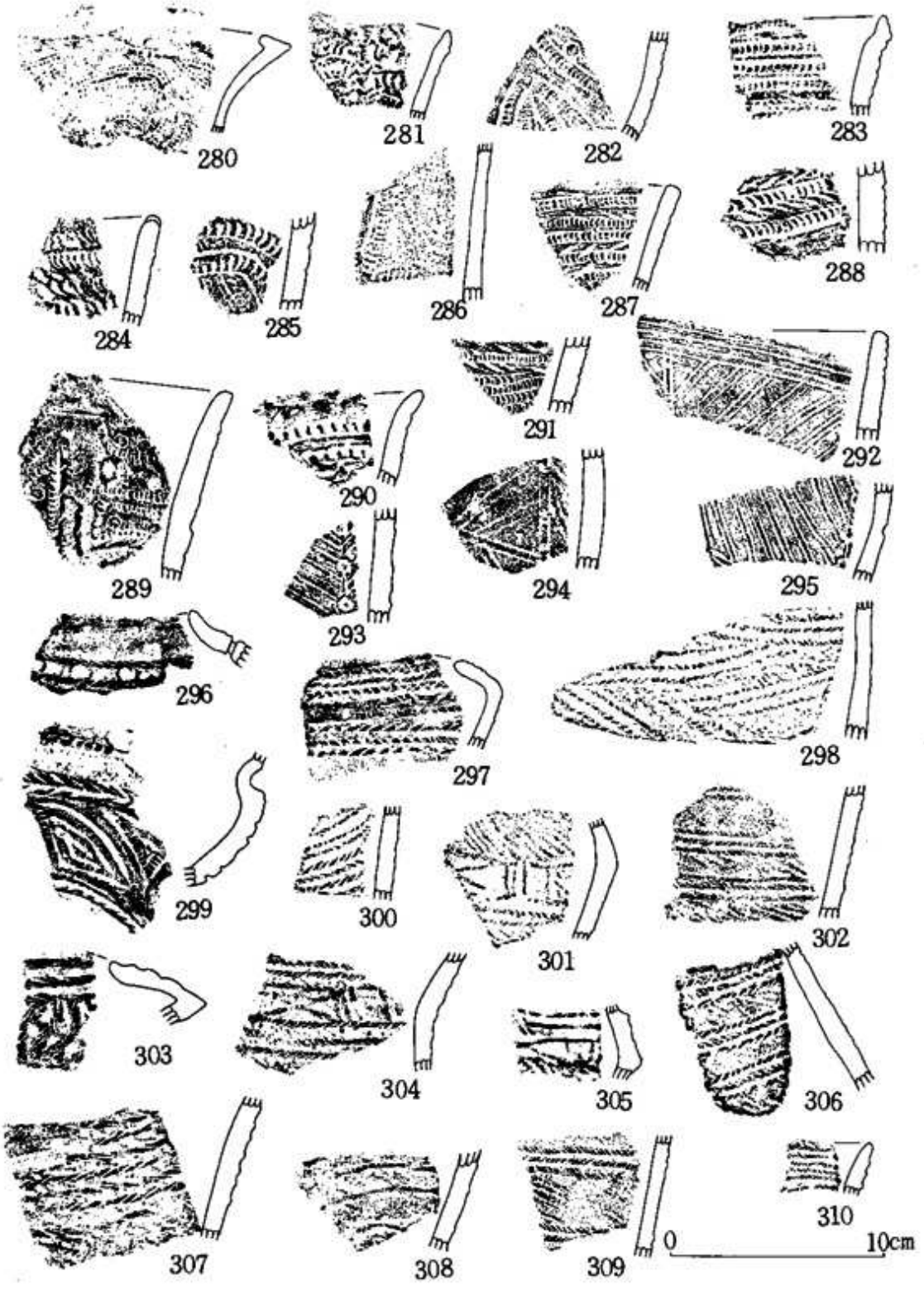


図40　土器拓影図（第2次調査）

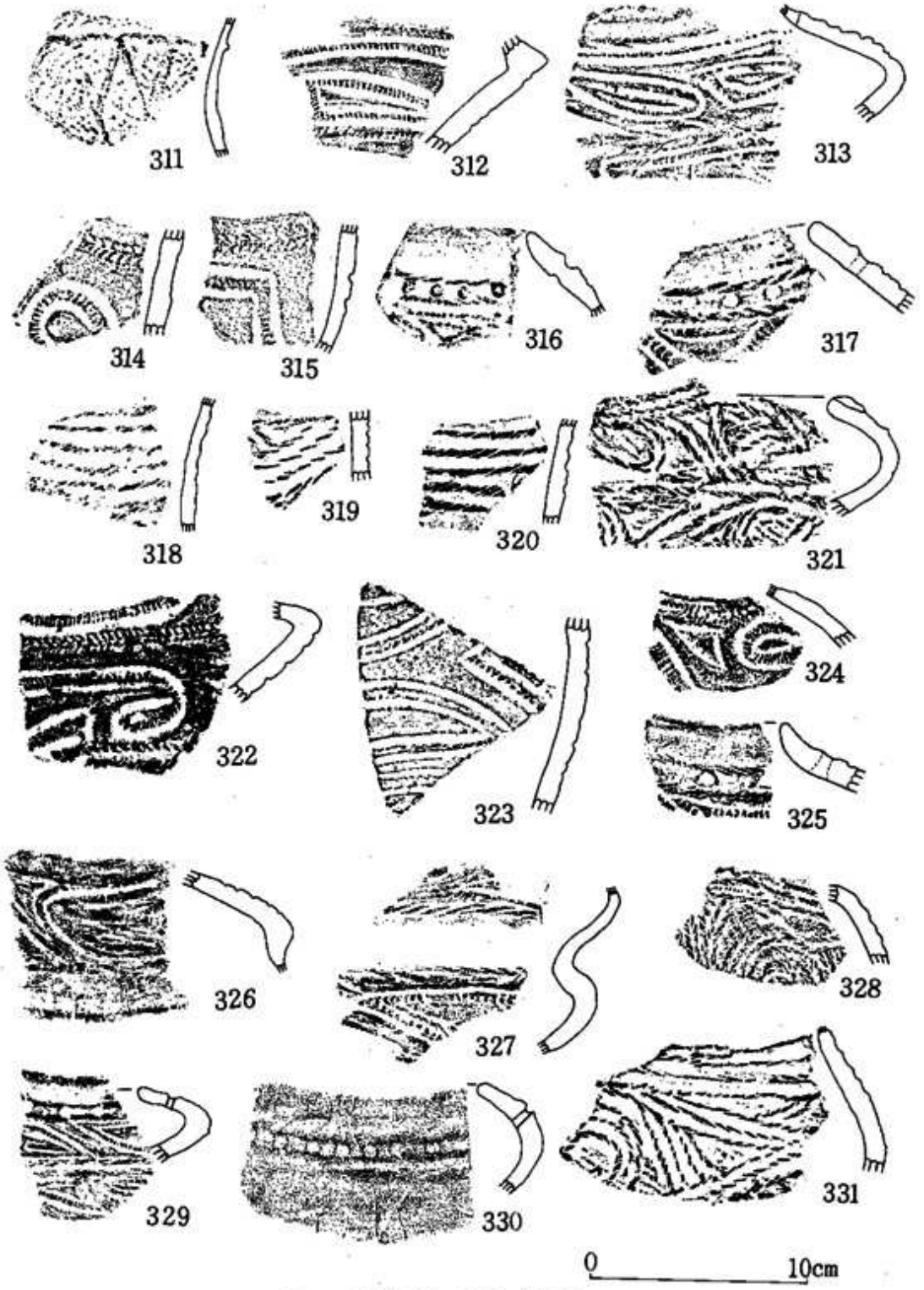


図41　土器拓影図（第2次調査）

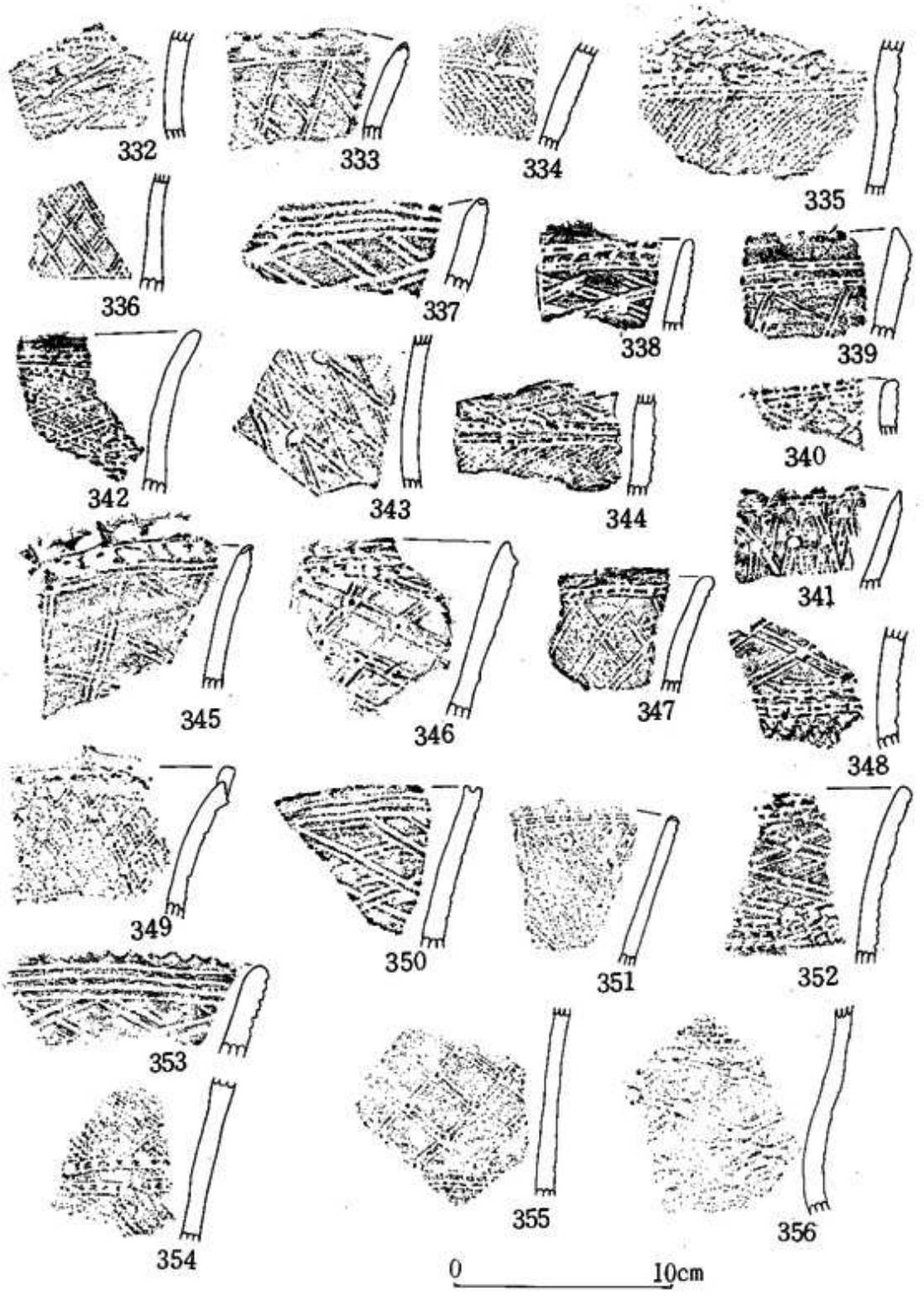


図42　土器拓影図（第2次調査）

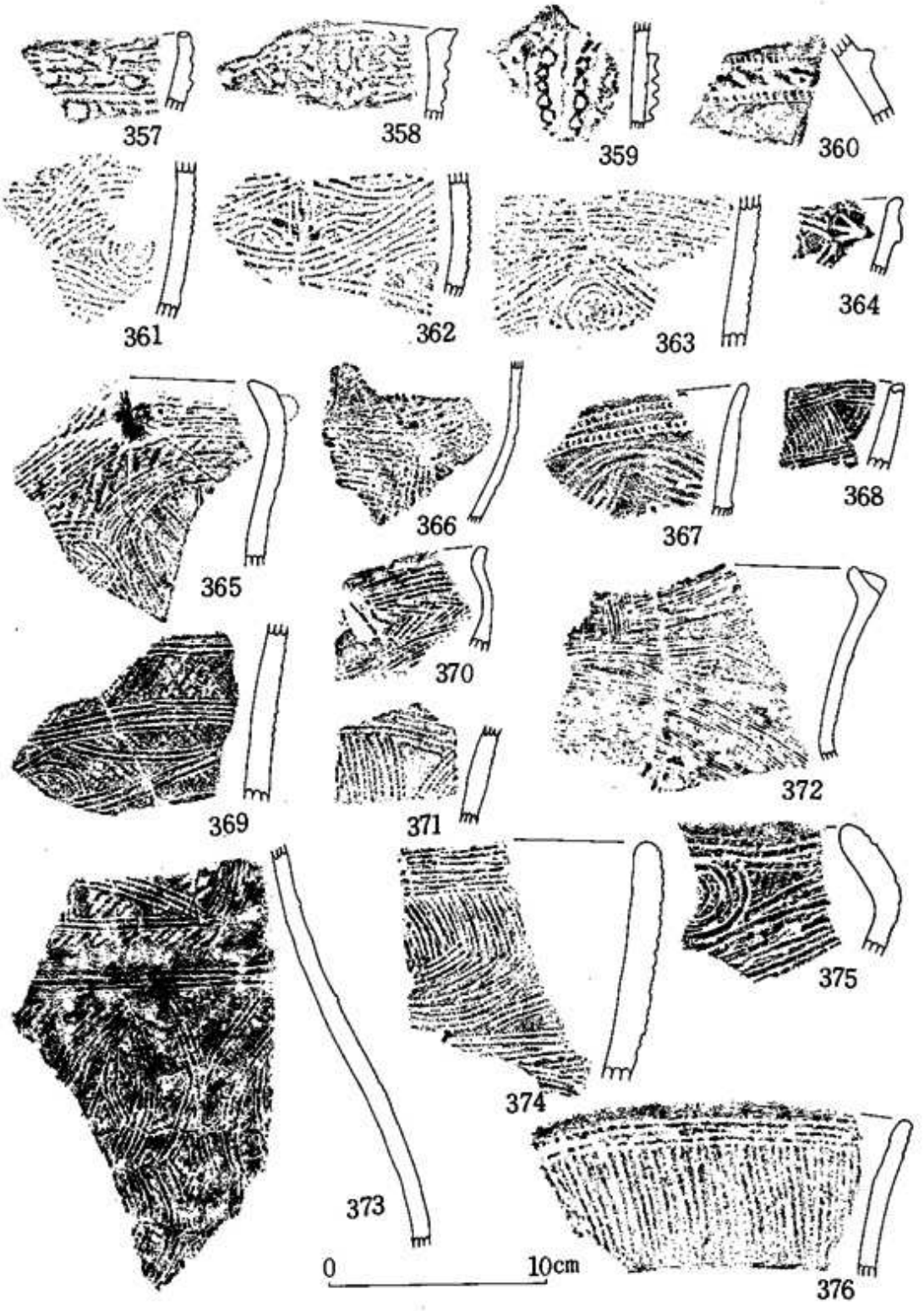


図43　土器拓影図（第2次調査）

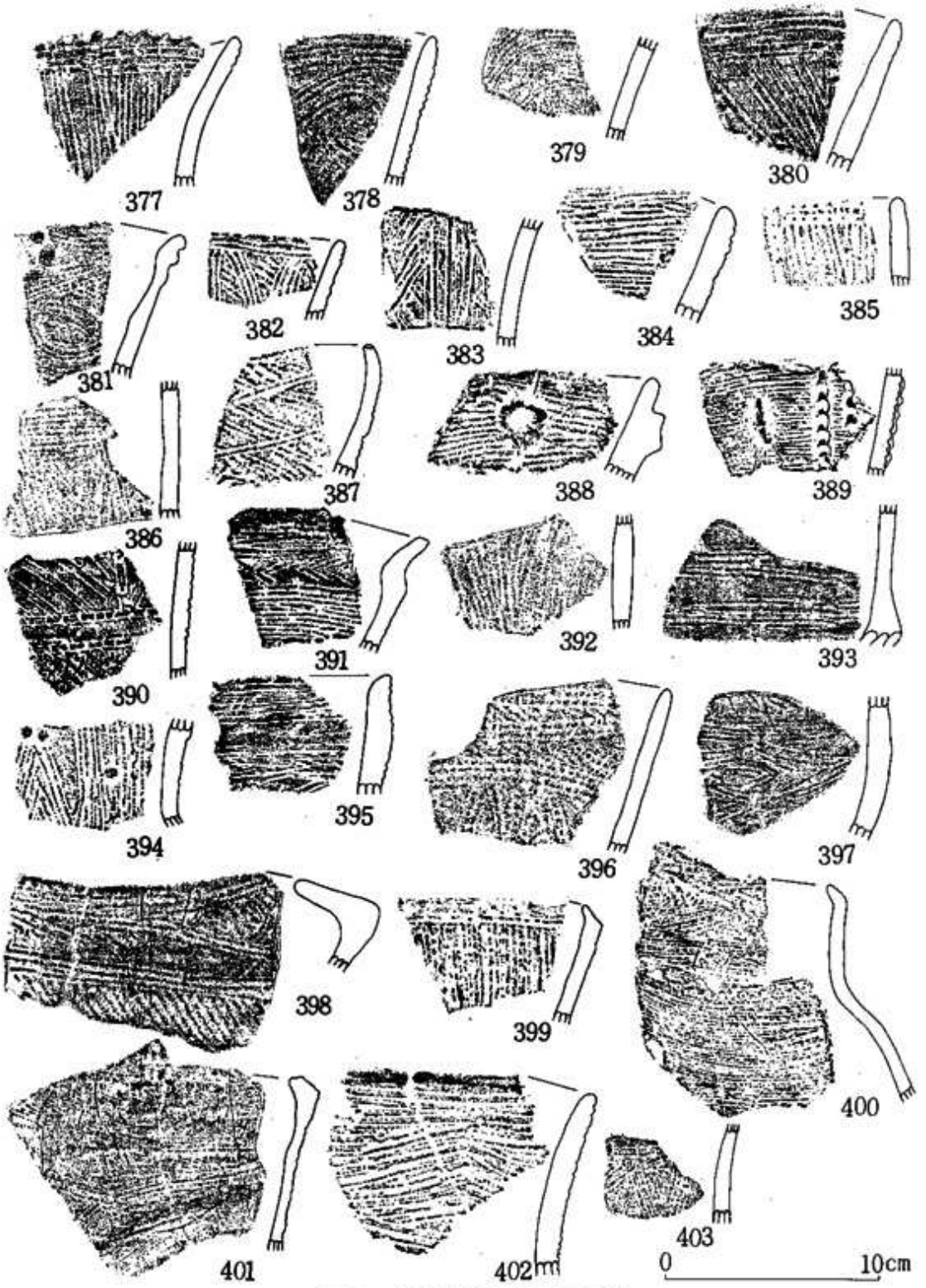


図44　土器拓影図（第2次調査）

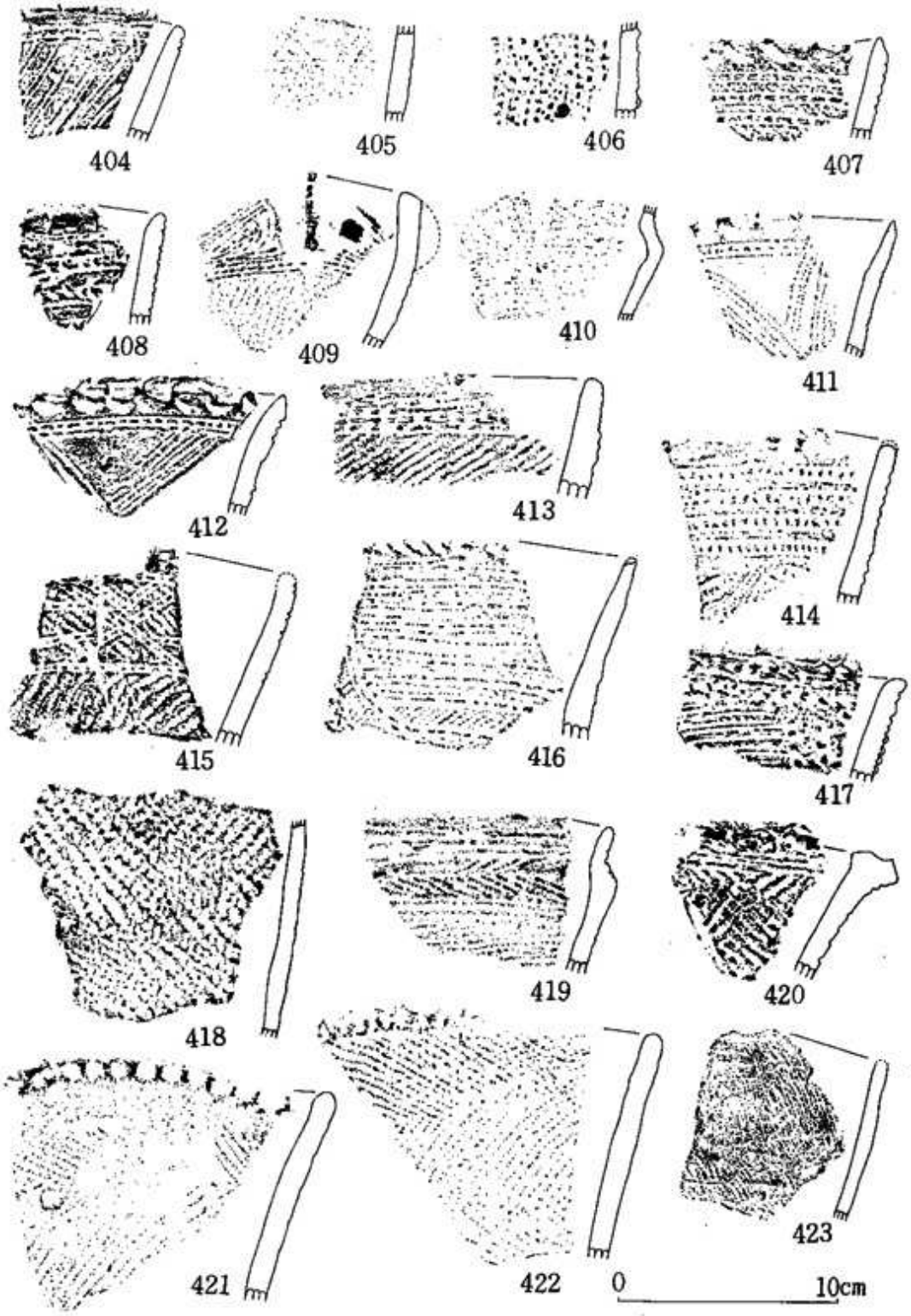


図45　土器拓影図（第2次調査）

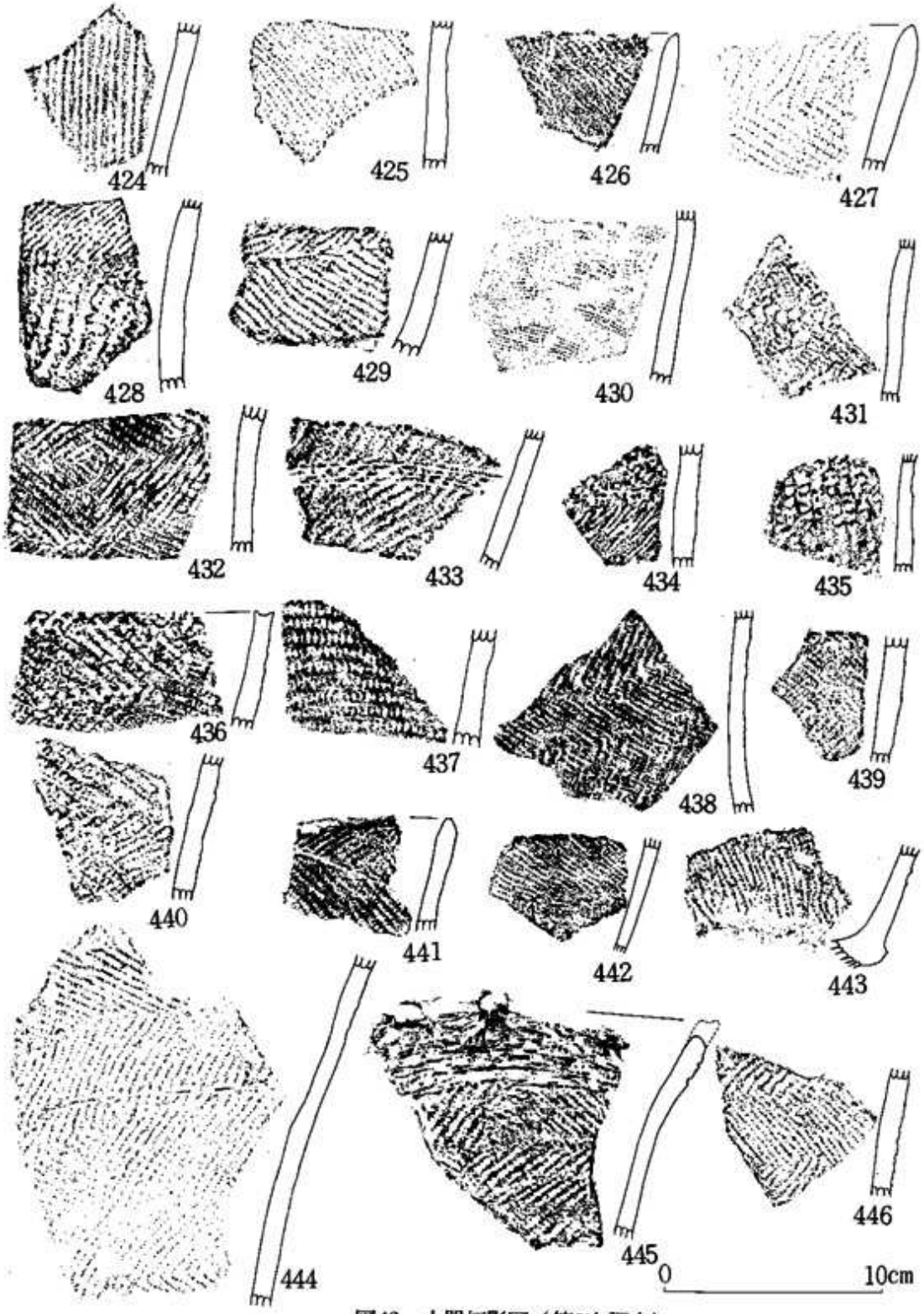


図46　土器拓影図（第2次調査）

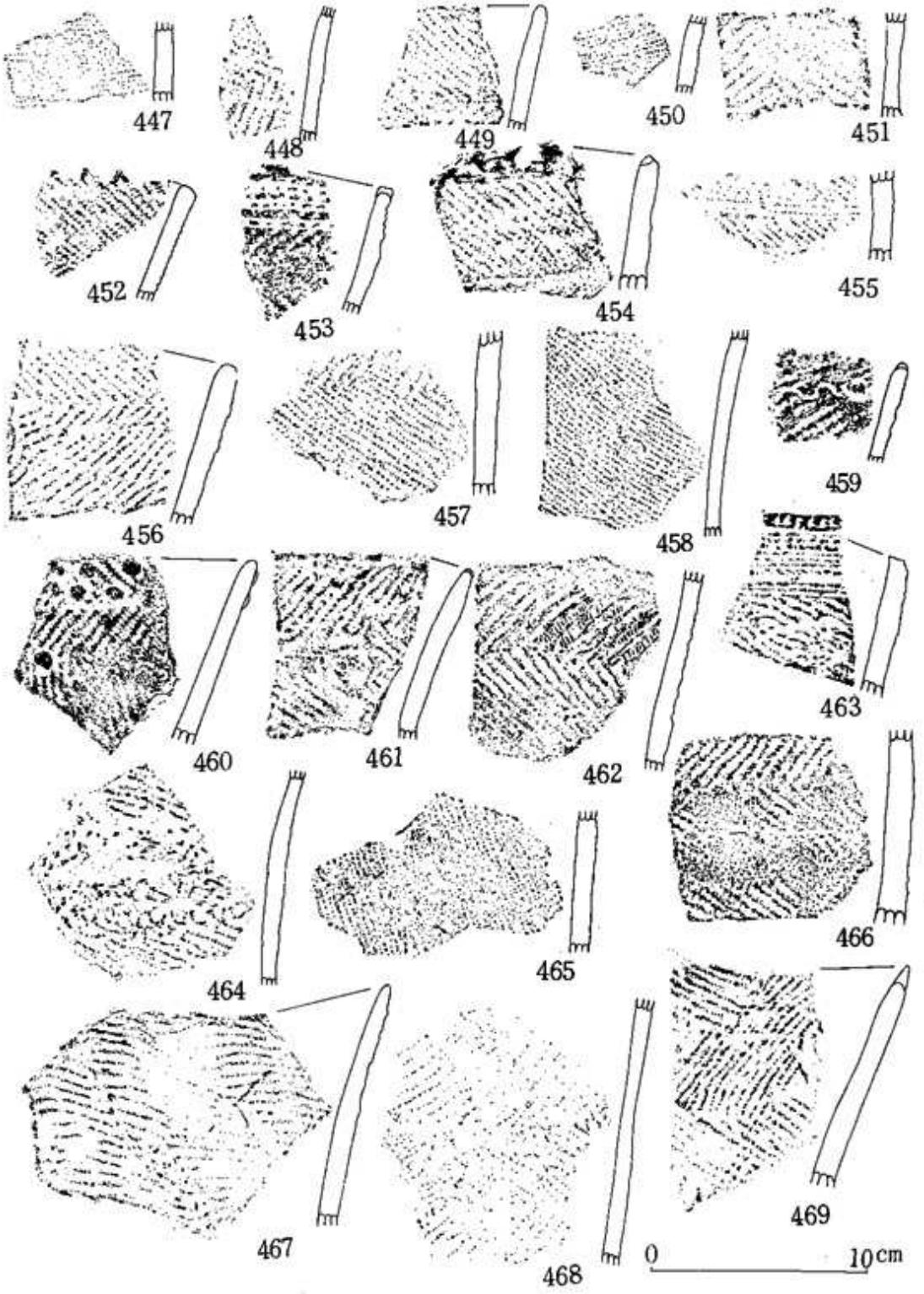


図47　土器拓影図（第2次調査）

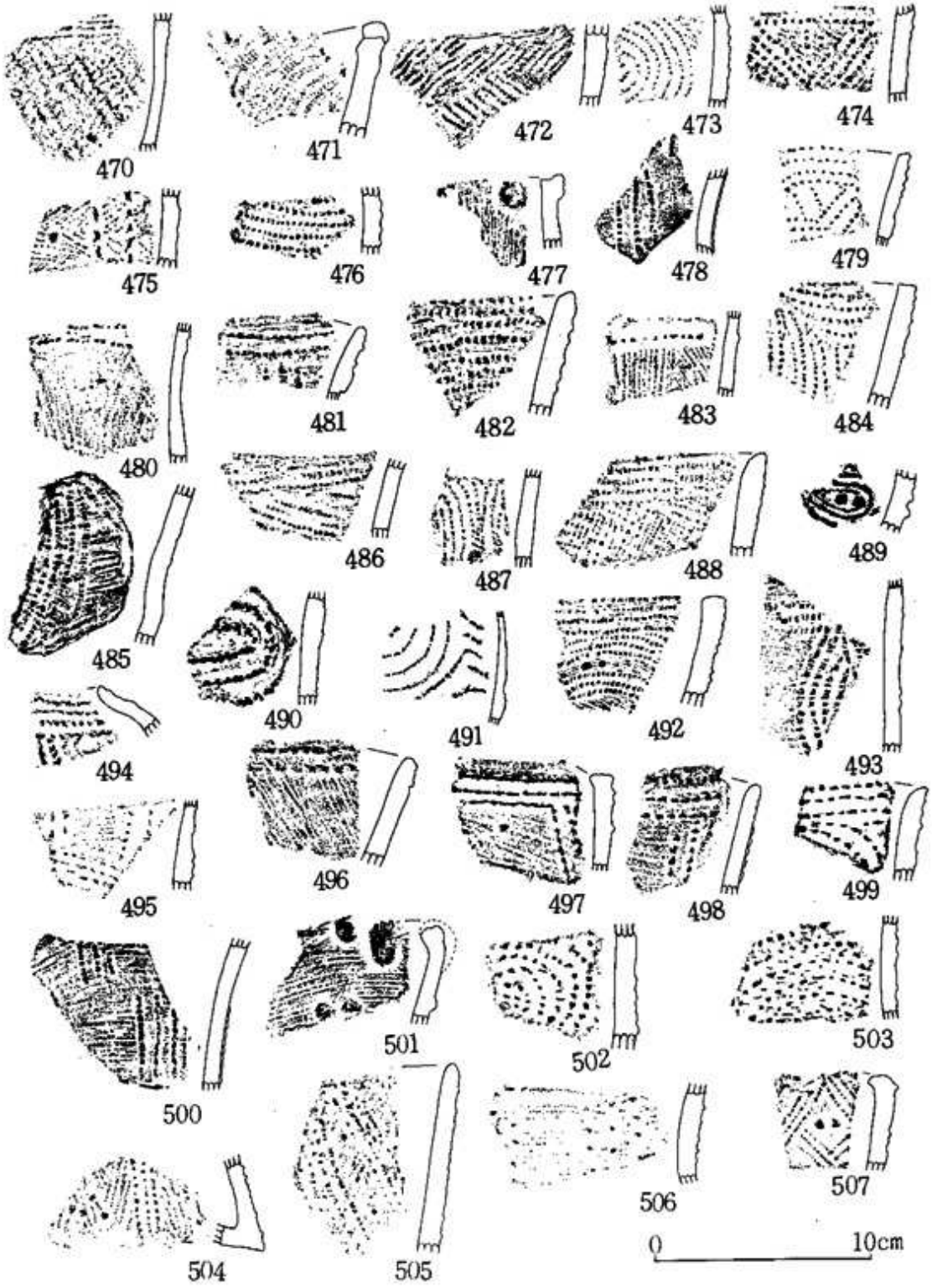


図48　土器拓影図（第2次調査）

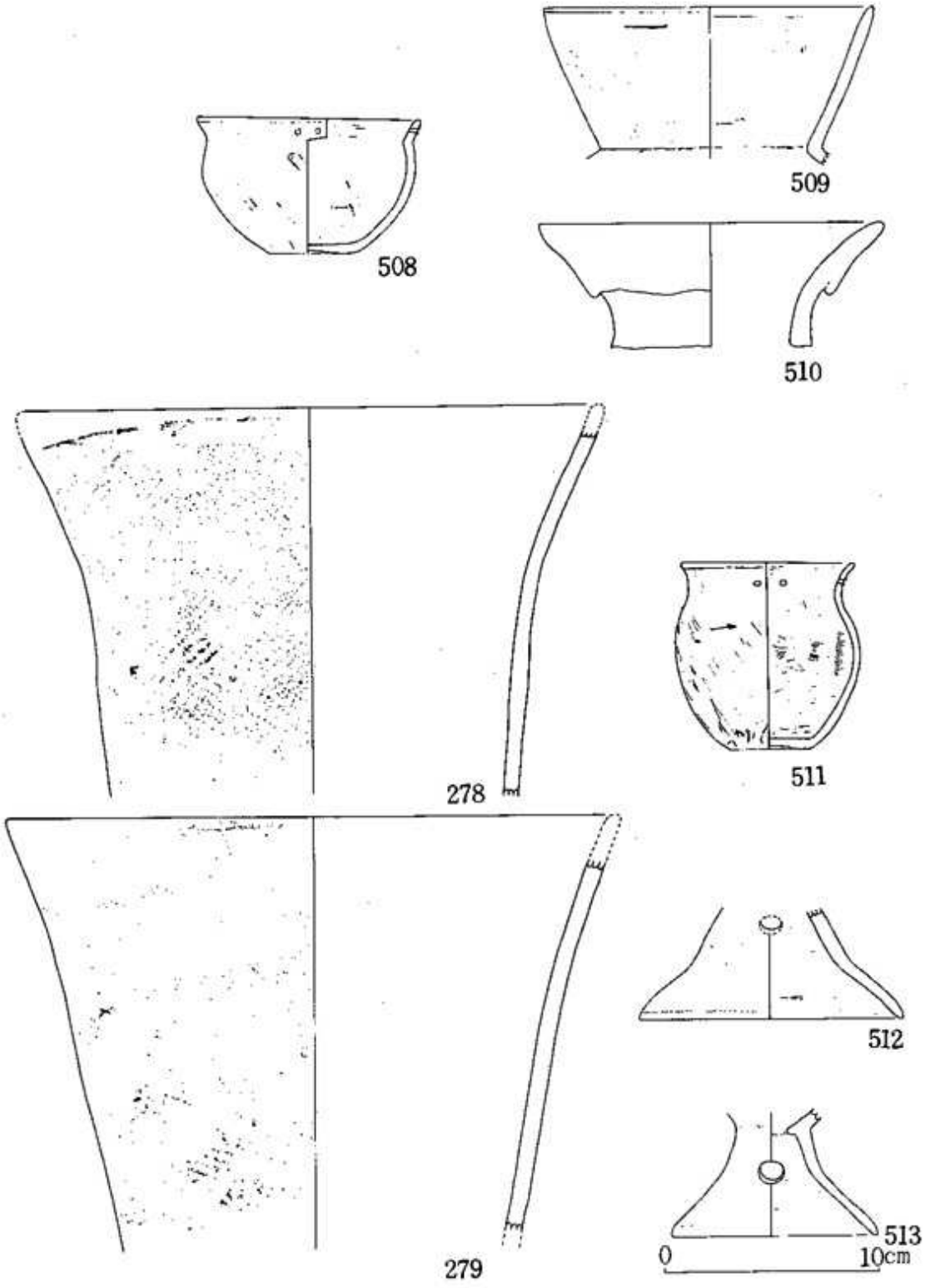


図49　土器実測・拓影図（第2次調査）

第１次調査

土　器　検　出　表

図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日
1	SB1No.8	90.01.12	68	G 25～26	89.12.09	134	SB2	90.01.23	201	表採	89.12.21
2	木葉状文　浅鉢		69	SB1 ト2	89.11.24	135	SB2	90.01.17	202	G 26～30	89.12.07
3	SB1 SK1	90.01.09	70	SB1 No.2	89.12.24	136	SB2 G 23	90.01.21	203	G 25～26	89.12.08
4	SB2SK3とSB1P6	90.01.18	71	SB1 SK1	90.01.09	137	SB2	90.01.23	204	中トG 19	89.12.18
5	縄文 SB2SK3	90.01.18	72	G 26～30	89.12.07	138	SB2	〃	205	SB2 南拡	90.01.23
6	4波状口縁浮線文	90.01.18	73	SB1 トNo.2	89.11.24	139	SB2 No.2	90.01.12	206	表採	〃
7	SB1No.24	89.12.27	74	SB1 SK2	〃	140	SB2	〃	207	G 25～26	89.12.10
8	SB1 No.33	90.01.05	75	SB1 トNo.2	89.11.24	141	SB2 P 21	90.01.18	208	表採	〃
9	〃 No.27	89.12.27	76	SB1 SK1	90.01.09	142	SB2 No.2床	90.01.12	209	G 24～25	〃
10	〃 No.35	90.01.05	77	SB1 床面	〃	143	SB2 G 19 間体	89.12.19	210	表採	89.12.05
11	〃 No.17	〃	78	SB1－SK3 No.3	90.01.18	144	G 25～26	89.12.08	211	〃	〃
12	〃 G16上	89.12.08	79	SB1 No.34	89.12.27	145	G 25～26	〃	212	〃	〃
13	〃 No.33	89.12.27	80	SB1 No.6	90.01.07	146	表採	89.12.05	213	〃	〃
14	〃 No.17	90.01.05	81	SB1	〃	147	G 26～30	89.12.07	214	〃	〃
15	〃 No.17	89.12.18	82	G 25～26	89.12.08	148	G 30～32	89.12.06	215	G 24～25	89.12.09
16	〃 No.1	90.01.05	83	SB1 No.30	89.12.10	149	G 26～30	89.12.07	216	G 25	89.12.08
17	〃 床	〃	84	SB2 SK2	90.01.12	150	G 25～26	89.12.08	217	G 25～26	89.12.08
18	〃 No.1	〃	85	SB2 No.6	90.01.12	151	G 25～26	89.12.08	218	G 25～25	89.12.08
19	〃 No.3	〃	86	SB2 SK1	90.01.20	152	G 25～26	89.12.08	219	SB2	90.01.09
20	〃 No.33	〃	87	SB2 No.23	90.01.12	153	G 25～26	89.12.08	220	G 25～26	89.12.08
21	G 25～26	89.12.08	88	SB2 SK2	90.01.08	154	G 25～26	89.12.08	221	G 25～26	89.12.08
22	SB1 G 15南	89.12.26	89	SB2	90.01.23	155	G 25～26	89.12.08	222	G 26～30	89.12.07
23	〃 No.1	90.01.05	90	SB2床No.6	90.01.12	156	G 25～26	89.12.07	223	G 19	89.12.18
24	〃 No.18	90.01.05	91	SB2床21	90.01.12	157	表採	〃	224	G 25～26	〃
25	〃 G 15南	89.12.26	92	SB2 SK6	90.01.18	158	G 25～26	89.12.08	225	中ト　グ117	〃
26	〃 No.17	90.01.05	93	〃	〃	159	G 26～30	89.12.09	226	G 25～26	〃
27	〃 No.17	90.01.05	94	SB2表採	90.01.09	160	表採	〃	227	G 25～26	89.12.08
28	〃 G No.16	89.12.26	95	SB2－9	90.01.18	161	G 25～26	89.12.07	228	G 25～26	〃
29	〃 No.3	90.01.05	96	SB2 No.2	90.01.12	162	表採	〃	229	中トG 19	89.12.18
30	〃 上層	89.12.26	97	SB2床6	90.01.12	163	G 26～30	89.12.07	230	G 25～26	89.12.08
31	〃 No.16	90.01.05	98	SB1 1～2	89.12.24	164	G 25～26	89.12.10	231	G 26～30	89.12.07
32	〃 No.34	〃	99	SB2床No.9	90.01.12	165	表採	〃	232	G 24～25	
33	〃 No.39	90.01.05	100	SB2 SK6	90.01.20	166	〃	〃	233	G 25～26	89.12.08
34	〃 トNo.2	89.11.24	101	SB2床No.6	90.01.12	167	G 27～30	89.12.10	234	表採	89.12.05
35	〃 No.22	90.01.05	102	SB2 SK6	90.01.20	168	G 26～30	89.12.07	235	G 26～30	89.12.07
36	〃 1～2	89.11.24	103	SB2床No.5	90.01.12	169	G 25～26	89.12.08	236	表採	89.12.21
37	〃 1～2	〃	104	SB2	90.01.20	170	G 29～30	89.12.10	237	G 24～25	89.12.09
38	〃 No.9	90.01.05	105	SB2 SK6	90.01.20	171	G 25～26	89.12.07	238	G 24～25	89.12.09
39	〃 No.7	90.01.05	106	SB2 No.17	90.01.20	172	G 26～30	89.12.07	239	THG 24～25	89.12.09
40	表採	89.12.04	107	SB2 SK1 No.8	90.01.20	173	〃	〃	240	G 25～26	89.12.07
41	SB1 No.24	89.12.27	108	SB2 P－17	90.01.15	174	G 27～30	89.12.10	241	SB2床No.3	90.12.02
42	〃 No.29	90.01.05	109	SB2床6	90.01.12	175	G 26～30	89.12.07	241	G 25～26	89.12.08
43	〃 No.55	89.12.27	110	SB2表採	90.01.09	176	G 27～30	89.12.10	242	G 25～26	89.12.08
44	〃 No.29	90.01.05	111	SB2	90.01.23	177	中トG 16	89.12.18	243	グ 25～26	89.12.10
45	〃 P 2	90.01.06	112	SB2床No.23	90.01.12	178	〃	〃	244	G 25～30	89.12.07
46	〃 No.33	90.01.05	113	SB2床No.6	90.01.12	179	G 22～23	89.12.19	245	表採	〃
47	〃 No.29	90.01.05	114	SB2表採	90.01.09	180	G 22～23	89.12.07	246	グ 24～25	89.12.09
48	〃 No.51	89.12.27	115	SB2 SK3		181	中トG 19	89.12.19	247	表採	89.12.04
49	〃 No.36	90.01.05	116	SB2床No.6	90.01.12	182	G 25～26	89.12.07	248	中ト　グ19	89.12.18
50	〃 No.36	90.01.05	117	SB2床No.6	90.01.12	183	G 26～30	89.12.07	249	中ト　グ17	89.12.18
51	〃 －33	90.01.05	118	SB2床No.6	90.01.12	184	〃	〃	250	表採	〃
52	〃 No.29	90.01.05	119	SB2床No.23	90.01.12	185	SB1 No.6	90.01.05	251	G 25～26	89.12.09
53	〃 No.51	89.12.27	120	SB2床3	90.01.12	186	G 25～26	89.12.08	252	G 30～32	89.12.06
54	〃 上	89.12.26	121	SB2表採	90.01.09	187	G 30～32	89.12.06	253	表採	89.12.04
55	〃 No.36	90.01.05	122	SB1 No.28	89.12.27	188	G 26～30	89.12.07	254	G 24～25	89.12.09
56	〃 No.22	90.01.05	123	中ト　G 17	89.12.18	189	G 26～30	89.12.01	255	G 24～25	89.12.09
57	〃 D 80 T 619	89.12.26	124	SB1 No.40	89.12.27	190	G 25～26	89.12.06	256	中トG 19	89.12.18
58	〃 No.3	90.01.05	125	SB2南7床面	90.01.23	191	SB1 No.36	90.01.05	257	表採	89.12.06
59	〃 No.9	89.12.26	126	SB2表採	90.01.09	192		〃	258	〃	〃
60	〃 No.27	89.12.07	127	SB2 No.23	90.01.12	193	G 27～30	89.12.10	259	〃	〃
61	〃 －3	90.01.05	128	SB2 314/315 間体	90.01.09	194	表採	89.12.04	260	〃	〃
62	〃 No.36	90.01.05	129	SB2－P 17	90.01.05	195	G 22～23	89.12.09	261	THグ No.25～26	89.12.07
63	表採		130	SB2 No.23	90.01.12	196	G 26～30	89.12.07	262	表採	
64	SB1 No.36	90.01.05	131	SB2 SK2	90.01.08	197	G 24～25	89.12.09			
65	〃 No.36	90.01.05	132	SB2・SB2間体	90.01.16 90.01.26	198	G 22～23	89.12.09			
66	〃 72～31	89.12.20	133	SB2	90.01.23	199	表採	〃			
67	〃 No.36	90.01.05	133	SB2	90.01.23	200	〃	89.12.04			

第２次調査

図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日	図版番号	出土位置	年月日
253	H 21 (G 8)	90. 11. 21	329	F 39 北壁	90. 12. 06	393	G 19 (G 19)	90. 12. 22	457	E 17 (E 15 下)	90. 12. 06
254	E 22 P 8 下 No. 40	90. 12. 04	330	F 17 SK 6	90. 12. 10	394	E 17 (E 18)	90. 12. 04	458	F 19 (E 2)	90. 12. 04
255	C 17・18 断面	90. 12. 24	331	E 17 (E 18)	90. 12. 04	395	G 19 (G 17)	90. 12. 06	459	H 21	90. 11. 24
256	H 20 No. 1	90. 12. 10				396	E 16 (E 16)	90. 12. 04	460	表採	90. 11. 24
257	G 20	90. 11. 29	332	G 19 (G 18)	90. 11. 29	397	G 19 (G 16)	90. 11. 29	461	E 17 (E 17)	90. 12. 04
258	G 20	90. 12. 21	333	E 37	90. 11. 24	398	〃 (G 19)	90. 12. 22	462	〃 (E 11 下)	90. 12. 06
259	H 20	90. 12. 10	334	H 21 No. 10	90. 11. 24	399	〃 G 21	90. 11. 24	463	E 18 (E 4)	90. 12. 06
270	G 21 下層 8	90. 12. 08	335	E 39 西10 − 2	90. 11. 24	400	表採	90. 12. 09	464	F 20	90. 11. 27
271	G 21 下層	90. 12. 08	336	G 19 G 20 − C	90. 11. 22	401	H 20 (H 20 − 2)	90. 12. 10	465	G 19 (G 18)	90. 11. 29
272	E 18 (E 9)	90. 12. 04	337	〃 F 20 − C	0. 11. 22	402	E 18 SK 下	90. 12. 10	466	E 17 (E 18)	90. 12. 04
273	G 21	90. 12. 06	338	E 38 − 4	90. 11. 24	403	E 17 (E 11)	90. 12. 04	467	〃 E 11	90. 12. 04
274	F 20	90. 11. 22	339	G 19 (G 18)	90. 12. 06				468	H 20 (H 20)	90. 12. 04
275	G 19 下層 10	90. 12. 04	340	E 37	90. 11. 24	404	F 20 No. 2	90. 11. 22	469	表採	90. 12. 12
276	H 21 No. 7	90. 12. 10	341	G 19 (G 下 38)	90. 12. 04	405	H 20 − 4	90. 12. 10			
277	E 37	90. 11. 24	342	〃 (G 20	90. 12. 22	406	G 19 (G 18)	90. 12. 08	470	H 20 (H 20 − 22)	90. 12. 11
278	H 20	90. 11. 10	343	〃 (G 20 C)	90. 11. 22	407	F 20	90. 11. 22	471	G 19 (G 20)	90. 11. 22
279	H 20	90. 12. 10	344	H 21 (G 8)	90. 11. 21	408	F 37 P 5	90. 11. 27	472	〃 (G 19)	90. 11. 27
280	H 20 No. 16	90. 12. 11	345	H 20 − 4	90. 12. 12	409	E 16 (E 19)	90. 11. 22	473	F 19	90. 11. 22
281	A 22 No. 2	90. 11. 18	346	G 19	90. 11. 24	410	表採		474	G 19 (G 17)	90. 12. 06
282	G 19 畦	90. 12. 06	347	H 20 − 18	90. 12. 11	411	F 19 (E 8)	90. 12. 04	475	F 20	90. 11. 22
283	F 20	90. 11. 22	348	G 20 畦	90. 12. 05	412	G 19 (G 18 No. 2)	90. 12. 06	476	G 19 (G 19 畦 No. 1)	90. 12. 06
284	A 22	90. 11. 16	349	F 17 (E 24)	90. 12. 04	413	〃 G 21 畦	90. 12. 05	477	F 27	90. 11. 27
285	G 20 畦	90. 12. 05	350	F 19 (E 2)	90. 12. 04	414	F 19	90. 11. 22	478	D 35 S P 11	90. 12. 05
286	E 37	90. 11. 24	351	G 19 (G 16 − 18 No. 2)	90. 11. 29	415	D 18 (E 23)	90. 12. 04	479	F 19	90. 11. 22
287	G 19 畦 No. 1	90. 12. 06	352	F 38	90. 12. 08	416	G 19 (G 19)	90. 12. 22	480	G 19 (G 22 畦)	90. 12. 05
288	F 37	90. 11. 29	353	G 20 畦	90. 12. 05	417	表採	90. 11. 22	481	〃 (G 17)	90. 12. 06
289	E 18 (E 6)	90. 12. 04	354	H 20 − 16	90. 12. 11	418	E 17 (E 18)	90. 12. 04	482	〃 (G 17)	90. 12. 06
290	F 17 (E 下 15)	90. 12. 06	345	E 20 − 22	90. 12. 11	419	E 16 SK 1	90. 12. 10	483	H 22	90. 11. 16
291	G 19 畦 No. 2	90. 12. 06	346	E 38	90. 11. 22	420	G 19 (G 18 No. 2)	90. 12. 06	484	F 17 (E 30)	90. 12. 04
292	F 38	90. 12. 08				421	H 21 (H 20 − 8)	90. 12. 10	485	D 34 P 8	90. 12. 03
293	G 19 (G 下 12)	90. 12. 04	357	表採	90. 11. 16	422	E 17 下 15	90. 12. 06	486	E 38	90. 11. 24
294	F 17 SK 6	90. 12. 10	358	E 37	90. 11. 24	423	E 38 P 16	90. 12. 05	487	E 38	90. 11. 24
295	G 19 畦 No. 2	90. 12. 05	359	F 17	90. 12. 10				488	E 37	90. 11. 24
296	H 20 ～ 22	90. 12. 11	360	G 19 畦 No. 2	90. 12. 06	424	F 21	90. 12. 22	489	F 17 SK 5	90. 12. 10
297	G 19 下層	90. 12. 04	361	E 37	90. 11. 24	425	G 19 (G 20)	90. 12. 22	490	E 17 (E 8)	90. 12. 04
298	H 20 ～ 18	90. 12. 11	362	〃	90. 11. 24	426	表採	90. 11. 24	491	G 19 SK 8 − 3	90. 12. 11
299	G 20 畦	90. 12. 05	363	〃	90. 11. 24	427	F 17 (E 14)	90. 12. 04	492	表採	90. 11. 24
300	G 21 南	90. 12. 04	364	E 18 SK 8	90. 12. 11	428	F 19 (E 2)	90. 12. 04	493	F 17 (E 30)	90. 12. 04
301	G 19 SK 3 ～ 3	90. 12. 11	365	F 17 SK 4	90. 12. 10	429	G 19 (G 20)	90. 11. 12	494	G 18 (G 15)	90. 11. 25
302	〃 (G 下 10)	90. 12. 04	366	表採	90. 11. 24	430	E 18 (E 8)	90. 12. 04	495	E 17 (E 11)	90. 12. 04
303	〃 (G 下 10)	90. 12. 04	367	F 17 SK 6	90. 12. 10	431	A 20 ～ 22 壁	90. 11. 24	496	G 19 (G 17)	90. 12. 06
304	〃 (G 下 10)	90. 12. 11	368	F 18 (E 9)	90. 12. 04	432	H 21 (H 20 − 13)	90. 12. 11	497	E 17 (E 12)	90. 12. 04
305	F 17 (E 14)	90. 12. 04	369	H 20 (H 20 − 22)	90. 12. 11	433	G 19 (G 20)	90. 12. 22	498	D 35 SP 11	90. 12. 05
306	G 19 SK 3 底	90. 12. 11	370	E 17 (E 11)	90. 12. 04	434	G 19 (G 21 − 4)	90. 12. 06	499	E 17 SK 下	90. 12. 10
307	〃 畦 No. 2	90. 12. 06	371	H 18 (G 下 27)	90. 11. 29	435	A 20 ～ 22 壁	90. 11. 24	500	E 22 P 11	90. 12. 05
308	〃 (G 下 12)	90. 12. 04	372	H 20 − 2	90. 12. 11	436	G 19 (G 14)	90. 11. 27	501	F 35	90. 12. 07
309	E 18 G SK 8	90. 12. 11	373	H 20 − 5	90. 12. 10	437	〃 (G 14)	90. 12. 22	502	表採	90. 11. 20
310	G 19 (G 17)	90. 11. 29	374	F 18 E 6	90. 12. 04	438	F 18 (E 9)	90. 12. 04	503	F 20	90. 11. 22
	〃	〃	375	表採	90. 12. 07	439	E 17 (E 11 − 下)	90. 12. 06	504	G 19 (G 20)	90. 11. 22
311	G 37 S 畦	90. 11. 16	376	G 18 (G 24)	90. 11. 24	440	H 21 (G 8)	90. 11. 21	505	E 38 SP 16	90. 12. 05
312	G 19 畦 No. 1	90. 12. 06				441	D 34 P 18	90. 11. 23	506	〃	90. 11. 24
313	F 20	90. 12. 11	377	表採	90. 12. 07	442	E 16 (E 19)	90. 11. 22	507	F 19 − D	90. 11. 22
314	表採	〃	378	H 22 (G 2 畦)	90. 12. 05	443	G 19 (G 15)	90. 11. 25			
315	G 19 (G 8 下)	90. 12. 04	379	H 20 − 15	90. 12. 11	444	表採	90. 11. 21	508	G 18	90. 12. 10
316	表採	90. 11. 16	380	H 22 (G 2 南)	90. 12. 04	445	F 20	90. 11. 22	509	G 16	90. 12. 10
317	〃	90. 12. 07	381	E 17 (E 8)	90. 12. 04	446	F 19	90. 10. 21	510	F 18 (E 9)	90. 12. 04
318	G 19・G 下 11	90. 12. 04	382	H 21 (H 20 − 12)	90. 12. 10				511	G 17	90. 12. 10
319	表採	90. 11. 24	383	F 20	90. 11. 22	447	E 39 10 − 2	90. 11. 24	512	G 19 (G 17)	90. 12. 06
320	〃	〃	384	F 18 (E 6)	90. 12. 04	448	H 20 − 15	90. 12. 11	513	F 19	90. 11. 22
321	E 18 (E 4)	90. 12. 04	385	E 17 (E 13)	90. 12. 04	449	G 19 (G 20)	90. 12. 22			
322	D 18 (E 24)	90. 12. 04	386	〃 (E 11)	90. 12. 04	450	表採				
323	G 19 (GF)	90. 12. 09	387	E 38 7 − 8	90. 11. 24	451	G 19 (G 20)	90. 12. 22			
324	E 18 SK 8 一底	90. 12. 11	388	G 19 (G 20)	90. 12. 22	452	〃 (G 19) 畦 No. 2	90. 12. 06			
325	G 20 畦	90. 12. 06	389	F 35	90. 11. 27	453	〃 (G 19)	90. 12. 21			
326	〃	90. 12. 05	390	G 19 (G 20 畦)	90. 12. 06	454	〃 (G 20)	90. 12. 22			
327	F 19 (F 21)	90. 12. 11	391	D 18 (E 23)	90. 12. 04	455	〃 G 21 南	90. 12. 04			
328	E 17	90. 12. 04	392	F 27	90. 11. 21	456	H 21 (G 4)	90. 11. 27			

第Ⅴ章　立ヶ花遺跡の石製品について

第1節　概　要

今回の調査によって出土した石製品は、資料化できた遺物で、第1次44点（第50～54図）第2次60点（第55～60図）であった。器種の内訳は、石皿・凹石・石錐・尖頭器・石匙・石鏃・磨・打石斧・管玉・敲石・研磨石・磨石・削器・玦状耳飾・用途不明石器と多種にわたっている。時代については、すべて縄文時代前期に比定される遺物である。

各石製品の観察結果は、下表のとおりである。

石製品観察表

No.		器　種	石　質	備　　考
1	B31	石　皿	安山岩	方形の石を加工、完形
2	D26	〃	〃	1／4～1／3で欠損　底部　底状
3	表採	凹　石	〃	小形の平べいの石に比較的深い凹穴を底面に彫っている
4	D30	〃	〃	表裏2個ずつの凹を彫っている
5	F26	〃	〃	〃
6	B31	石　錘	〃	平べいの石の両面より剥離
7	D27	尖頭器	〃	小葉形、表面に比べ裏面の剥離は粗雑である
8	表採	石　匙	〃	横形、基部が中央、刃部片面、中形
9	〃	〃	〃	〃、　〃　、　〃　、〃
10	F26	〃	〃	〃、　〃　、　〃　、小形
11	表採	〃	〃	〃、　〃　、　〃　、中形
12	F29	〃	〃	〃、　〃　、　〃　、小形
13	F30	〃	〃	〃、基部が片方による、刃部両面、中形
14	表採	〃	〃	縦形、基部が中央、　〃　、〃
15	F26	〃	〃	横形、基部が片方による、　〃　、〃
16	F25	〃	〃	〃、基部が中央、刃部片面、小形
17	E29	石　錐	〃	つまみ有、錐部、細いが短い
18	表採	〃	〃	剥片の両面を剥離して錐部を作り出す
19	表採	〃	硅　石	錐部太い、明確なつまみと錐部の区別なし
20	D27	〃	安山岩	〃　、細いが短い
21	表採	〃	黒曜石	つまみなし、断面三角形を呈す
22	〃	〃	〃	かすかなつまみと錐部の区別を有す

No.		器　種	石　質	備　　考
23	D29	石　鏃	安山岩	凹基無茎鏃、側縁が直線の細身の鏃
24	表採	〃	〃	〃　、自然面を残す
25	E25	〃	〃	〃
26	E25	〃	〃	〃　凹基部の作り出しが深い
27	E25	〃	〃	円基鏃、自然面を残す
28	D27	〃	〃	〃　大形
29	D30	〃	〃	凹基無茎鏃、大形であるが、細身の鏃
30	表採	〃	〃	〃　凹基部は明確ではない
31	B31	〃	〃	平基無茎鏃、薄身の鏃
32	D27	〃	〃	円基鏃
33	D27	〃	〃	凹基無茎鏃、側縁に若干の段を有す、尖頭部は鋭くない
34	F26	〃	〃	葵形鏃、一部欠損
35	D27	〃	〃	凹基無茎鏃、尖端部欠損
36	表採	〃	黒曜石	〃　、小形鏃
37	C30	〃	硅　石	〃　、尖端部欠損
38	D27	〃	安山岩	〃　、凹基部不明確、自然面を残す
39	D27	〃	〃	平基無茎鏃、二次的調整剥離無し
40	F25	〃	硅　石	〃　未成品
41	B31	〃	安山岩	〃　〃
42	D27	〃	〃	凹基無茎鏃、尖頭部欠損
43	F26	磨石斧	蛇文岩	刃部欠損
44	表採	管　玉	滑　石	孔心は中心からずれる、両面より穿孔
45	E37	凹　石	砂　岩	平べいの石に片面のみに穿孔、風化が進んでいる
46	E37	〃	安山岩	片面2、片面3の穿孔
47	D34	〃	〃	片面に1つ穿孔
48	H22	〃	〃	片面2、片面1の穿孔、風化が進んでいる
49	E37	〃	〃	〃 1、〃 1の 〃 、　〃
50	E33	〃	〃	〃 1、〃 1の 〃 、　〃
51	F17	〃	〃	〃 に1つ穿孔、火をうけた痕跡あり
52	G21	〃	〃	〃 1、片面1の穿孔、自然石に穿孔
53	F17	〃	〃	〃に一つ穿孔、風化が進んでいる
54	E38	〃	〃	6つの面すべてに一つの凹を穿孔、　〃　、孔深い

No.		器　種	石　質	備　　考
55	F17	凹　石	安山岩	片面1、片面1の穿孔、風化が進んでいる、孔大きく深い
56	E38	石　錐	〃	自然石の両縁に両面から切り目を剥離、(長軸)火を受ける
57	E19	敲　石	〃	自然石使用、表面に剥離痕が散在
58	E38	研磨石	〃	上部と中央部に溝状の凹あり、1／2欠損
59	E16	石　皿	〃	1／2欠損、縁のない面有り、凹深い、風化が進んでいる
60	E17	磨　石	花　岩	一部欠損、側面に平坦面を作り出している
61	F38	打石斧	安山岩	刃部の調整剥離なし、裏面に石核からの剥離痕(ポジ)を残す短冊形
62	H21	〃	〃	刃部の摩滅が著しい、自然面を残す、撥形
63	F42	〃	〃	〃 及び表面の摩滅が著しい、短冊形
64	G19	〃	〃	未成品、小形の撥形
65	E33	尖頭器	〃	〃　自然面を残す、小葉形
66	H21	〃	〃	〃　細かな調整に至っていない、小葉形
67	F17	〃	〃	〃　〃　の途中　〃
68	F38	〃	〃	〃　〃　〃
69	H20	〃	〃	〃　〃　〃
70	H20	削　器	〃	刃部は先端から側面に伸びている
71	E33	〃	〃	不整形な剥片より刃部の作り出し、一部欠損
72	G19	〃	〃	〃　〃
73	G19	〃	〃	〃
74	G19	〃	〃	〃
75	G19	〃	〃	〃　石匙に近い形態
76	G19	石　匙	〃	横形、未成品、刃部片面
77	E36		滑　石	1／2欠損、両面から環部を穿穴、両面平べい
78	G19	磨石斧	粘板岩	基部欠損 自然小石の刃部のみを研磨
79	F17	〃	蛇文岩	刃部4／5のみ残存、側面に明確な綾線あり
80	D34	石　鏃	安山岩	菱形鏃、刃部先端欠損、調整剥離粗雑
81	E18	石　錐	〃	つまみ有、錐部先端欠損
82	F41	〃	〃	不整形の剥片より刃部の作り出し
83	D18	〃	〃	〃
84	表採	石　鏃	黒曜石	凹基無茎鏃、両脚部欠損、小形
85	F17	〃	安山岩	〃
86	F39	〃	黒曜石	〃　、両脚部欠損、細身、側縁の直線

No.		器　種	石　質	備　　考
87	D18	石　鏃	黒曜石	凹基無茎鏃
88	F41	〃	頁　岩	〃　　若干脚が内向する
89	D18	〃	〃	〃　　凹基部は明確ではない、粗製品
90	E39	〃	黒曜石	平基無茎鏃、粗製品
91	E17	〃	安山岩	〃　　一部欠損、摩滅が著しい
92	表採	〃	〃	凹基無茎鏃、凹基部の作り出し深い、一部欠損
93	D35	〃	頁　岩	〃　　、不整形の剥片のままほとんど調整ない
94	E18	〃	安山岩	〃　　、大形、1／2程度欠損、薄い
95	C19	〃	〃	〃　　、凹基部明確でない、粗製品、大形
96	E17	〃	〃	凹基無茎鏃、凹基部明確ではない
97	D37	不　明	黒曜石	石錐か削器の可能性あり
98	G18	石　匙	安山岩	一部欠損、基部のくびれ浅い
99	G19	〃	頁　岩	〃　　、小形、刃部片面
100	F17	〃	安山岩	刃部片面
101	F38	〃	〃	未製品
102	E34	〃	〃	基部のくびれなく長い
103	F17	〃	〃	基部のくびれほとんどない
104	G19	〃	〃	刃部片面

第２節　考　察

出土石製品の中で比較的数量の多かった凹石・石匙・石錐・石鏃について若干の考察を加える。

凹　石（第50図3・4・5、第55図45～54、第56図55）

凹石は、第1次3点、第2次11点の計14点が出土している。形状は、長軸径10cm前後、短軸径7cm前後の拳大程度の大きさの楕円形が大半を占めている。凹の大小・深さは区々ではあるが、数的には、片面1穴（Ⅰ）、両面に各1穴（Ⅱ）、片面2穴と片面に1穴（Ⅲ）、両面に各2穴（Ⅳ）、片面3穴と片面に2穴（Ⅴ）、6ヵ所の側面すべてに各1穴（Ⅵ）という6種類に分類できる。中でも（Ⅰ）（Ⅱ）については各4点と1番出土量が多く、当遺跡では標準的形状と推される。また（Ⅴ）は、出土量１点と極めて少数ではあるが特異であり、一般的に考えられている発火具・石器製作具・堅果類の割具等の以外の非実用的用途をも推される。

石　匙（皮はぎ）（第51図8～16、第58図76、第60図98～104）

石匙は、第1次9点、第2次8点の計17点が出土している。形状は、横形（Ⅰ）が16点とほと

んどで、縦形（Ⅱ）は1点のみである。横形の内、刃部巾が6cm程度のものが一番多く、当遺跡の標準的形状と推される。横形と細部の形状より分類すると、まず基部の位置では、刃部中央に位置するもの（Ⅰ－1）が10点、サイドにずれるもの（Ⅰ－Ⅱ）が7点とやや前者が後者を上回る数を示している。中でも、刃部巾が3cm程度の小形の石匙は、4点すべて前者に含まれる事実は、基部の位置がその用途に対して何らか制約をされるのか興味深い点である。また刃部の形状から分類すると、刃部が外彎するもの（Ⅰ－A）が11点、直線のもの（Ⅰ－B）5点と前者と後者では、倍以上の差が生ずる。研究者の中では、刃部の差異は、使用過程から発生するとの考える例もあるが、今回の調査による出土例では、明確な意図的な調整剥離痕が観察できるため、必ずしも先述した理由のみによる刃部の差異とは考えられない点がある。その解明には、使用痕等のより詳細な研究が必要であると考える。

縦形は、今回1点のみの出土であったが、剥片等の中にもそれの未成品と思われる資料も特に検出されることもなく、当遺跡では、縦形石匙の終末期に近い様相を示すものと思われる。

石　錐（第52図17～22、第59図81～83）

石錐は、第1次6点、第2次3点の計9点が出土している。形状は、つまみ部と錐部が区別できるもの（Ⅰ）が5点、棒状の錐部のみのもの（Ⅱ）が1点、不整形の剥片に錐部を作り出したもの（Ⅲ）が3点と大きく3種類に分類される。錐部の長さは、1cm程度の短いものがほとんどで、断面の形状も、方形、菱形、三角形の3種類に大別される。

石　鏃（第52図23～26、第53図27～36、第54図37～42、第59図80、84～96）

石鏃は、第1次20点、第2次14点の計34点が出土している。形状は、凹基無茎鏃（Ⅰ）が23点、平基無茎鏃（Ⅱ）が6点、円基鏃（Ⅲ）が3点、菱形鏃（Ⅳ）が2点の4種類に大別され、明確な茎を有する有茎鏃は1点の出土もなく、石鏃形態の時代的推移と地域性を顕著に示すものと思われる。大きさでは、長軸が2cm程度のものがほとんどで、外に、4cmを越える大形のものが3点、1cm程度の小形のものが3点含まれる。他に、凹基の深さ、側縁の形状、脚部の形状等の差異により若干の分類が可能である。

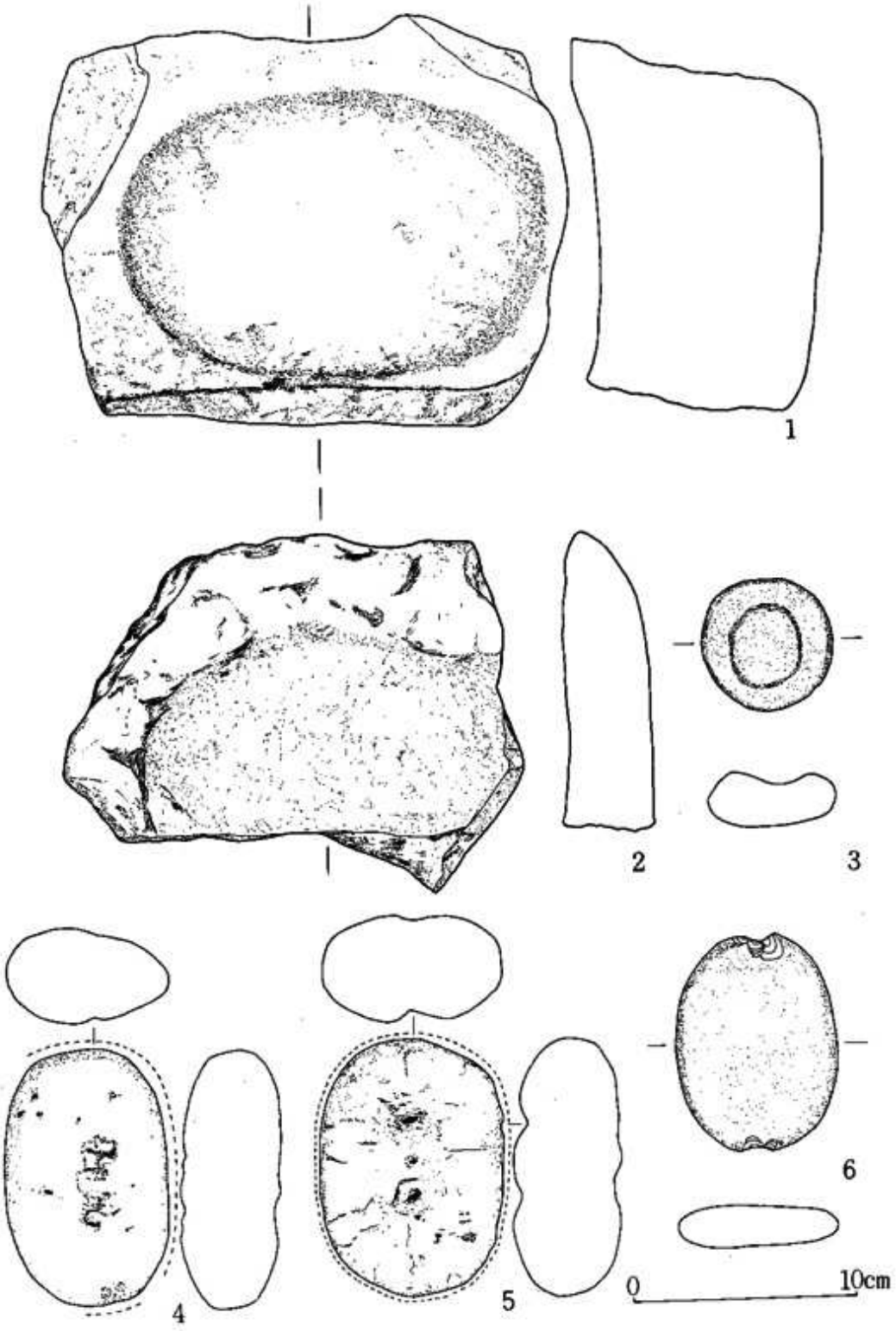


図50　石器実測図（第1次調査）

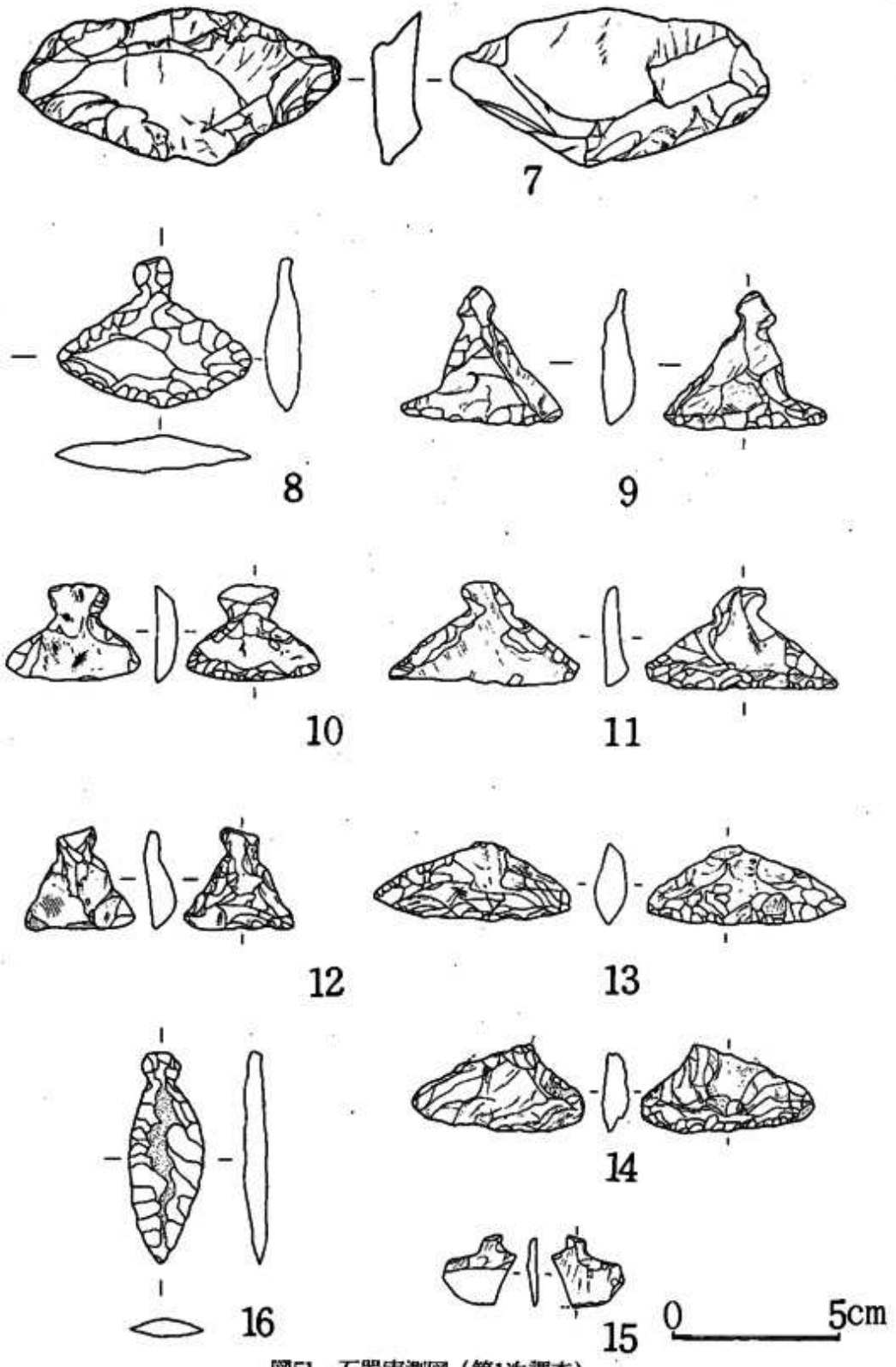


図51　石器実測図（第1次調査）

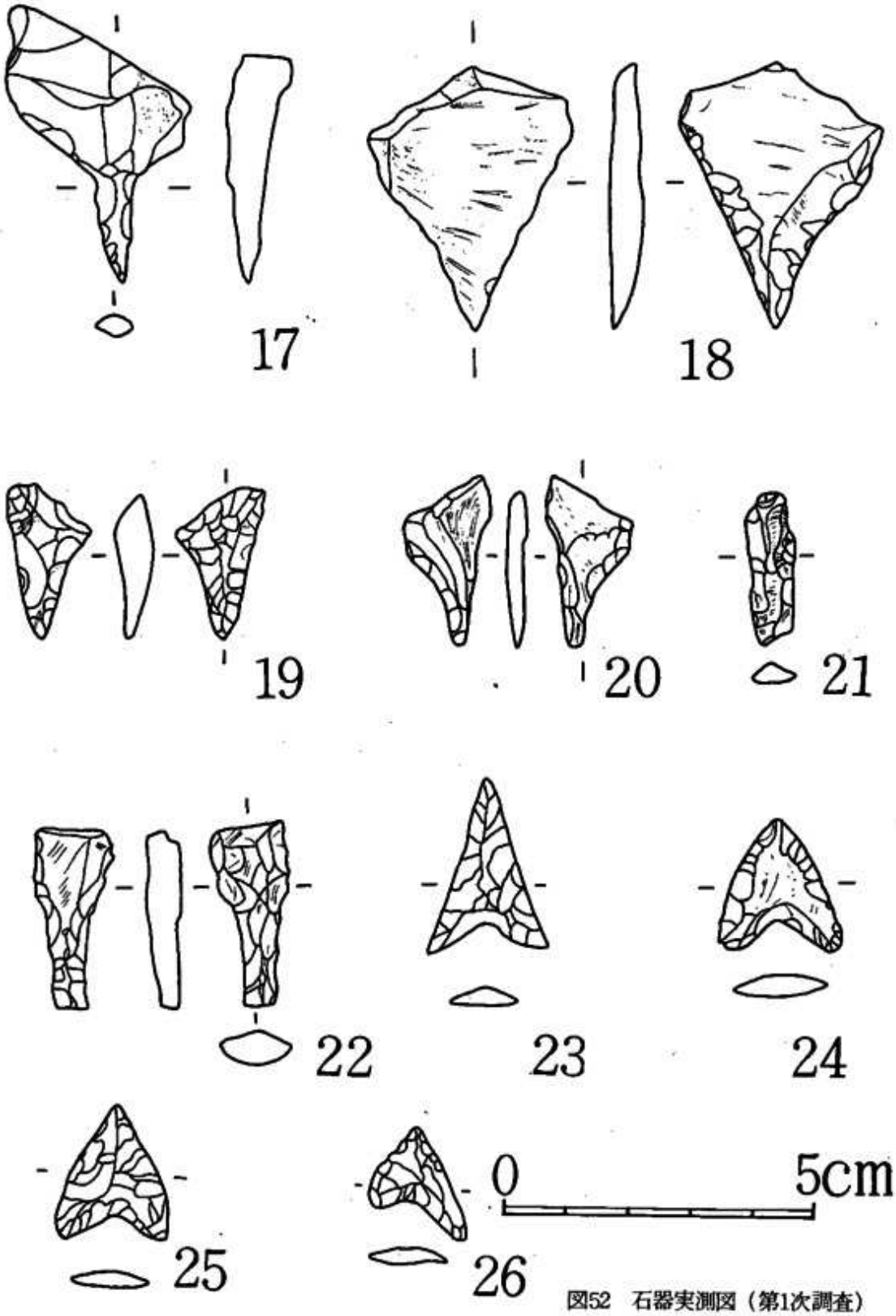


図52　石器実測図（第1次調査）

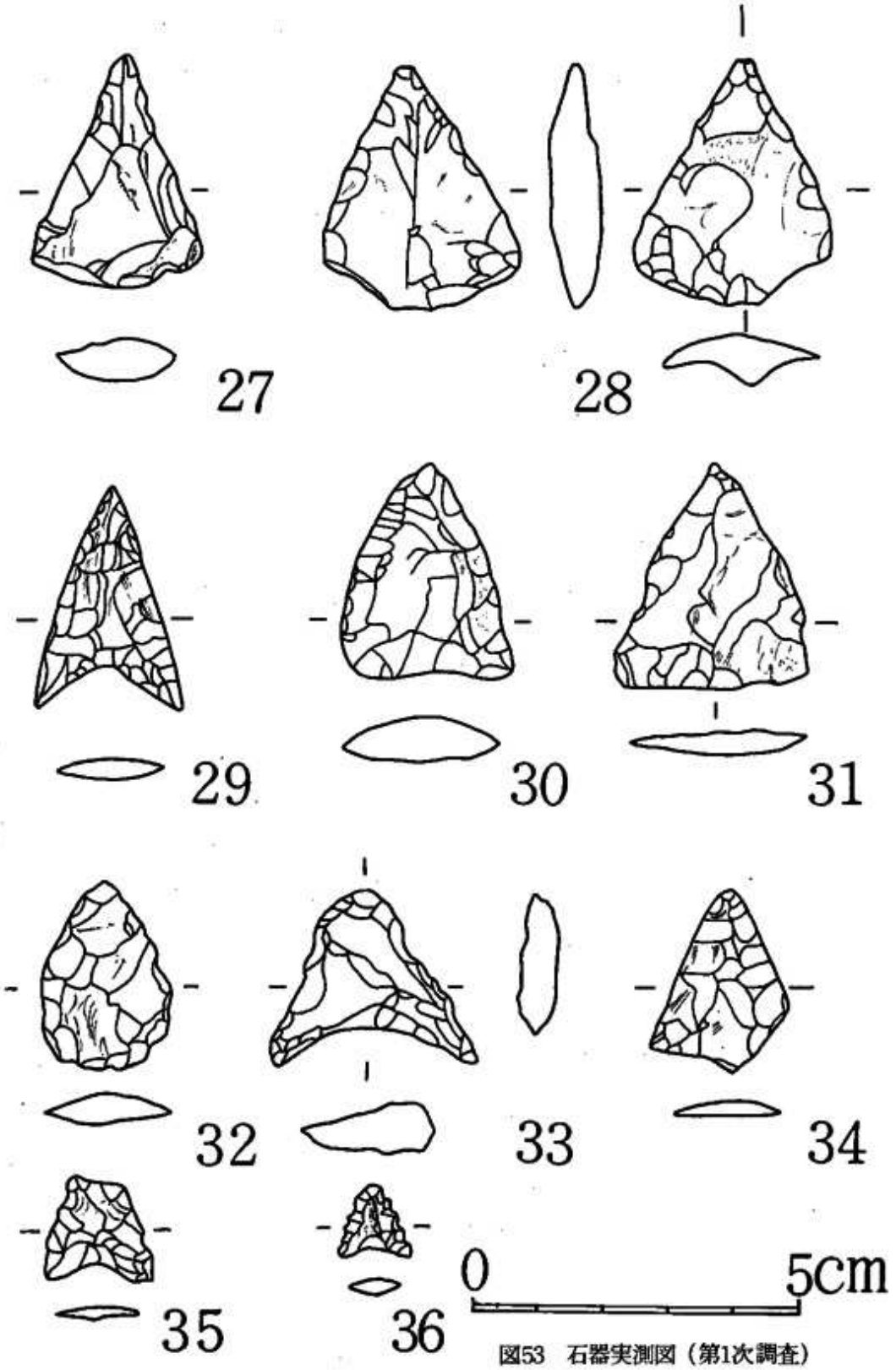


図53　石器実測図（第1次調査）

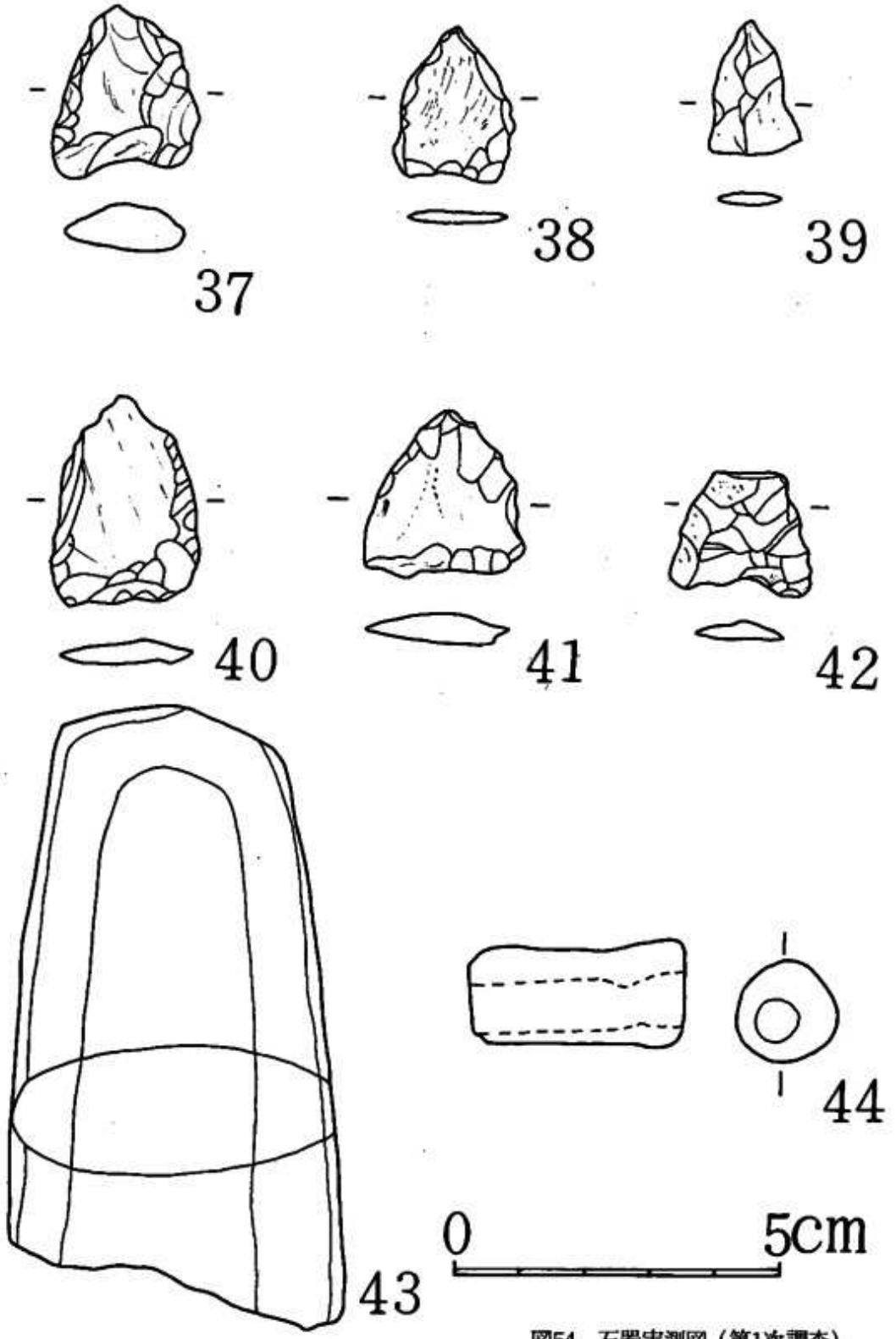


図54　石器実測図（第1次調査）

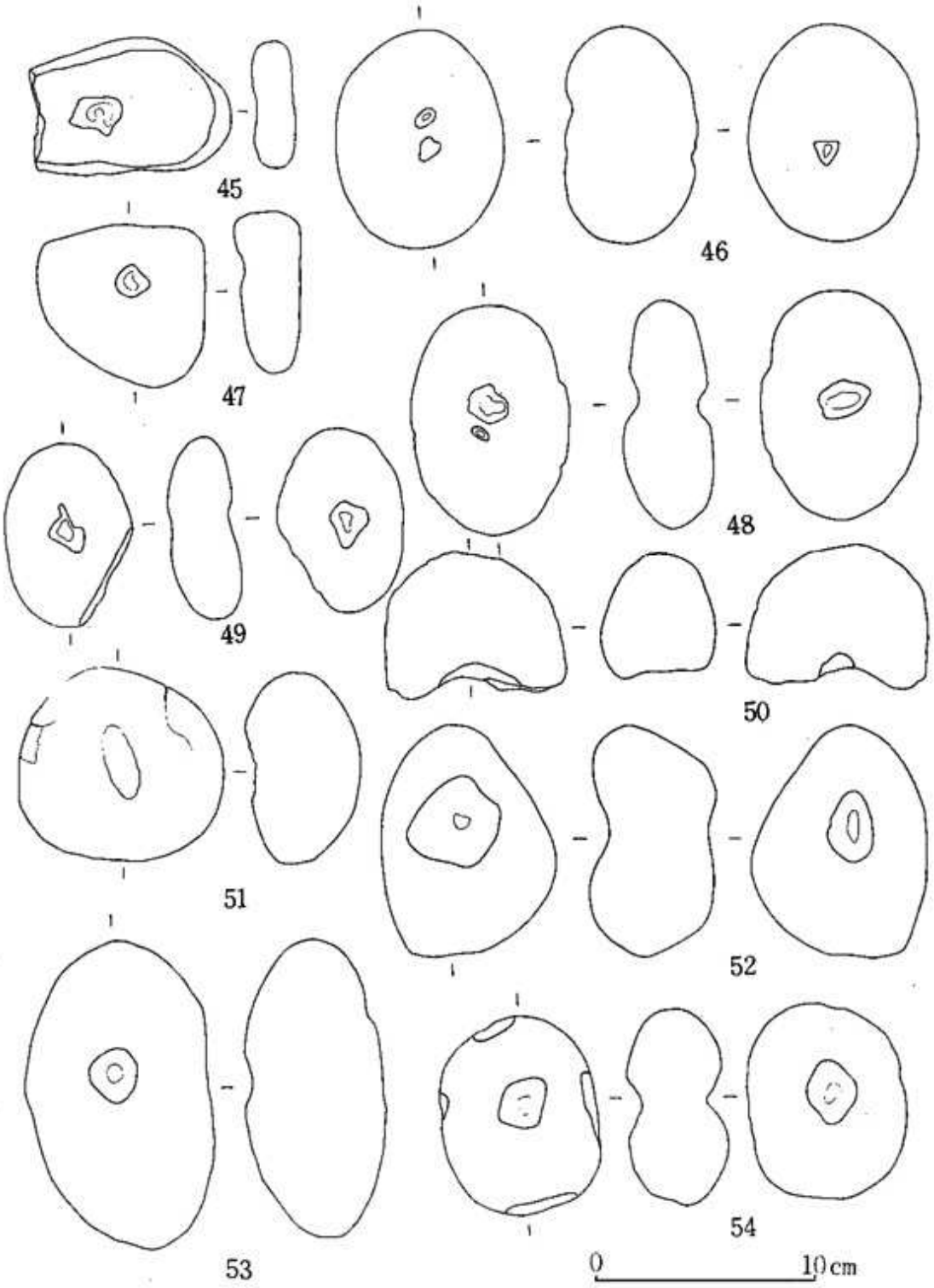


図55　石器実測図（第2次調査）

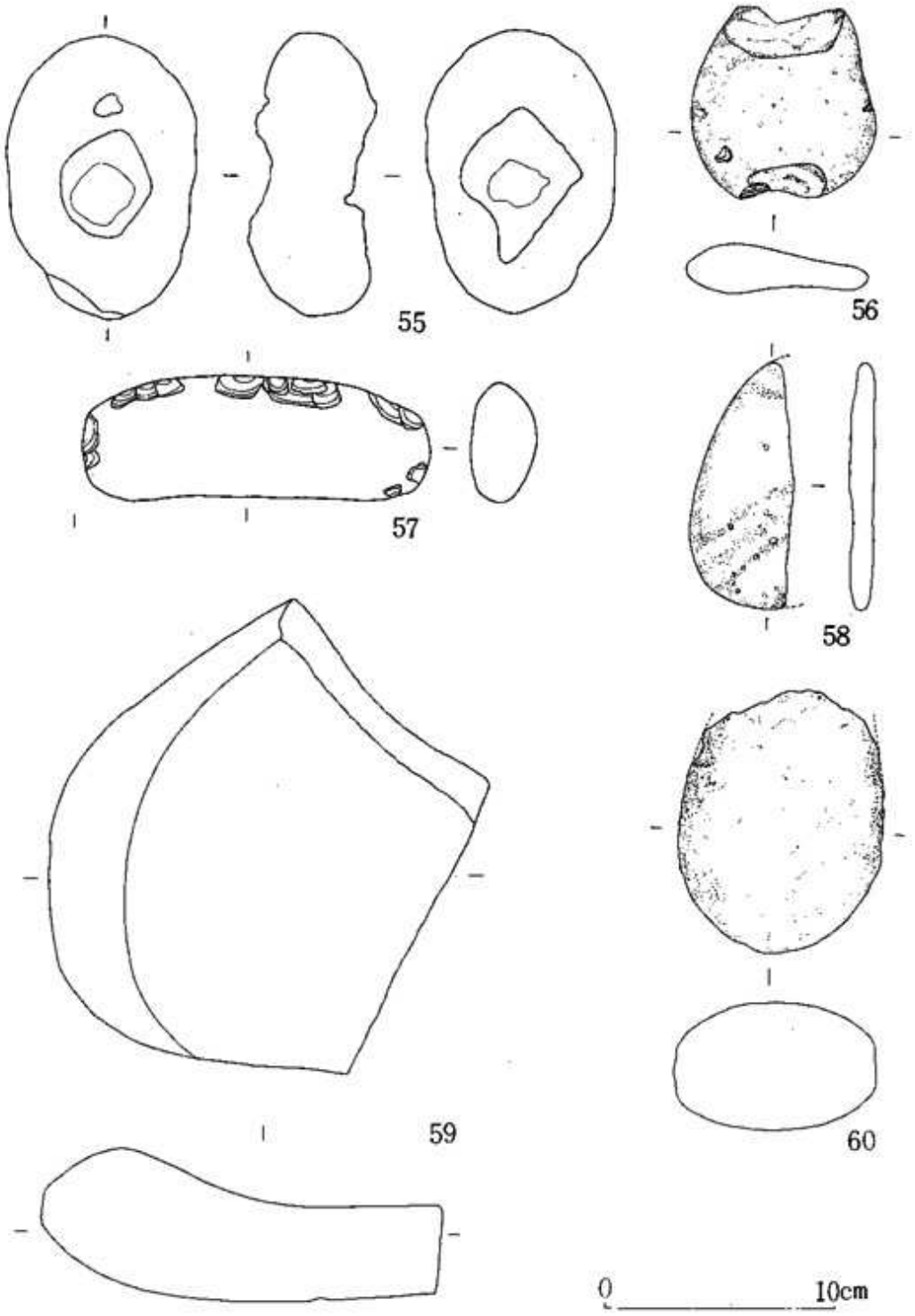


図56　石器実測図（第2次調査）

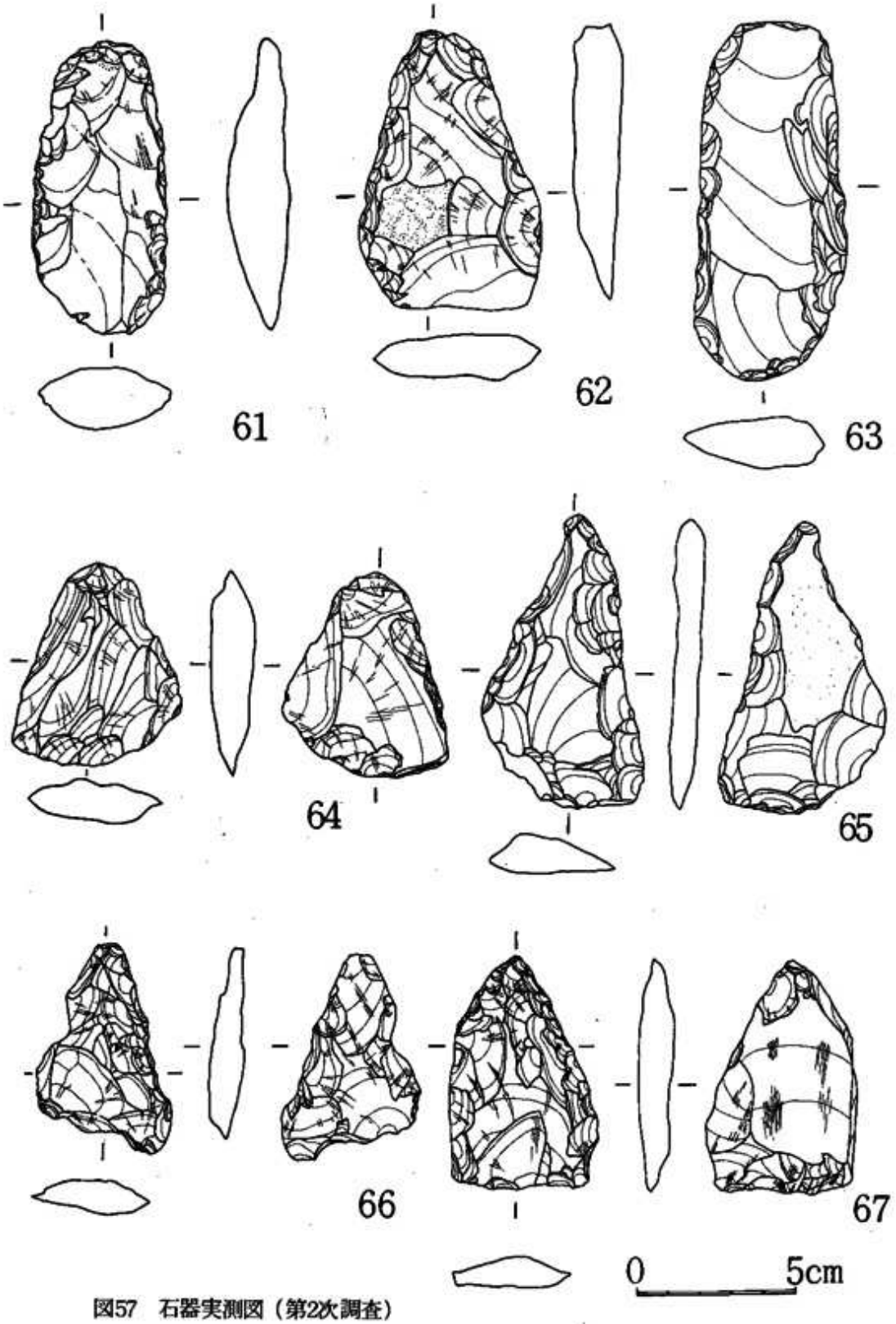


図57　石器実測図（第2次調査）

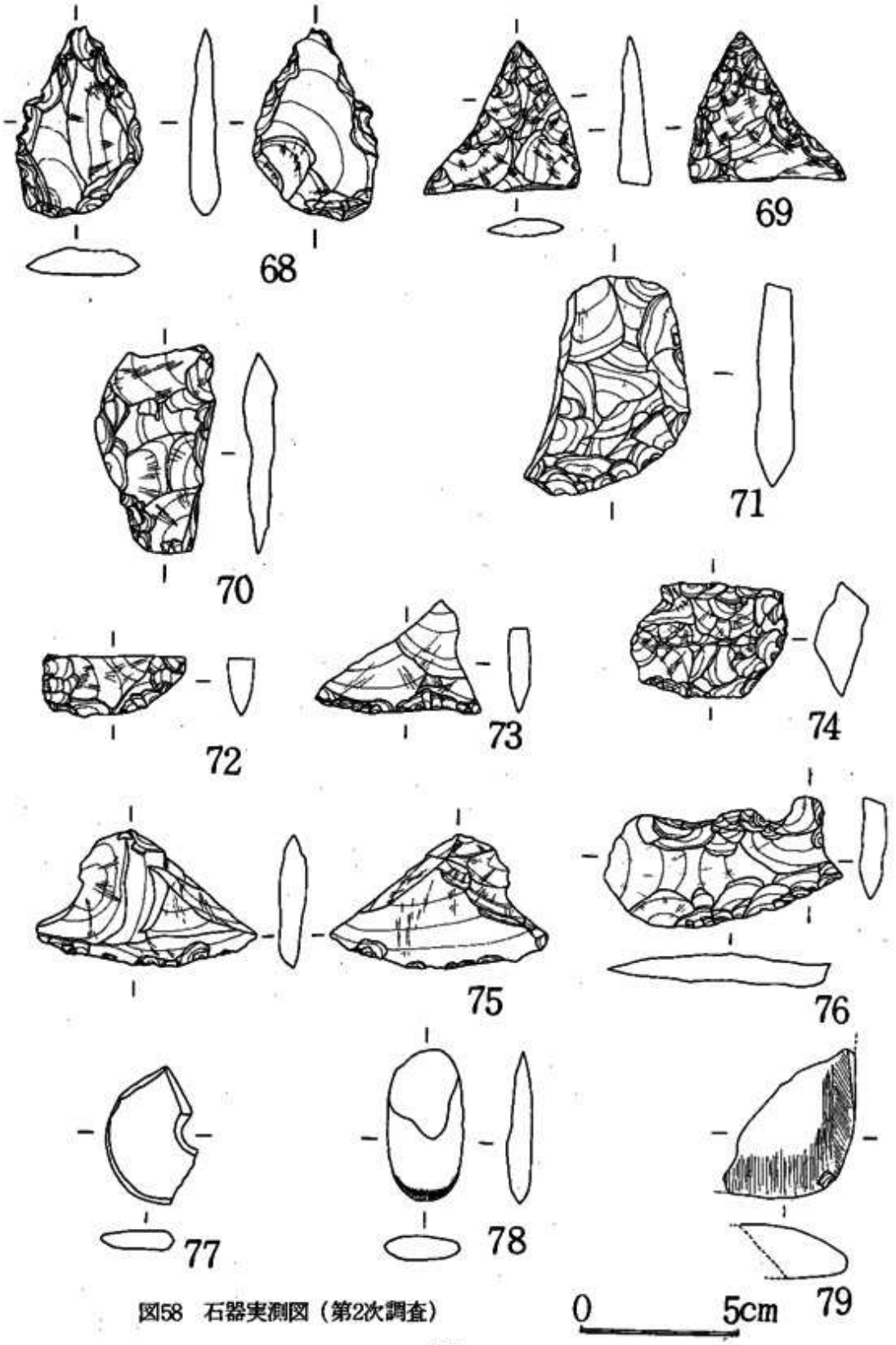


図58　石器実測図（第2次調査）

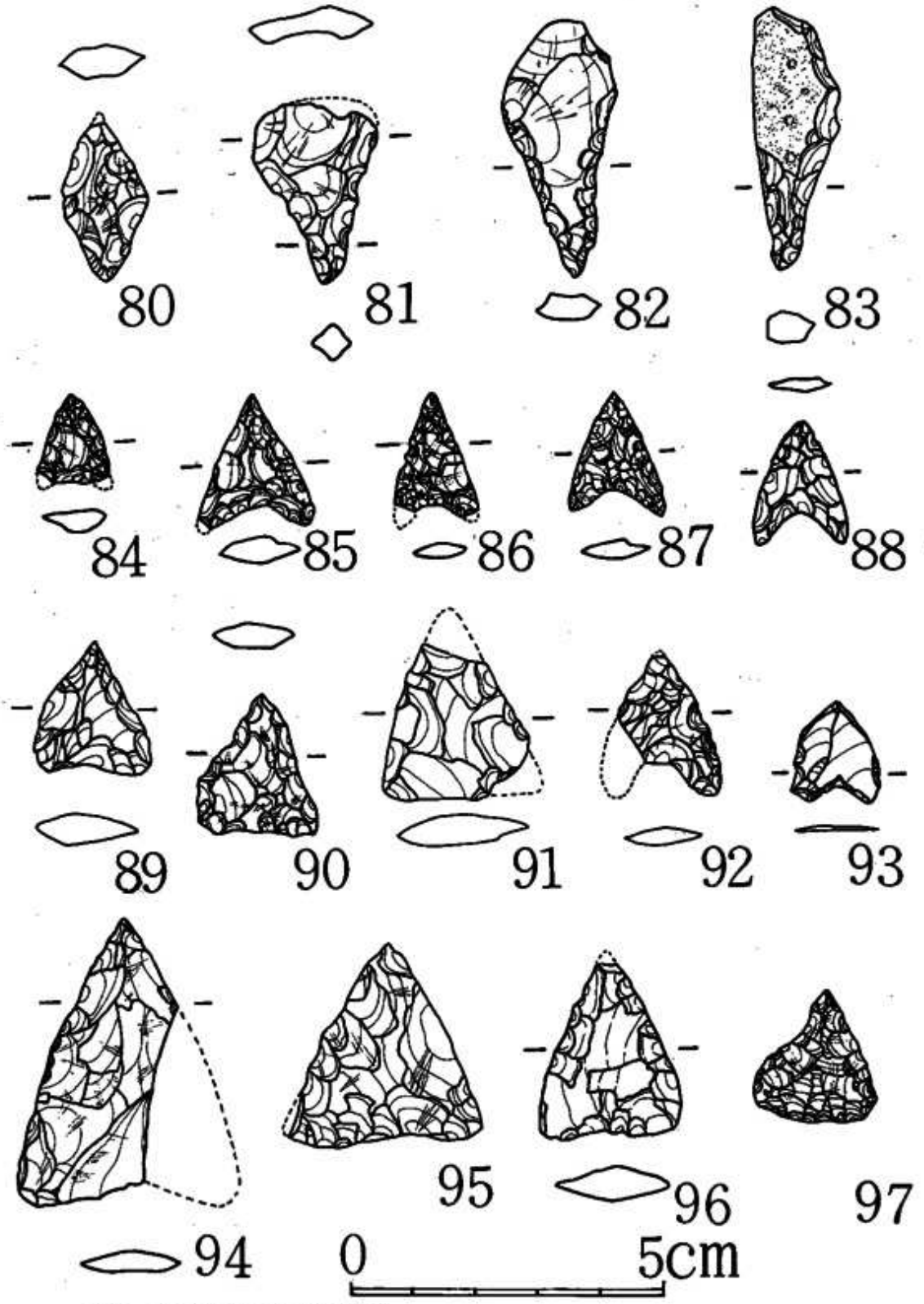


図59　石器実測図（第2次調査）

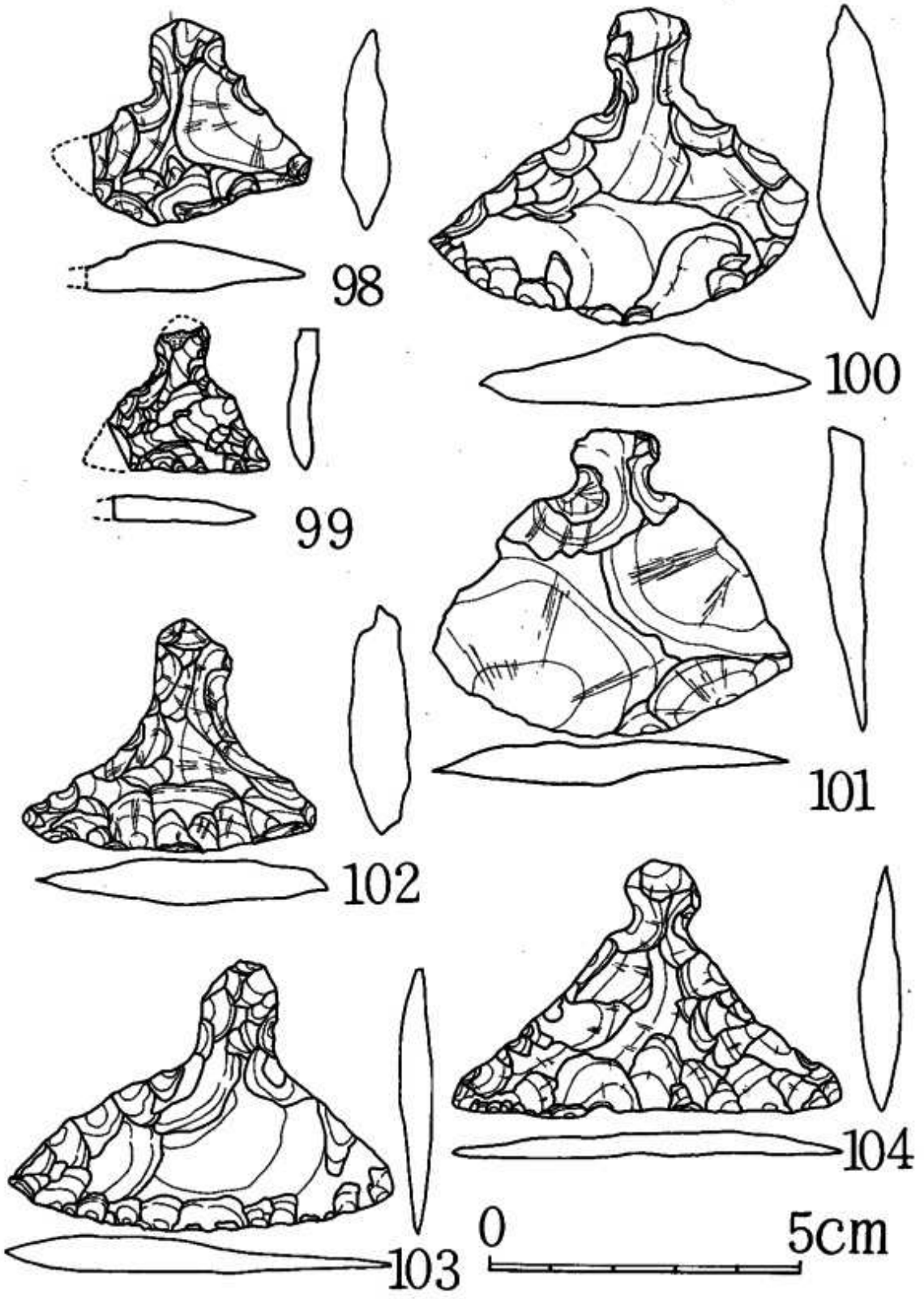


図60　石器実測図（第2次調査）

第Ⅵ章　まとめ

北信地方も高速道時代の幕開けが近づき埋蔵文化財の調査も急ピッチで進められている。そして、調査地の近くに予定されている上信越自動車道立ヶ花インターの開通も数年後にひかえ、この関連事業の新立ヶ花橋建設に伴う取付道路用地内に本遺跡が該当することから緊急発掘を2次にわたって実施した。

この成果は、住居址2軒、多数の土坑(壙) 柱穴などを検出し、多量の土器、石器を得ることができた。

立ヶ花遺跡の存在が知られたのは、戦後になってからで、縄文前期、諸磯式の遺跡が母なる川、千曲川沿岸に多い事実も次第に判明してきている。

このうちの下水内郡豊田村上今井の南大原式の標式遺跡出土品に後続する土器群が本遺跡出土品であり、諸磯b式併行を最盛期としてC式（古）の時期までの土器が量的に減少しながら存在する。以後、弥生後期・古墳時代の遺構・遺物は僅かである。

2軒の住居址は、諸磯b式後半と推定したが、総持柱の楕円形の平面を有する住居址は、南側に大きな土坑（壙）を持つことは、飯山市大倉崎例と同一で、火床の存在も確認された。

検出された土器は、器形が変化に富み、用途別に造型されており、縁孔をもつ浅鉢は赤彩されているものが多く、縄文人の精神生活の一端を示している。

土器の様相は東まわり西まわりのものがみられ、交流が行われたことを示し、明らかに搬入されたと思われる土器もあり、その出自系統を究明することも重要である。

中部山岳地帯の北よりの地域色として、この諸磯b式期の縄文施文を多用した土器の多いのも、従来から指摘されている内容でその施文原体も多種にわたっている。

このように縄文前期文化期の頂点と画期を示すこの時期の遺跡は、この地方にも多く残されており、本遺跡に後続する遺跡として中野市姥ヶ沢遺跡を挙げることができ、こうして地域の諸磯式併行期の様相も判明しつつあり、独自の編年案の組立ても可能になってきた。

遺跡は前に記した通り、南方は道路、宅地造成などによって破壊されてしまったが、今回調査した北方の、果樹園地帯には、遺構が存在しており、自然堤防上にどのような形態の住居群がどのように配置されているのか、今後に究明すべき課題として残っている。従って保存には充分な留意が必要である。

開発事業の増大によって、今回は好条件の調査期間が設定できず、厳冬の発掘調査となり、凍害などの問題に対処する作業が加わってしまった。

このような事情にかかわらず、発掘参加者の熱意と、地元の区をはじめ多くの方々の御援助によって、無事調査が終了することができました。

こうして、北信の縄文諸磯期を知る多くの知見と資料を得ることができ、該期の様相を究明することに、いささか寄与することと信じている。

4→ 西方からみた
遺跡全景

5← 南からみた
1号住居址

6↑ 諸磯b式土器と
在地系土器

7← 1号住北壁

8→ 1号住の西北部

9↑ 1号住東部上層の古墳時代の土器

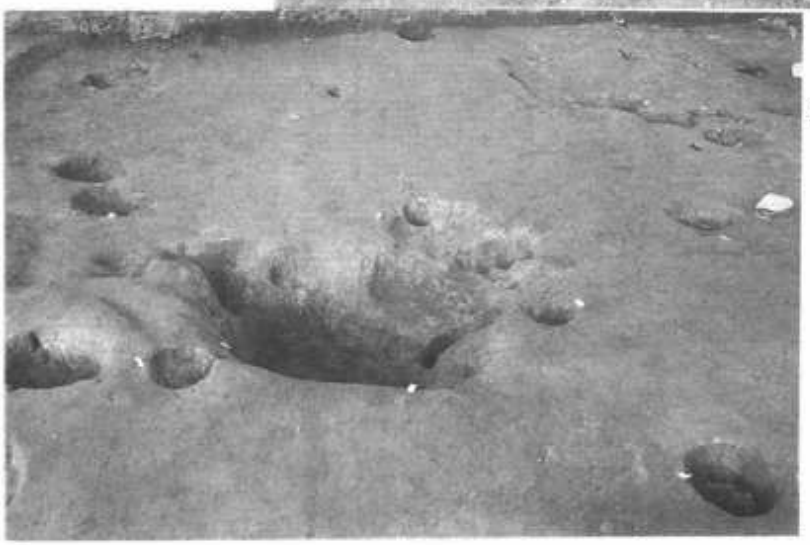
10↓ 1号住北側の石皿と石砥

11← 東南からみた1号住居址

12↑ 1号住の土壙
(1)

13↑ 土壙(1)のチップ

14→ 土壙(1)の底辺



15← 南からみた1号住

17↑ 漁撈形ポイントの出土

16↑ 南からみた2号住

18→ 土壙(4)・(5)

19← 土壙(4)・(5)

20← 2号住の土壙(1)

21→ 2号住の土壙(1)

22← 2号住の土壙(2)

23← 南からみた2号住

24→ 北からみた2号住

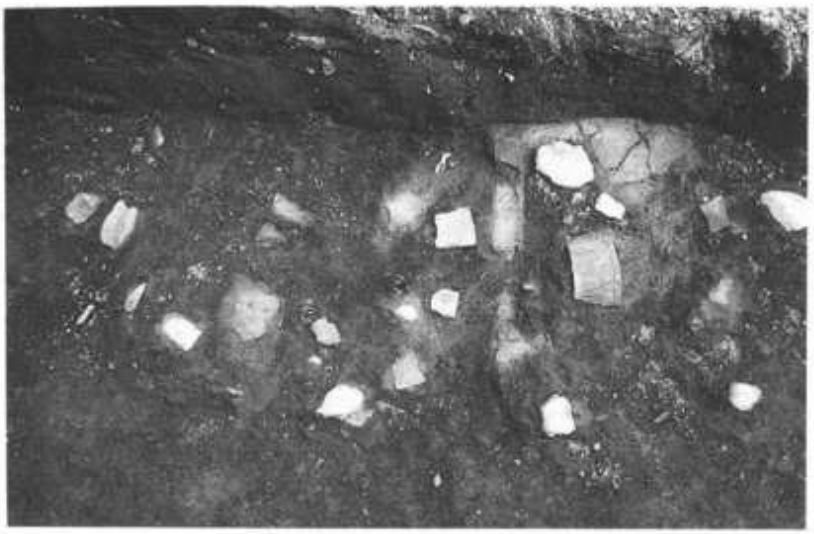
25← 東方からみた平成2年度の調査地点

26← 平成2年度調査の
C地点西側全景

27→ D地点の調査地
遺構はなく地下構
造物があった

28← C地点西の土器
出土状況

29→ C地点西の土器・石すいなどの出土状況



30↑ 同　けつ状耳飾破片の出土

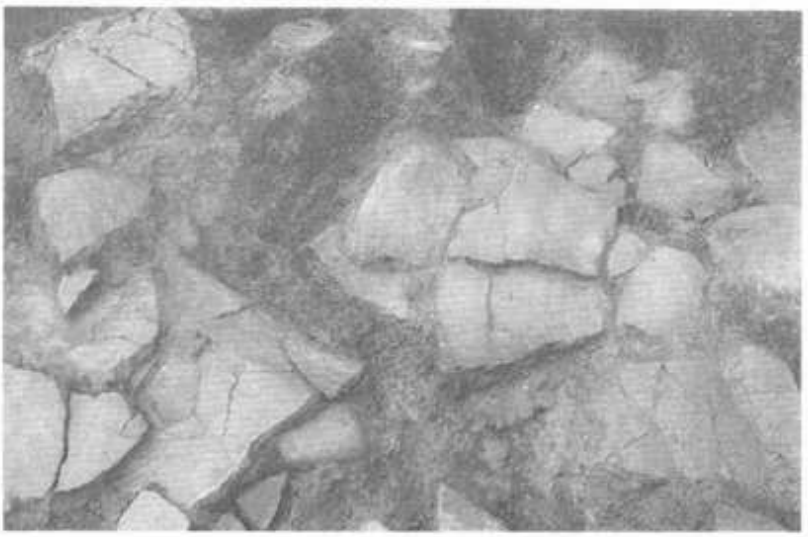
31↑ 同
土器の出土状況

32→ 同
火床のあと

33← C地点の
東南の土器
出土状況

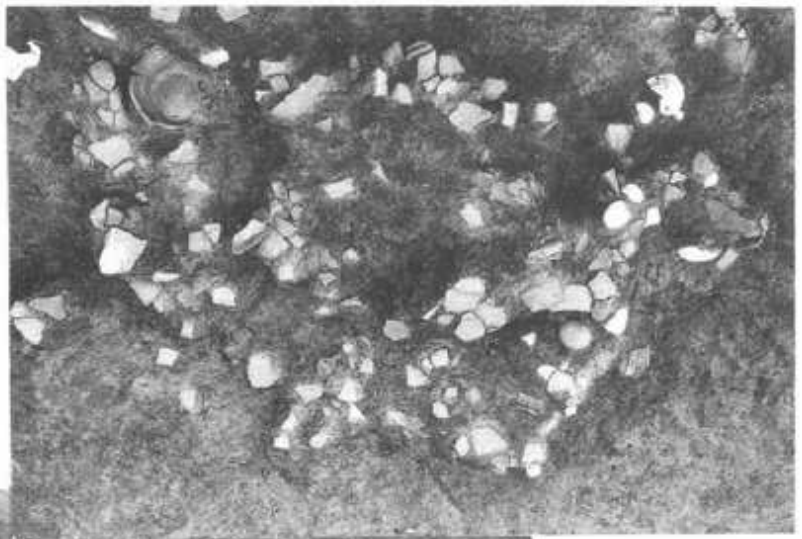
34← 同　左部分

35→ 同　右部分



36← C地点東の土器出土状況

37→ 同



38← 同　土壙上の土器出土状況、左上方は古墳時代の土器出土状況

39↑ 同　石匙の出土状況

40↑ 同　古墳時代の土器の出土状況

41→ 同　北からみた土器集中上層部分

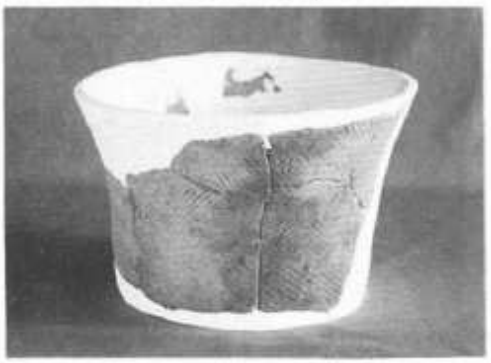
42← 西から見た調査地全景、後方の建物は、建設省千曲川工事事務所立ヶ花出張所

43→ 東から見たC地点西の土壙、柱穴など

44← 東から見た平成元・2年度の調査地全景

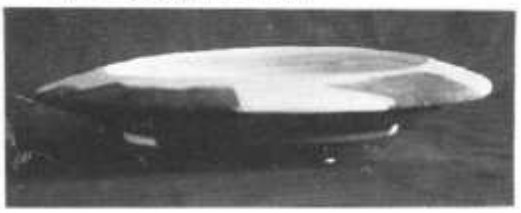
45↑ 1号住居址出土　深鉢

46↑ F20出土の土器

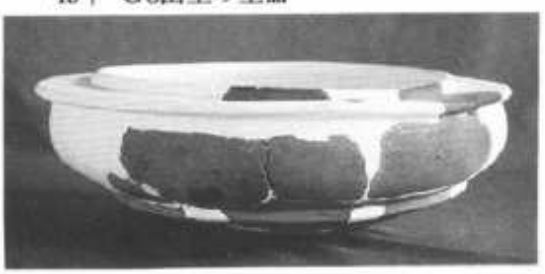


47↑ H20出土の土器

48↑ H20出土土器



49↑ G3出土の土器



50↑ H21出土の土器

51↑ H20出土の土器

52↑ 2号住出土土器

53↑ F20出土の土器

54↑ 2号住SK3東出土土器

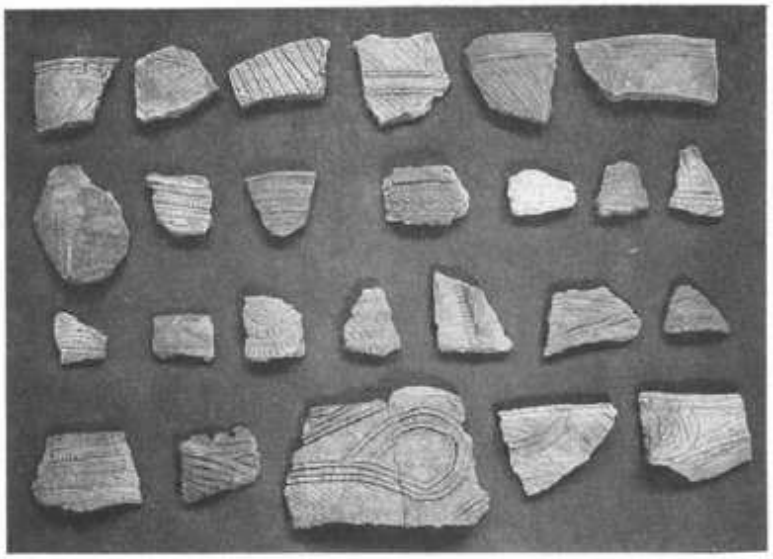
57↑ 1号住SK1出土土器

55↑ G18出土の土器

56↑ 同

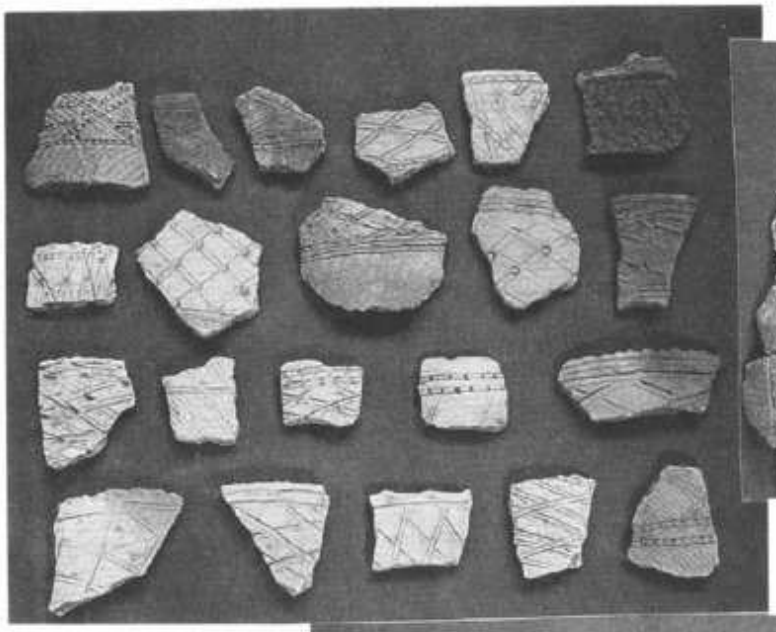
58↑ 1号住上層出土土器

59↑ 第N群土器



60↑ 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器

61↑ 第Ⅲ群土器



62↑ 第Ⅲ・Ⅳ群土器

63↑ E38出土の土器

64→ 第Ⅴ・Ⅵ群土器

66↑ 2号住ＳＫ3出土土器

65↑ 第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器

67→ 第Ⅳ・Ⅴ群土器

68↓ 第Ⅵ群土器

69← 第Ⅵ・Ⅶ群土器

70↑ 第Ⅵ群土器

立ケ花遺跡発掘調査報告書

印　　刷　平成3年3月20日

発 行 日　平成3年3月26日

編集・発行　中野市教育委員会

中野市三好町1—13—19

印 刷 所　カナイ美術印刷